

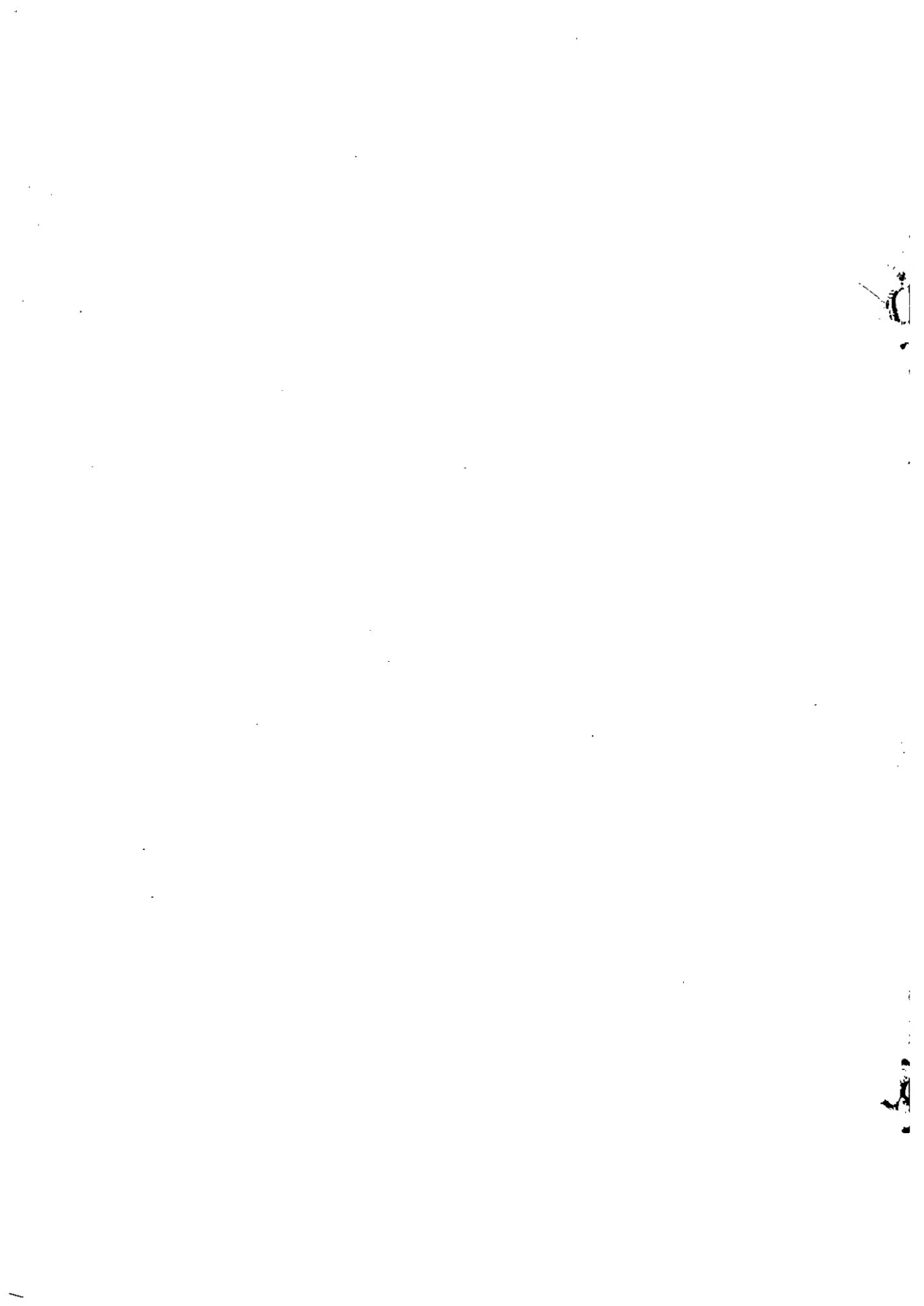
久宝寺南

(その1)

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

— 本文編 —

財団法人 大阪文化財センター



序 文

久宝寺遺跡は河内平野南部に位置する大規模な複合遺跡で、その範囲は南北1.5kmにおよんでいる。遺跡の発見は古く昭和10年にさかのぼるが、発掘調査は、昭和49・50年に近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内の試掘調査およびガス管理設に伴う事前調査が実施されたに過ぎなかった。

このため、今回の発掘調査が本遺跡における最初の大規模調査となったが、調査区域が遺跡の南半部にあたっているため、久宝寺遺跡南地区としてここにその概要を報告するものである。

調査の結果は本文に述べる通りであるが、縄文時代晩期、弥生時代中期、古墳時代、中世そして近世にいたる各時期の遺構・遺物を多数発見することができた。縄文時代晩期については、河川の水辺に来たシカなどの動物とこれを追いかけてきたとみられる縄文人の足跡が多数検出され、弥生時代では大阪湾型銅戈を転用した、今までに出土例のない特異な青銅製品が出土している。古墳時代中期についても、現在の考古学界において注目されている大陸系土器が多数出土するなど、多くの重要な成果をあげることができた。

本遺跡の発掘調査にあたっては、日本道路公団大阪建設局、財団法人大阪文化財センターをはじめ調査関係各位並びに多数の方々のご協力とご援助をいただいた。ここに深く感謝の意を表すとともに、今後とも温かいご支援を賜るよう切望してやまない。

昭和62年3月31日

大阪府教育委員会

文化財保護課長 吉房 康幸

序 文

近畿自動車道天理～吹田線関連の15遺跡の発掘調査も、亀井北遺跡の調査が昭和61年3月に終了し、無事終結の運びとなった。この河内平野の中央部を南北に縦断する調査は、昭和51年以来、10年余の歳月と多数の関係者の手によって、日本発掘史上空前の規模で遂行されてきた。

河内平野に地中深く埋没する遺跡群は、これまでその深さの故に、ほとんど実体が不明であった。大和川がもたらした膨大な土砂は、通常の手段での調査を著しく困難なものとしており、安易に調査者を近づけなかった。

それが、鋼矢板等を使用して行った今回の調査によって、縄文時代から現代に至るまで、河内平野で綿々と展開されてきた人々の営為が眼前のものとなった。しかも、調査を拒んだ膨大な土砂が、逆に各遺構面を保護する働きをしていたために、極めて残存状態の良い遺構、遺物が検出されている。その残りの良さは、縄文人が鹿を追って走り回ったり、稲作りを始めた弥生人が洪水の襲来に恐れ戦く姿まで容易に推測できるほどであった。

また、残存状態の良好さとともに、その分布の稠密さも特筆すべきものであった。天理～吹田線関連遺跡では最北端に位置する新家遺跡より最南端の大堀遺跡まで、約13kmに渡ってほとんど途切れることなく遺構、遺物の存在が確認されている。検出された遺構、遺物は膨大なものであり、各時代の居住域、墓域、生産域等が有機的な関連の中で捉えられている。

このように、今回の調査は、河内平野の低湿地の遺構群の様相をかなりの程度明確にし、多大な成果を挙げることができた。しかしながら、今回の調査をもってしても、広大な河内平野の中にか細い一本の線を入れた程度のものであり、遺構群の横方向への面的な拡がりを始めとして多くの課題を残している。これから以降、河内平野において、このような形での調査が可能かどうかは不明であるが、ともかくも、我々の使命としては、発掘した膨大な資料の十全な整理を実施し、報告書の刊行は勿論のこと、あらゆる機会を捉えて調査成果の公開を図る所存である。

本書は、遺跡範囲が、1.5kmと長大なため、5つに分割した久宝寺遺跡の調査区の内南地区その1の概要報告書である。この調査区は、延長500m近い長さがあり、掘削深度も最深部では6mにも及んで調査関係者に多くの労苦を強いた。また、大阪府教育委員会、日本道路公団を始めとする関係各機関、諸先生、並びに多数の方々のお協力、御援助を頂いた。ここに感謝の意を表すると共に、今後とも当センターのために温かい御支援を賜うよう切望して止まない。

昭和62年3月

財団法人 大阪文化財センター
理事長 坪井 清足

例 言

1. 本書は、日本道路公団が建設を進めている近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う発掘調査のうち、八尾市西久宝寺を中心として所在する久宝寺遺跡南地区（その1）の発掘調査概要報告書である。
2. 本調査は、大阪府教育委員会、及び財団法人大阪文化財センターが、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて実施したものである。
3. 本調査に要した費用651,597,000円は、すべて日本道路公団が負担した。
4. 本調査は、昭和57年7月5日より昭和60年3月31日までの間実施した。
5. 本調査、並びに本書の作成については、大阪府教育委員会の指導の下、財団法人大阪文化財センターが実施した。現地における調査は、業務第3係が担当し、係長赤木克視、技師今村道雄・松岡良憲が従事した。
6. 本書の作成については、発掘調査終了後も継続して作業を進め、昭和62年3月31日をもって完成をみた。
7. 調査に際しては、日本道路公団大阪工事事務所、大阪府八尾土木事務所、八尾警察署、久宝寺水利組合等に格別の配慮を受けた。

また、本調査、及び遺物整理、本書作成の過程で、以下の学生諸氏の協力を得た。

阿波ゆかり・池田恭子・池本由記子・池辺佳世・石川喜子・石丸雅之・泉 佳男・井田和代・稲地智子・井上まゆみ・宇佐美雅子・卯野佳代・大川内陽子・緒方 操・奥 剛一・奥村浩一・小谷正樹・柿沼菜穂・笠井 勉・総谷洋子・川淵悦子・木原美鈴・木下真理子・木村聡子・清崎かおり・鐵 英樹・黒田 淳・黒田尚子・高津晴美・酒谷佳子・佐々木真弓・清水 篤・城東成子・澄野宏子・武内麻里子・武内良文・瀧田恵子・武林真由美・武林美知代・田中千賀・田邊美恵・丹原佐智子・鄭 瑠美・寺前陽代・辻林美幸・辻本美貴・東条 弘・東条美知子・徳弘美佐・友田雅裕・中谷裕美子・永安 隆・那須明恵・奈良谷学・西 敬子・西岡誠司・西田 恵・西原清美・萩原 通・碓 和子・服部泰典・浜安美香・原村典子・坂東成子・張本洋一・東谷内和子・平田美千代・平峯正志・福田恵理子・福山ひろ子・藤田昌代・堀田真澄・前田佳久・柗田真樹子・柗野晴美・松井真弓・丸岡陸代・三浦禎子・宮田 茂・三好孝一・森久美子・森谷義晴・森本晋・保田裕子・安平勝利・山上 弘・山口 隆・山崎純美・山脇道子・吉岡直子・渡邊充代・（五十音順）

8. 本調査では、考古学、及び関連諸科学の分野からの各種分析、鑑定を以下の諸氏に依頼した。

水田土壤	近畿大学教授	川村三郎
土器胎土	八尾市立刑部小学校教諭	奥田 尚
〃	八尾市教育委員会	米田敏幸

動物足跡

奈良国立文化財研究所

土肥 孝

石器

京都大学大学院

森本 晋

また、以下の方々には、貴重な御助言、御教示を得た。記して感謝の意を表する。

田中 琢・佐原 眞・岩永省三（奈良国立文化財研究所）、都出比呂志（大阪大学）、泉 拓良（奈良大学）、大野 薫（大阪府教育委員会）、松尾裕信（大阪市文化財協会）、河野雄次（徳島県教育委員会）、杉谷愛像（米子市教育委員会）。

上記の諸氏以外にも多数の方々からの貴重な助言を賜った。合わせて感謝の意を表する。

9. 本調査は、A～Dの4本のトレンチを中心とする4つの地区に分割して実施されたが、A・D地区を今村が、B・C地区を松岡が担当した。

10. 本書の執筆分担は、第I、第II章を赤木、第III章のB、C地区を松岡、第IV章のA、D地区を今村、付章を山口、森本、奥田、三好が担当している。

また、本書作成作業には陣内暢子、村上富喜子、森屋美佐子、松山 聡、江浦 洋、三好孝一に多大な協力を得た。

11. 編集については、赤木、森屋、三好が担当した。しかし、本調査後の各担当者の整理場所が別個の場所で行われたため、特にIII、IV章では体裁が大いに異なっている。それについては、それぞれの考え方もあるため、あえて統一しなかった。したがって、それぞれの章は、独立したものとして認識されんことを望む。

なお、本文第IV章、及び付章第5節以外については昭和60年6月以前に脱稿となっている。そのため、それ以降に判明した新知見は反映されていない。

12. 本書の遺構実測図の方位は、すべて座標北である。また、レベルはT.P.（東京湾標準海水準）である。

13. 本調査にあたっては、写真、実測図を始めとして多くの記録を作成している。本書に掲載しているものはその一部であり、他に多くの記録が財団法人大阪文化財センターで保管されている。広く利用されることを希望する。

久宝寺南（その1）

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

目 次

序文	大阪府教育委員会文化財保護課長	吉房康幸	i
序文	財団法人大阪文化財センター理事長	坪井清足	ii
例言			iii
目次			v
第I章 調査に至る経過		赤木克視	1
第II章 調査の方法		赤木	2
第III章 B、Cトレンチの調査成果			5
第1節 基本層序と遺構面		松岡良憲	5
第2節 B、Cトレンチの調査		松岡	10
第IV章 A、D地区の調査成果			152
第1節 A地区の調査		今村道雄	152
第2節 D地区の調査		今村	188
第3節 まとめ		今村	275
付章			
第1節 久宝寺遺跡南地区第1調査区出土動・植物遺体の同定について		山口誠治	279
第2節 久宝寺遺跡南地区第1調査区出土の石器について		森本 晋	287
第3節 久宝寺遺跡南地区第1調査区出土土器胎土の砂礫観察		奥田 尚	323
第4節 久宝寺遺跡南地区第1調査区出土土器の偏光顕微鏡による砂礫観察		奥田	335
第5節 久宝寺遺跡南地区第1調査区出土の青銅製品		三好孝一	368

挿 図 目 次

第II章 調査の方法	
第 1 図	トレンチ調査方式模式図…………… 2
第 2 図	トレンチ位置図…………… 3
第 3 図	地区割方法…………… 3
第 4 図	久宝寺遺跡と周辺の遺跡 (1/50,000) …… 4
第III章 B. Cトレンチの調査成果	
第 5 図	土層断面模式図…………… 6
第 6 図	土層断面略図…………… 7～8
第 7 図	縄文時代土層断面図 (Bトレンチ北側) …… 10
第 8 図	縄文時代晩期河川 (J-SR-1) 出土遺物…………… 11
第 9 図	縄文時代晩期河川 (J-SR-1) 出土土器…………… 12
第 10 図	縄文時代河川跡…………… 13
第 11 図	縄文時代晩期河川跡 (J-SR-1) 横断面…………… 13
第 12 図	縄文時代後 (晩期) 自然河川跡 (J-SR-2) Bトレンチ北端部遺構平面図 14
第 13 図	縄文時代後期河川横断面図 (Bトレンチ北端) …… 14
第 14 図	縄文時代後期河川跡 (J-SR-2) 出土土器…………… 14
第 15 図	縄文時代第 1 遺構面 (1) コンター図…………… 15～16
第 16 図	縄文時代第 1 遺構面 (2) コンター図…………… 17～18
第 17 図	弥生時代溝平面及び断面図 (Y-SD-32) …… 20
第 18 図	足跡群 (上B-3、下C-3 拡張区) …… 21
第 19 図	弥生時代第 1 遺構面下層遺構 (C-3、4 拡張区) …… 22
第 20 図	弥生時代第 1 遺構面 (1) …… 23～24
第 21 図	弥生時代第 1 遺構面 (2) …… 25～26
第 22 図	溝、及び包含層出土土器…………… 27
第 23 図	大型畦畔、及び水口 (B-6 拡張区) …… 28
第 24 図	大型畦畔横断面土層図 (Bトレンチ) …… 28
第 25 図	1号方形周溝墓平面、及びコンター図…………… 30
第 26 図	土層断面図…………… 30
第 27 図	1号、2号方形周溝墓遺物出土状況図…………… 31
第 28 図	2、3号方形周溝墓平面、及びコンター図…………… 31
第 29 図	5号方形周溝墓平面、及びコンター図…………… 31
第 30 図	6号方形周溝墓平面、及びコンター図…………… 32

第 31 図	6号方形周溝墓東側周溝内上部遺物出土状況図	32
第 32 図	6号方形周溝墓東側周溝内下部遺物出土状況図	32
第 33 図	7号方形周溝墓土層断面図	33
第 34 図	7号方形周溝墓平面、及びコンター図	33
第 35 図	8号方形周溝墓平面、及びコンター図	34
第 36 図	7、8号方形周溝墓付近遺物出土状況図	34
第 37 図	土墳 (Y-SK-38)、及び遺物出土状況図	35
第 38 図	溝 (Y-SD-38) 溝内遺物出土状況図	35
第 39 図	弥生時代第2遺構面下層遺構 (C-3・4 拡張区)	36
第 40 図	方形周溝墓出土土器	38
第 41 図	方形周溝墓出土土器	39
第 42 図	方形周溝墓出土土器 (7号方形周溝墓、及び7号方形周溝墓南側土器群)	40
第 43 図	弥生時代第2遺構面下層遺構出土土器	41
第 44 図	弥生時代第2遺構面 (1)	43~44
第 45 図	弥生時代第2遺構面 (2)	45~46
第 46 図	弥生時代第3遺構面上層遺構 (Y-SR-1)	49
第 47 図	弥生時代第3遺構面出土土器拓影	50
第 48 図	弥生時代第3遺構面 (1)	51~52
第 49 図	弥生時代第3遺構面 (2)	53~54
第 50 図	弥生時代前期土器実測図	55
第 51 図	自然河川跡検出状況 (Bトレンチ・K-SR-1)	61
第 52 図	古墳時代河川跡 (K-SR-1) 出土土器	62
第 53 図	古墳時代第1遺構面 (1)	63~64
第 54 図	古墳時代第1遺構面 (2)	65~66
第 55 図	古墳時代第2遺構面 (1)	71~72
第 56 図	古墳時代第2遺構面 (2)	73~74
第 57 図	古墳時代水田跡大型畦畔盛土内出土土器	75
第 58 図	1号墓平面、及びコンター図	76
第 59 図	2、6号墓、K-SX-8平面、及びコンター図	77
第 60 図	3号墓平面、及びコンター図	78
第 61 図	3号墓周溝内土層断面図	79
第 62 図	3号墓周溝内土器出土状況図	80
第 63 図	3号墓上層、及び周溝外土器群出土状況図	81~82
第 64 図	3号墓周溝内下層、及び周溝外土器群出土状況図	83~84

第 65 図	4号墓平面、及びコンター図	85
第 66 図	4号墓南北方向土層断面図	86
第 67 図	5号墓平面、及びコンター図	86
第 68 図	6号墓周溝、及び古墳時代前期水田土層関係図	87
第 69 図	1号墓出土土器	87
第 70 図	2号墓出土土器 (K-SX-8)	88
第 71 図	3号墓上層堆積出土土器	89
第 72 図	3号墓上層堆積出土土器	90
第 73 図	3号墓周溝外土器集積出土土器	91
第 74 図	3号墓周溝外土器集積出土土器 (K-SX-3)	92
第 75 図	3号墓周溝外土器集積出土土器 (K-SX-4)	93
第 76 図	3号墓周溝外土器集積出土土器 (K-SX-6)	94
第 77 図	3号墓周溝内下層出土土器	95
第 78 図	3号墓周溝内下層出土土器	96
第 79 図	3号墓周溝内下層出土土器	97
第 80 図	3号墓周溝内下層出土土器	98
第 81 図	3号墓周溝内下層出土土器、石器、木片	99
第 82 図	4号墓周溝、及び周溝内出土土器	100
第 83 図	5号墓出土土器	100
第 84 図	6号墓出土土器	100
第 85 図	古墳時代第3遺構面 (1)	101~102
第 86 図	古墳時代第3遺構面 (2)	103~104
第 87 図	畑状遺構内土器出土状況図	106
第 88 図	畑状遺構出土土器	107
第 89 図	古墳時代第4遺構面 (1)	109~110
第 90 図	古墳時代第4遺構面 (2)	111~112
第 91 図	歴史時代第1遺構面 (1)	135~136
第 92 図	歴史時代第1遺構面 (2)	137~138
第 93 図	歴史時代第2遺構面 (1)	139~140
第 94 図	歴史時代第2遺構面 (2)	141~142
第 95 図	歴史時代第4遺構面 (1)	143~144
第 96 図	歴史時代第4遺構面 (2)	145~146
第 97 図	歴史時代出土土器	150

第IV章 A. D地区の調査

第1節 A地区の調査

第 98 図	第 5・4 遺構面出土土器実測図	154
第 99 図	第 3 遺構面畦畔、溝実測図	155
第 100 図	第 3・2 遺構面出土土器実測図	156
第 101 図	第 3・2 遺構面出土木器実測図	157
第 102 図	第 2 遺構面落込—3 (炉跡—1) 平面・土層断面実測図	158
第 103 図	第 2 遺構面落込—2 遺物出土状況平面・土層断面実測図	159
第 104 図	第 2 遺構面井戸—1 平面・断面実測図	160
第 105 図	第 2 遺構面河川—1 出土木器実測図	161
第 106 図	第 2 遺構面落込—1 (河川—1 埋没後) 土器出土状況実測図	162
第 107 図	第 2 遺構面河川—2 と杭群平面実測図—(1)	163
第 108 図	第 2 遺構面河川—2 と杭群平面実測図—(2)	164
第 109 図	第 2 遺構面河川—2 出土木器実測図—(1)	166
第 110 図	第 2 遺構面河川—2 出土木器実測図—(2)	167
第 111 図	弥生時代中期以前の遺構面河川—2・3 出土土器実測図	168
第 112 図	古墳時代第 2 遺構面粘土層・河川—2・3 出土土器実測図	169
第 113 図	A トレンチ・A-5 トレンチ第 2 遺構面出土土器実測図	170
第 114 図	第 2 遺構面河川—1 出土土器実測図—(1)	171
第 115 図	第 2 遺構面河川—1 出土土器実測図—(2)	172
第 116 図	第 2 遺構面河川—1・落込—1 出土土器実測図—(1)	173
第 117 図	第 2 遺構面落込—1 出土土器実測図—(2)	174
第 118 図	第 2 遺構面落込—1 出土土器実測図—(3)	175
第 119 図	第 2 遺構面遺構・包含層出土土器実測図	176
第 120 図	第 2 遺構面・第 1 遺構面出土土器実測図	177
第 121 図	出土土器細部拓影	178
第 122 図	出土土器 (把手) 実測図	179

第2節 D地区の調査

第 123 図	第 8 遺構面建物—1 平面実測図・見透し図	192
第 124 図	第 8 遺構面建物—1・他柱根実測図	193
第 125 図	第 8 遺構面土城—1・3 平面・断面実測図	194
第 126 図	第 8 遺構面土城—2 出土木器実測図	195
第 127 図	第 8・6 遺構面井戸—1・2 平面・断面実測図	196
第 128 図	第 8 遺構面井戸—1 出土板材実測図	197
第 129 図	第 8 遺構面溝平面・断面実測図	198

第 130図	D-2 トレンチ第8 遺構面の2 溝・土壌平面実測図	199
第 131図	第7 遺構面建物-2 (右)・3 (左) 平面実測図	200
第 132図	第7 遺構面建物-2・3 土層断面図	201
第 133図	第7 遺構面建物-2・3 柱根実測図	202
第 134図	第8・7 遺構面建物-1~3・5 他ピット断面図	203
第 135図	第7 遺構面建物-4 (右)・5 (左) 平面実測図	204
第 136図	第8 遺構面建物-4・5 土層断面図	205
第 137図	第7 遺構面建物-5 柱根実測図	206
第 138図	第7 遺構面高台-13平面・断面実測図	206
第 139図	第7 遺構面土壌5・6・13~15・27平面・断面実測図	207
第 140図	第7 遺構面土壌-27出土土器実測図	208
第 141図	第7 遺構面サヌカイト集積ピット位置図	209
第 142図	黒色粘土上層上面コンター図	210
第 143図	第6 遺構面土壌-17・18・20・21・23・落込-2 平面・断面実測図	211
第 144図	第6 遺構面土壌-24・25平面・断面実測図	212
第 145図	D-7 トレンチ第5 遺構面河川-1 杭列平面見透し図、杭実測図	217
第 146図	第3 遺構面落込-1 平面・断面実測図	218
第 147図	第3 遺構面・土壌-1 他土器出土状態平面・断面実測図	219
第 148図	D-5 トレンチ第3 遺構面1号墳・溝-1 平面・断面実測図	221
第 149図	第3 遺構面住居跡-1 下層平面・断面実測図	223
第 150図	第9 遺構面河川-1・2 出土土器実測図	226
第 151図	第10遺構面河川-3 出土土器実測図	227
第 152図	第7 遺構面高台1・2・3 (建物-2) 出土土器実測図	228
第 153図	第7 遺構面高台4・5・6 出土土器実測図	229
第 154図	第6 遺構面落込-1・2、土壌16・18出土土器実測図	230
第 155図	第6 遺構面土壌-19・21・23・24出土土器実測図	231
第 156図	第8・7 遺構面土壌-3、溝、サヌカイト集積ピット出土土器実測図	232
第 157図	第8・6 遺構面井戸-1・2 出土土器実測図	233
第 158図	第7 遺構面土壌-27、他出土土器実測図	234
第 159図	第7 遺構面高台-5 (建物-5)、土壌-15出土土器実測図	235
第 160図	土壌他出土土器実測図	236
第 161図	D トレンチ包含層出土土器実測図- (1)	237
第 162図	D トレンチ包含層出土土器実測図- (2)	238
第 163図	D トレンチ包含層、第6 遺構面落込-2 出土土器実測図	239

第 164 図	D-1・D-2 トレンチ包含層出土土器実測図	240
第 165 図	D-2 トレンチ包含層出土土器実測図	241
第 166 図	D トレンチ包含層、第 6 遺構面土城—22・24・26、溝50・溝53上層 出土土器実測図	242
第 167 図	D トレンチ青灰色粘土～黒色粘土層上面、第 6 遺構面土城25、落込—1、溝50 出土土器実測図	243
第 168 図	第 5 遺構面河川—1・水田および水路出土土器実測図	244
第 169 図	第 5 遺構面河川—1 及び包含層出土土器実測図—(1)	245
第 170 図	D トレンチ包含層出土土器実測図—(2)	246
第 171 図	D トレンチ包含層出土土器実測図—(3)	247
第 172 図	第 3 遺構面住居跡—1・溝・包含層出土土器実測図	248

表 目 次

B・C トレンチ

表 1	弥生時代第 2 遺構面方形周溝墓一覧表	34
表 2	弥生時代第 2 遺構面下層遺構一覧表	37
表 3	弥生時代遺物観察表 (その 1～その 5)	56～60
表 4	古墳時代第 2 遺構面水田跡規模一覧表 (その 1～その 3)	68～70
表 5	古墳時代遺物観察表 (その 1～その 21)	113～133
表 6	歴史時代遺物観察表	151

A・D 地区

表 7	A 地区土器観察表 (その 1～その 8)	180～187
表 8	D 地区土器観察表 (その 1～その 26)	249～274

付 図 目 次

A地区

付図-1 Aトレンチ土層断面図〔タテS=1/40, ヨコS=1/400〕

付図-2 第8～6遺構面（縄文時代）〔S=1/20, 1/200〕

付図-3 第5遺構面（弥生時代中期）〔S=1/20, 1/200〕

付図-4 第4遺構面（弥生時代中期）〔S=1/20, 1/200〕

付図-5 第3・2遺構面（古墳時代）〔S=1/200〕

付図-6 第1遺構面（近世以降）〔S=1/200〕

D地区

付図-7 Dトレンチ土層断面図〔タテS=1/40, ヨコS=1/400〕

付図-8 第10遺構面（縄文時代）〔S=1/200〕

付図-9 第10・9遺構面（縄文時代）〔S=1/200〕

付図-10 第10・9遺構面（縄文時代）〔S=1/300〕

付図-11 第8遺構面（弥生時代中期）〔S=1/20, 1/200〕

付図-12 第7遺構面（弥生時代中期）〔S=1/20, 1/200〕

付図-13 第6遺構面（弥生時代中期）〔S=1/20, 1/200〕

付図-14 第5遺構面（弥生時代後期）〔S=1/20, 1/200〕

付図-15 第4～2遺構面（弥生時代後期～古墳時代）〔S=1/20, 1/200〕

付図-16 第3・2遺構面（弥生時代後期～中世）〔S=1/20, 1/200〕

付図-17 第1遺構面（近世以降）〔S=1/200〕

付章目次

第1節 久宝寺遺跡南地区第1調査区出土動・植物遺体の同定について

表1	動物遺体同定結果一覧表	280
表2	植物遺体同定結果一覧表	281~282
図版1	植物遺体(稲穂)	285
図版2	動・植物遺体(稲穂、ニホンジカ)	286

第2節 久宝寺遺跡南地区第1調査区出土の石器について

図1	Bトレンチ出土の石器(1)	288
図2	Bトレンチ出土の石器(2)	289
図3	Cトレンチ出土の石器	290
図4	Dトレンチ出土の石器(1)	292
図5	Dトレンチ出土の石器(2)	293
図6	Dトレンチ出土の石器(3)	295
図7	Dトレンチ出土の石器(4)	296
図8	Dトレンチ出土の石器(5)	297
図9	Dトレンチ出土の石器(6)	300
図10	Dトレンチ出土の石器(7)	301
図11	Dトレンチ出土の石器(8)	305
図12	Dトレンチ出土の石器(9)	306
図13	サヌカイト集積ピット出土の石器	311
表1	サヌカイト集積ピット出土遺物	307
表2	5mm以上の剥片の統計測定	307
表3	ピット1上層	307
表4	ピット1下層	308
表5	ピット1全体	308
表6	ピット2	308
表7	ピット1上層	309
表8	ピット1下層	309
表9	ピット1計	309
表10	ピット2	309
表11	ピット1	310
表12	ピット2	310

表13	D e - 2 の 2 土 壤 サ ン プ ル	310
表14	D - 1 第 6 面 サ マ カ イ ト 溜 り	310
表15	剝 片 の 末 端 の 形 状	310
表16	剝 片 の 残 存 部 位 別 点 数	310
図版 1	B、C ト レ ン チ 出 土 の 石 器	315
図版 2	D ト レ ン チ 出 土 の 石 器 (1)	316
図版 3	D ト レ ン チ 出 土 の 石 器 (2)	317
図版 4	D ト レ ン チ 出 土 の 石 器 (3)	318
図版 5	D ト レ ン チ 出 土 の 石 器 (4)	319
図版 6	D ト レ ン チ 出 土 の 石 器 (5)	320
図版 7	D ト レ ン チ 出 土 の 石 器 (6)	321
図版 8	サ マ カ イ ト 集 積 ピ ッ ト 2 出 土 の 石 器	322

第 3 節 久 宝 寺 遺 跡 南 地 区 第 1 調 査 区 出 土 土 器 胎 土 の 砂 礫 観 察

第 1 表	類 型 区 分 基 準 表	324
第 2 表	観 察 表 (1 ~ 5)	325・327・329・331・333
第 3 表	類 型 と 器 種	334

第 4 節 久 宝 寺 遺 跡 南 地 区 第 1 調 査 区 出 土 土 器 の 偏 光 顕 微 鏡 に よ る 砂 礫 観 察

第 1 表	資 料 の 器 種 と 時 期、及 び 構 成 砂 礫 種	336
図版 1	偏 光 顕 微 鏡 写 真	337
	{	}
	50 (計 58 図 版)	367

第 5 節 久 宝 寺 遺 跡 南 地 区 第 1 調 査 区 出 土 の 青 銅 製 品

図 1	久 宝 寺 遺 跡 出 土 青 銅 製 品	368
表 1	大 阪 湾 型 銅 戈 出 土 地 一 覧	370
表 2	大 阪 湾 型 銅 戈 鎔 范 出 土 地 一 覧	371

第 I 章 調査に至る経過

久宝寺遺跡は、近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内に存在する15遺跡の内、北から数えて10番目にあたり、北で佐堂遺跡、南で亀井北遺跡と接する。遺跡は、八尾市西久宝寺を中心として、北端を東大阪市大蓮東の府道大阪～八尾線、南端を大阪市加美東から八尾市神武町にかけての国鉄関西線までを範囲とする広大なものである。道路公団の測量測点で言えばS T A 109+40から124+40までの延長約1.5kmにあたる。西に接する大阪市域側は、大阪市によって加美遺跡として調査されており、久宝寺遺跡と共通の遺構群が検出されている。両遺跡は、この事から行政区画、あるいは調査主体の違いにより遺跡名称が異なっても、同一の遺跡として捉える必要がある。東側についても、広範な遺物散布地が存在しており、加美遺跡も含めれば、遺跡の範囲は100万 m^2 を優に越えるものと思われる。

久宝寺遺跡発見の端緒は、昭和10年に行われた道路工事中に、調査区東方の小字西口・栗林において弥生式土器、土師器、割船の残片が出土した事による。しかし、その後は、周辺において発掘調査がなされず、遺構分布、埋没深度等において新たな知見は加えられなかった。

そうした中で、名神高速から分岐し、近畿圏をネットする高速道路網の一つとして高速自動車国道・近畿自動車道天理～吹田線が日本道路公団により建設される事になった。河内平野の中央部を南北に縦断する吹田～松原間の大坂側（通称・大阪線）は昭和42年に基本計画が決定され、43年より吹田側から工事が着手された。遺跡の存在する東大阪～松原間については、昭和46年度より大阪府教育委員会との間でその取扱いが協議されてきた。久宝寺遺跡についても、その想定範囲が道路予定地内にかかるため協議の対象となり、昭和48年亀井遺跡、友井東遺跡とともに範囲確認のための第一次発掘調査が実施された。

久宝寺遺跡では5×5mの7箇所の特レンチが設定され、G.L. - 5mまで調査された。この結果、G.L. - 4mまでの間に1～4枚の遺構面が検出され、すべての特レンチで遺構、遺物の存在が確認された。しかし、遺構面の広がり、埋没深度については、場所によりかなりの差異がある事も明らかになった。遺跡の中心時期は弥生時代後期から古墳時代前期にかけてであり、この時期の多くの遺物も出土した。また、この他、近世の溝、井戸等、古墳時代から中世にかけての多数のピット群も検出された。ただ、調査面積が狭い事と、調査方法が機械掘削を主としたものであったがために、遺構面が実際にはより多数存在することが今回の調査で明らかになっている。

久宝寺遺跡の調査は、調査区延長が長い為、南北2地区に分けて実施することになり、北地区は昭和55年より先行着手されている。南地区は、調査区をさらに2分割し、市道加美久宝寺線から府道平野中高安線北側約120mの水路までを第1調査区、これより関西線までを第2調査区とし、昭和57年7月より現地調査に着手した。第1調査区は当初は59年2月までの予定であったが、掘削深度の大幅な増加等があって調査期間を延長し、60年2月に現地調査を終了した。

第II章 調査の方法

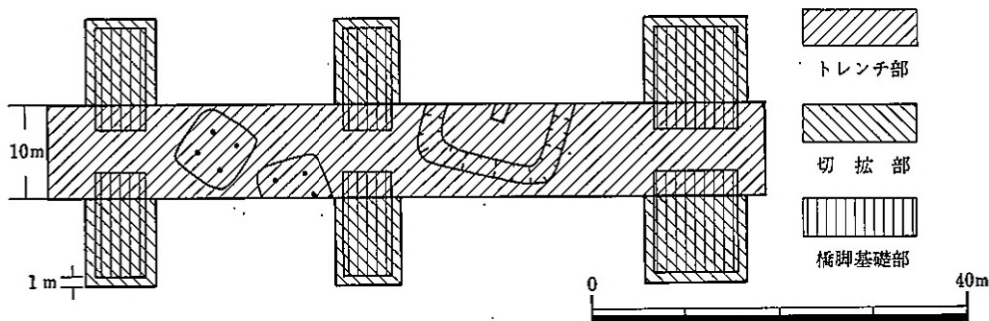
久宝寺遺跡南地区第1調査区は、市道加美久宝寺線から府道平野中高安線北側約120mの水路までを範囲としている。道路公団の測量測点でS T A. 116+20から120+70までの間約450mである。

調査方法は、大阪線で瓜生堂遺跡以来採用している「トレンチ調査方式」を継承している。この方式は、まず約30m幅の路線中央に設定された幅10mのトレンチを調査し、最終遺構面までの遺構、遺物の分布状態を把握する（トレンチ部の調査）。そして、その結果を基に大阪府教育委員会と道路公団が協議し、橋脚建設時の経済性も考慮しながら、出来るだけ遺構、遺物の破壊の少ない位置に高架道路の橋脚を持って来る。その後、トレンチ部で既に調査済の部分を除いた橋脚基礎部の周囲を+1mした範囲を調査するというものである（切払部の調査）。

河内平野の遺跡は、遺構面が重層的に存在している。G.L.-4~5mにもなる最終遺構面の多くは、弥生時代前期や縄文時代後、晩期となり、遺構分布が疎である。このため、この面まで調査が進めば、保存協議の対象になるような遺構は少なく、逆に協議の対象になる上部の遺構はすべて喪失している事になる。このように沖積地の場合は、台地上の遺跡のように調査後に保存協議を行う事が出来ないため、調査方法としては「トレンチ調査方式」が妥当と思われる。なお、トレンチ部の調査は、原則として最終面まで全掘する事になっているが、墓、住居跡等で残存状態の良い遺構は適宜それ以下の掘削を停止し、保存協議の対象とする事になっている。今回の調査ではBトレンチで古墳時代前期、Cトレンチで弥生時代中期の各方形周溝墓を保存している。

調査区は、水路、歩道橋により分断され、A~Dの4本のトレンチが設定された。各トレンチの全長は、Aトレンチ約140m、Bトレンチ約90m、Cトレンチ約30m、Dトレンチ約120mである。切払部は、Aトレンチ10箇所、Bトレンチ6箇所、Cトレンチ4箇所、Dトレンチ8箇所である。C、Dトレンチ間には水路の付替部分の調査が追加されたため、それはC5、6トレンチとしている。

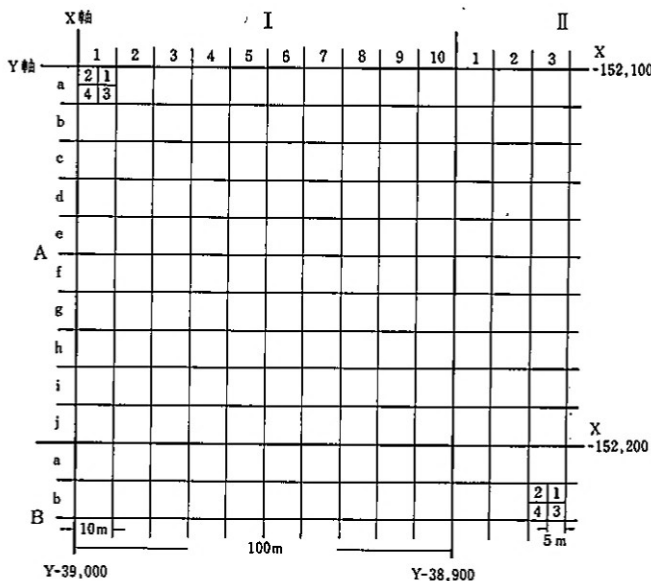
当初予定掘削深度は、AトレンチがG.L.-2.2m、B~Dトレンチ北半が-1.2m、Dトレン



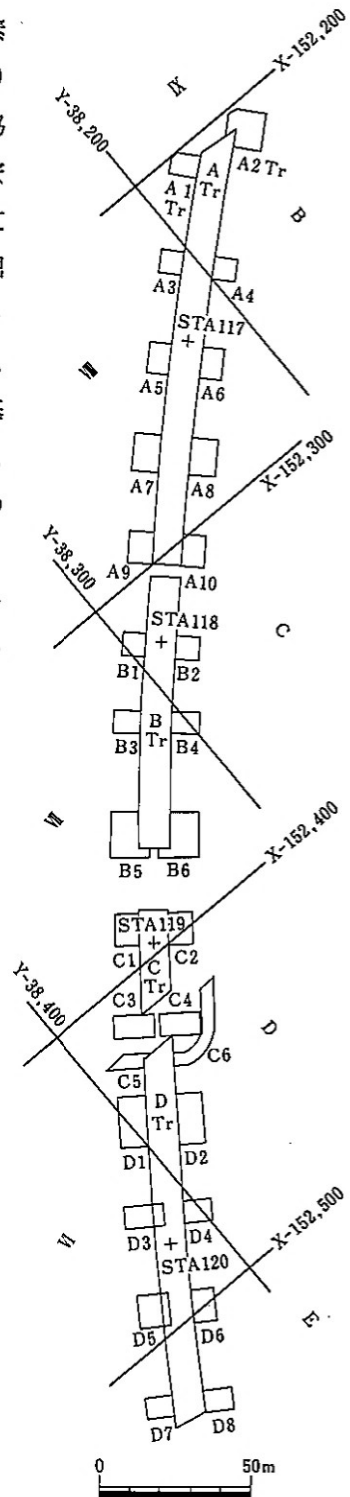
第1図 トレンチ調査方式模式図

チ南半がG.L.-2.0mであった。このため、Aトレンチは7.5m長の鋼矢板を打設し、自立させるが、他は1/1の法をとっての素掘掘削で調査を開始した。しかし、実際に調査を進めると、より下層から新たな遺構面が次々と検出されたため、その都度工法協議を重ね、鋼矢板の打設、さらに土留支保工の追加等で調査の安全を期した。なお、それでも最深部ではG.L.-6mを越える縄文時代の河道が何本か検出され、その部分は既設の土留工法での掘削安全限界G.L.-4.5mを越えてしまった。そうした場所は、トレンチ部では、その中央に筋堀を入れて深さの確認をするに止め、切拡部の調査時に必要な長さの鋼矢板を打設した。また、橋脚基礎部でトレンチ部内に未調査部分の残ったD3、5トレンチでは、基礎部全域を切拡部の調査とし、破壊される部分が未調査で終わる事の無いようにした。

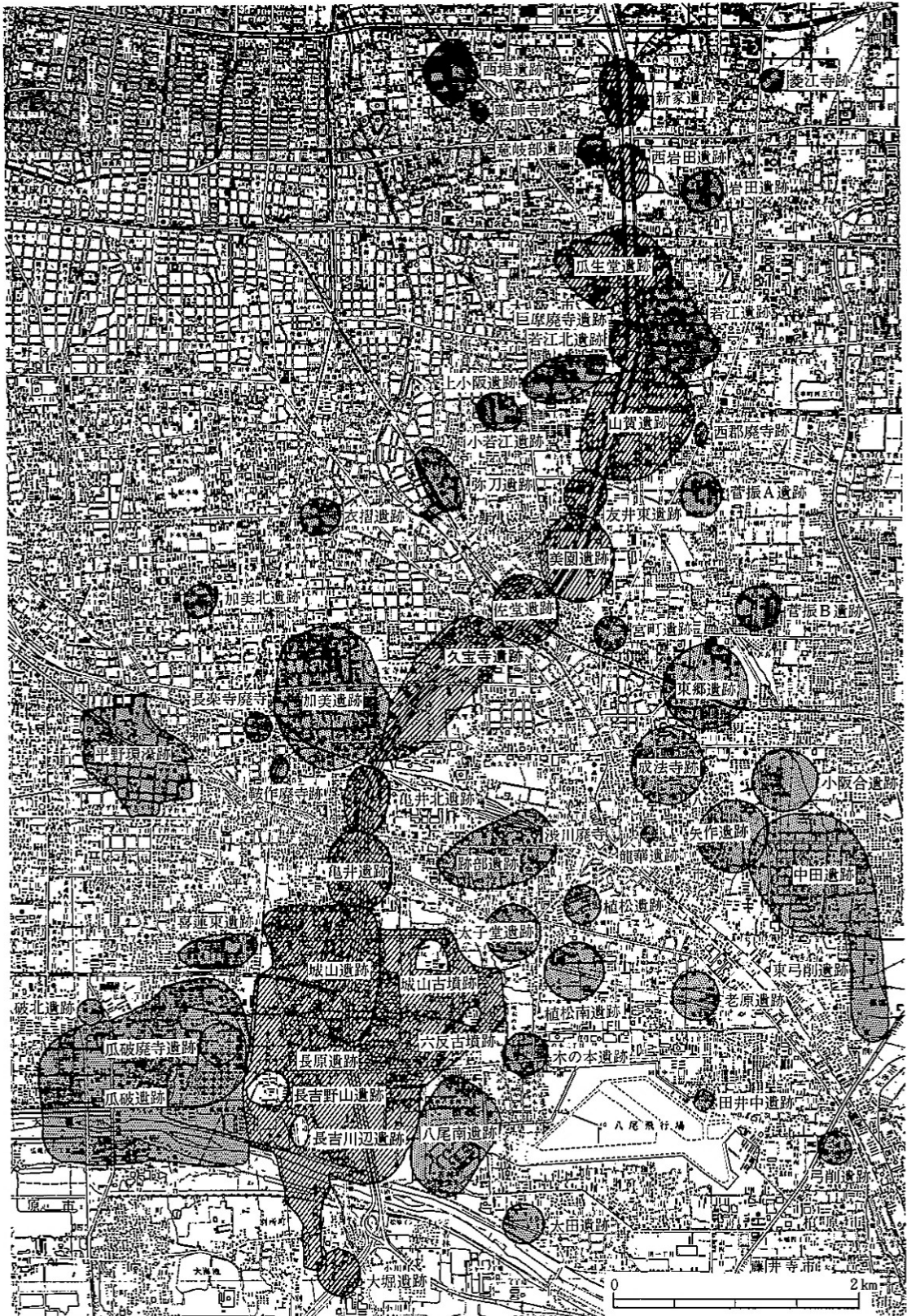
地区割は、国土座標軸第VI座標系のメッシュをそのまま使用している。区画は、X-152,100.000、Y-39,000.000を基点として、大・中・小の3区画を設定している。大区画は、南へアルファベット大文字、東へローマ数字を使用する100m角、中区画は、大区画内を南へa~j、東へ1~10とする10m角、小区画は、それをさらに5m角に4分割し、北東→北西→南東→南西の順で1~4としている。表示はA I a 1の1となる。



第3図 地区割方法



第2図 トレンチ位置図



第4図 久宝寺遺跡と周辺の遺跡 (1/50,000)

第Ⅲ章 B・Cトレンチの調査成果

第1節 基本層序と遺構面

自然堤防上に立地している久宝寺・加美遺跡は、旧大和川の活発な沖積作用と、度重なる氾濫により、地区によって比較的变化に富んだ堆積状況を呈している。B・Cトレンチ付近においても、その状況は同じであり、他の地区とは幾分異った堆積状況である。そのため、100をはるかに越える層序を、調査に即応した形で、何層かを一つの群としてまとめ、第5図に示すように11の基本層序を設定している。

1. 基本層序

基本層序Ⅰ層

中央環状線建設に関連する盛土は除外しており、旧耕作面にあたるにぶい黄褐色粘土層から、歴史時代第2遺構面までの土層を総括し、灰黄褐色粘質土などの水田部分の堆積土は遺構内堆積土として扱うべきかも知れないが、ここでは、その面積が広範に及ぶため層序の対象として含んでいる。

基本層序Ⅱ層

歴史時代第2遺構面での高まり部分においてのみ遺存している。この遺構面のベースになっている黄灰褐色粘質土から第4遺構面上までのよく似た一連の堆積層である。

基本層序Ⅲ層

歴史時代第4遺構面のベースになっているにぶい黄褐色粘質土から、古墳時代第2遺構面を埋没させているオリーブ褐色砂層直上までの堆積層であるが、後世の掘削、削平により非常に遺存状態の悪さが指摘できる。

基本層序Ⅳ層

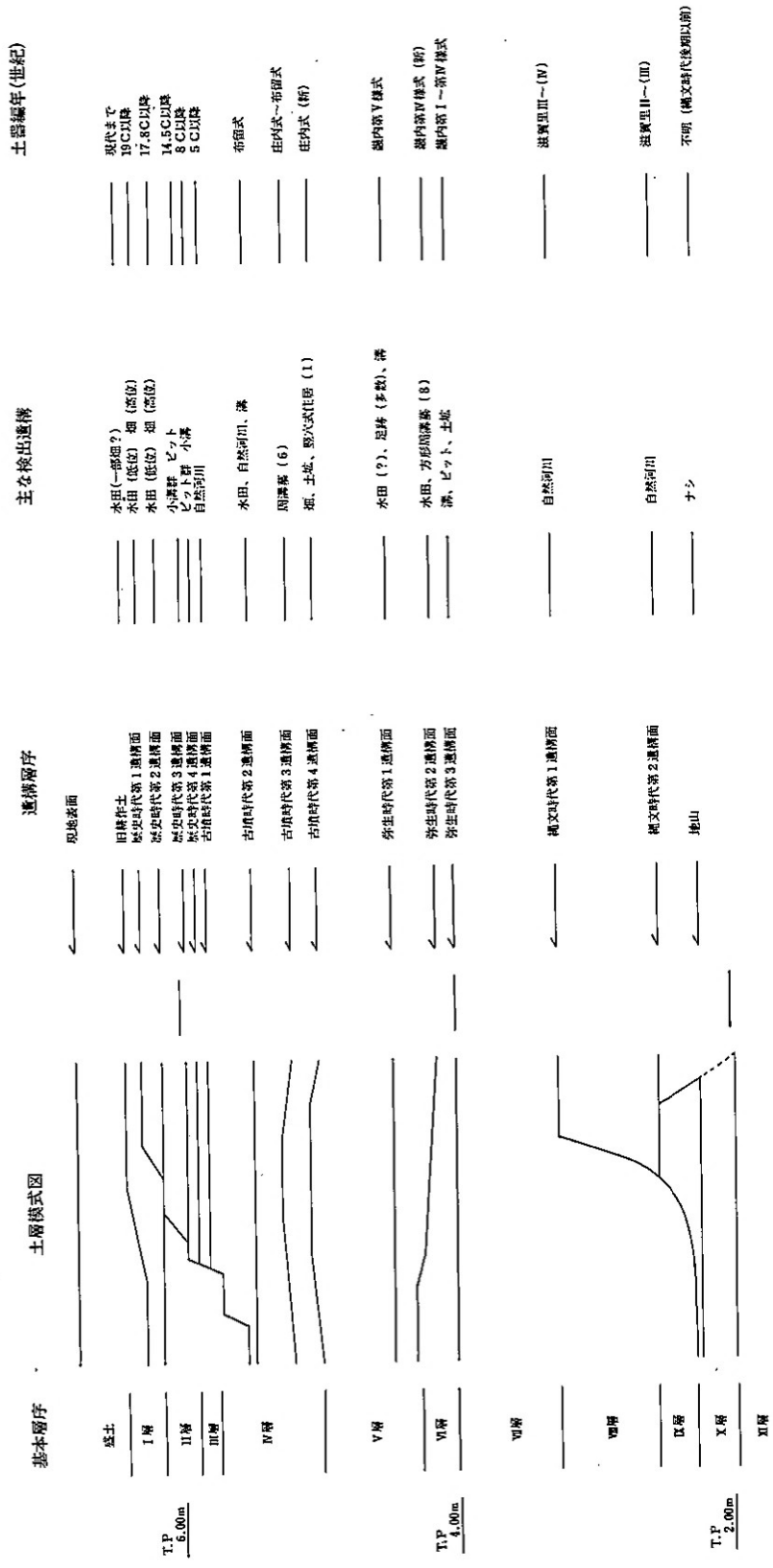
前述のオリーブ褐色砂層から、古墳時代第4遺構面直上の黒褐色シルト層までの堆積層である。この層は、Bトレンチ付近でもっとも厚く堆積し、南、あるいは北に行くにつれて、その層厚が減少する。

基本層序Ⅴ層

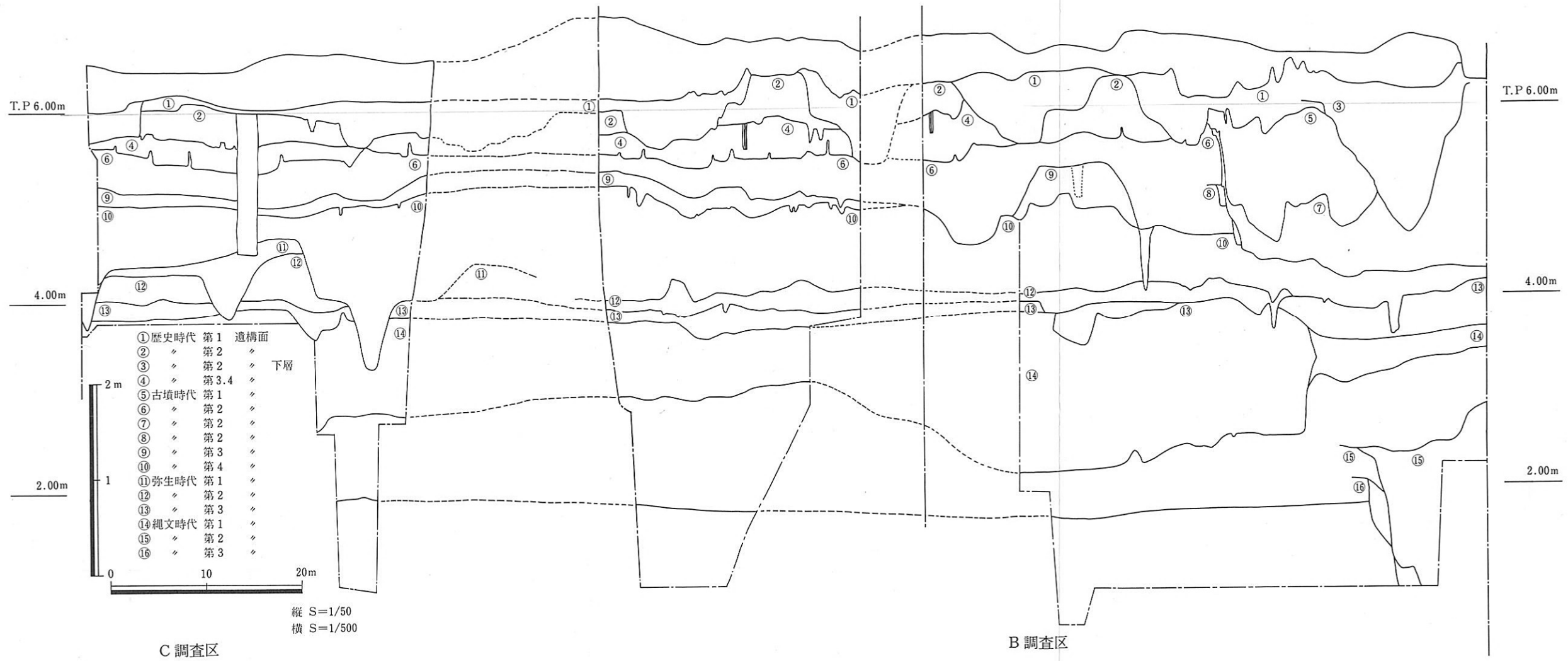
古墳時代第4遺構面のベースであるオリーブ灰色粘質微砂層から、弥生時代第2遺構面を最終的に埋没させるオリーブ黒色粘土層までの堆積である。上部は砂質からシルト質であり、下部は、砂をレンズ状に含む粘土質である。

基本層序Ⅵ層

弥生時代第2遺構面のベースであるオリーブ黒色粘土から弥生時代第3遺構面直上のオリーブ黒色砂混じり粘土層までの堆積である。この層は、Bトレンチ北部分と比べて、Cトレンチ南部



第5図 土層断面模式図



第6図 土層断面略図

分では厚く堆積しており、微地形ではあるが、変化に富んだ堆積状況を呈している。全体的に有機質を多く含んでおり、最も濃い黒色を呈する層である。

基本層序Ⅶ層

弥生時代第3遺構面のベースである暗オリーブ灰色シルト層から、縄文時代第1遺構面直上の青灰色シルト層までの堆積であるが、上部の暗オリーブ灰色シルト層以外の層は、J-SR-1の流路範囲以外でなければ堆積が認められないため、分布範囲が限られる。

基本層序Ⅷ層

縄文時代第1遺構面のベースである灰色粘土層から、縄文時代第2遺構面直上の灰色粘土層までの黒色粘土が、交互に堆積している部分である。

基本層序Ⅸ層

縄文時代第2遺構面のベースである灰色粘土層から、縄文時代第3遺構面のベースである黒色粘土層までの堆積である。基本層序Ⅴ層と非常によく似た堆積状況で、やはり黒色粘土層が交互に認められる。

基本層序Ⅹ層

暗緑灰色粗砂層の一層だけで設定しており、非常にフラットな堆積である。本遺跡で完全に無遺物・無遺構となる層で、考古学的には、地山と呼べるものである。

基本層序Ⅺ層

砂と粘土の互層である。上述のⅨ層以下と同じく、本調査では、部分的に深掘り地点で検出確認しただけである。

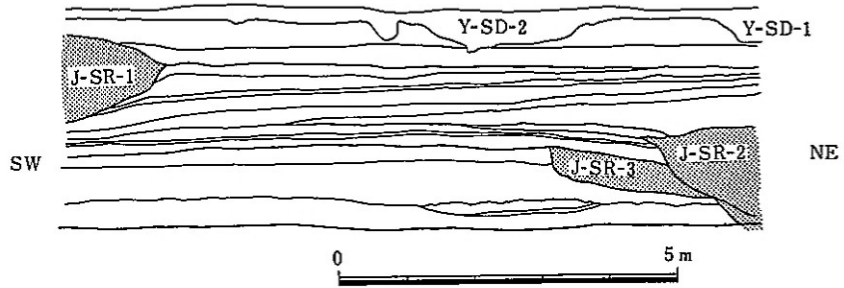
2. 遺構面

基本層序ですでにふれたが、今回の調査で検出した遺構面は、第5図に示すように縄文時代から歴史時代までの4時代に大きく区分し、それぞれの時代で特に上層から通し番号をふって“・・時代第・・遺構面”と、言う表記を用いている。この遺構面の設定もあくまでB・C調査区の遺構出土状況に即したものである。従って本来ならば独立した遺構面として設定されなければならないような時期・性格の遺構群であっても、検出面等の事情でその前後に設定した遺構面上層・下層遺構として扱っている。

第2節 B・Cトレンチの調査

1. 縄文時代

久宝寺・加美遺跡で
検出された最古段階の
遺物として、縄文式土
器・木製品等がある。
いずれも自然河川の堆
積土内からの出土で、
遺構を伴ってのもの
はないが、磨耗がほと
んど認められず、同遺



第7図 縄文時代土層断面図（Bトレンチ北側）

跡範囲内に遺構の存在を想定せざるを得ないものがあり、この遺跡の初現時期を示すものと考えられる。この時期の遺構としては、自然河川跡を3本検出している。

A. 縄文時代第1遺構面

a. 遺構

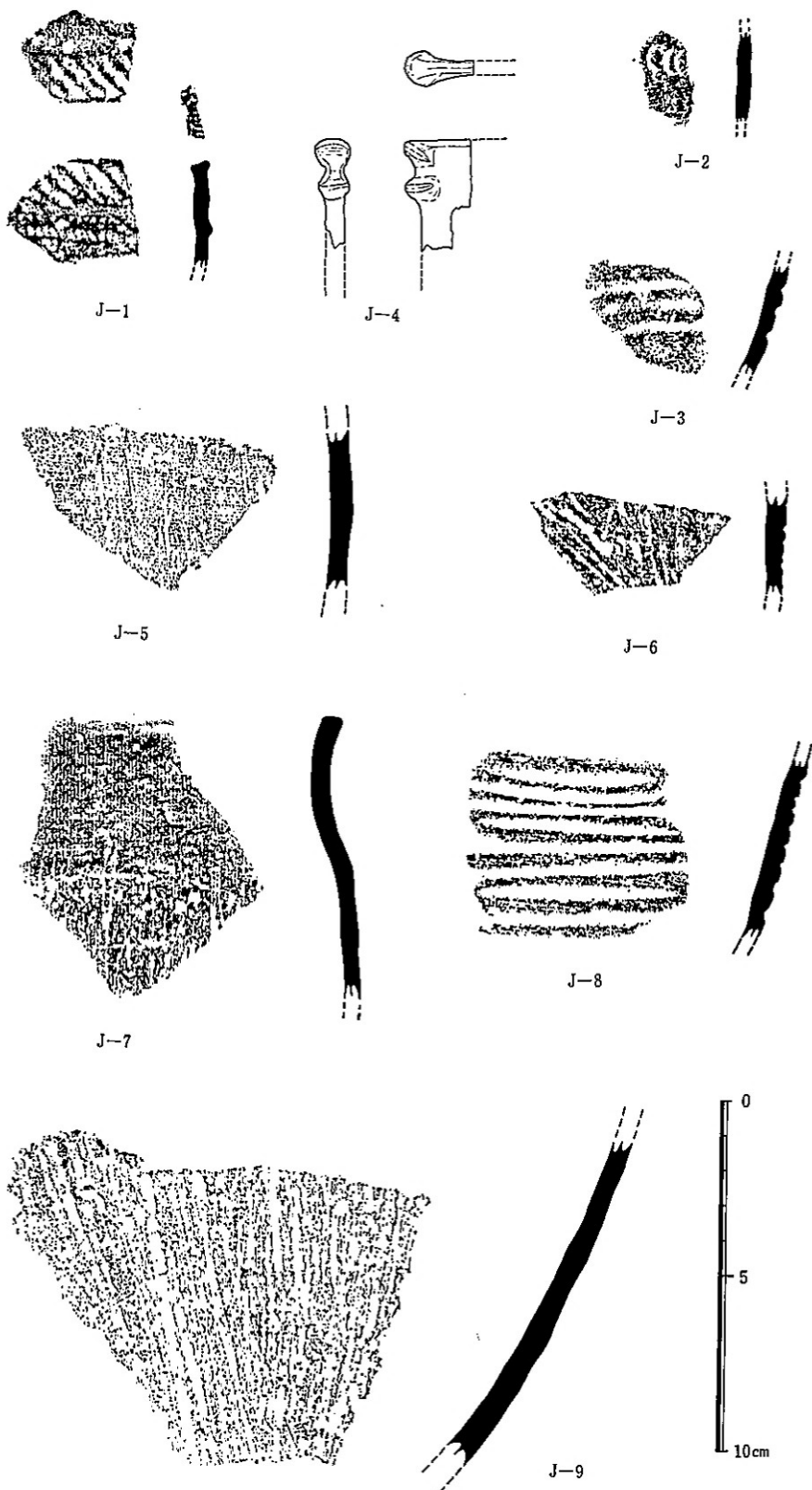
中型自然河川（J-SR-1）第7・10図

B・Cトレンチのほぼ全域に及び、川幅50mを越える自然河川である。流れは、基本的には北流していたと考えられるが、流路の比高差が少ないためか、蛇行性が強く、第10図に示すように流路は、S字状を呈している。川の深さは、0.7~1.3m程で流れのほぼ中央付近に幅10m程の中洲状高まりをもつ。流路内の堆積は、比較的均質な中粒砂であり、礫などは含まれない。しかも、川底には、人やその他大小動物の足跡が、或いは流れに沿い、或いは流れを横断する状況で検出される。これらの事から、普通の状態では、水量のあまり多くない流れであったと考えられる。この川を埋める砂層は、第10図の土層断面図で示すように基本的には、上・中・下の三層に分類でき、下層は、川が機能していた時の堆積と考えられ、磨耗の激しい土器片を少量包含している。中層は、最も厚い堆積で、流路内の大半を占め、磨耗のほとんど見られない土器片を含み、比較的豊富な量の土器片を包含している。上層は、埋没最終段階での中層の再堆積と考えられるもので、有機質を含み、砂が黒っぽくなっており、中層と同様の時期の遺物が、磨耗した状態で、包含されている。

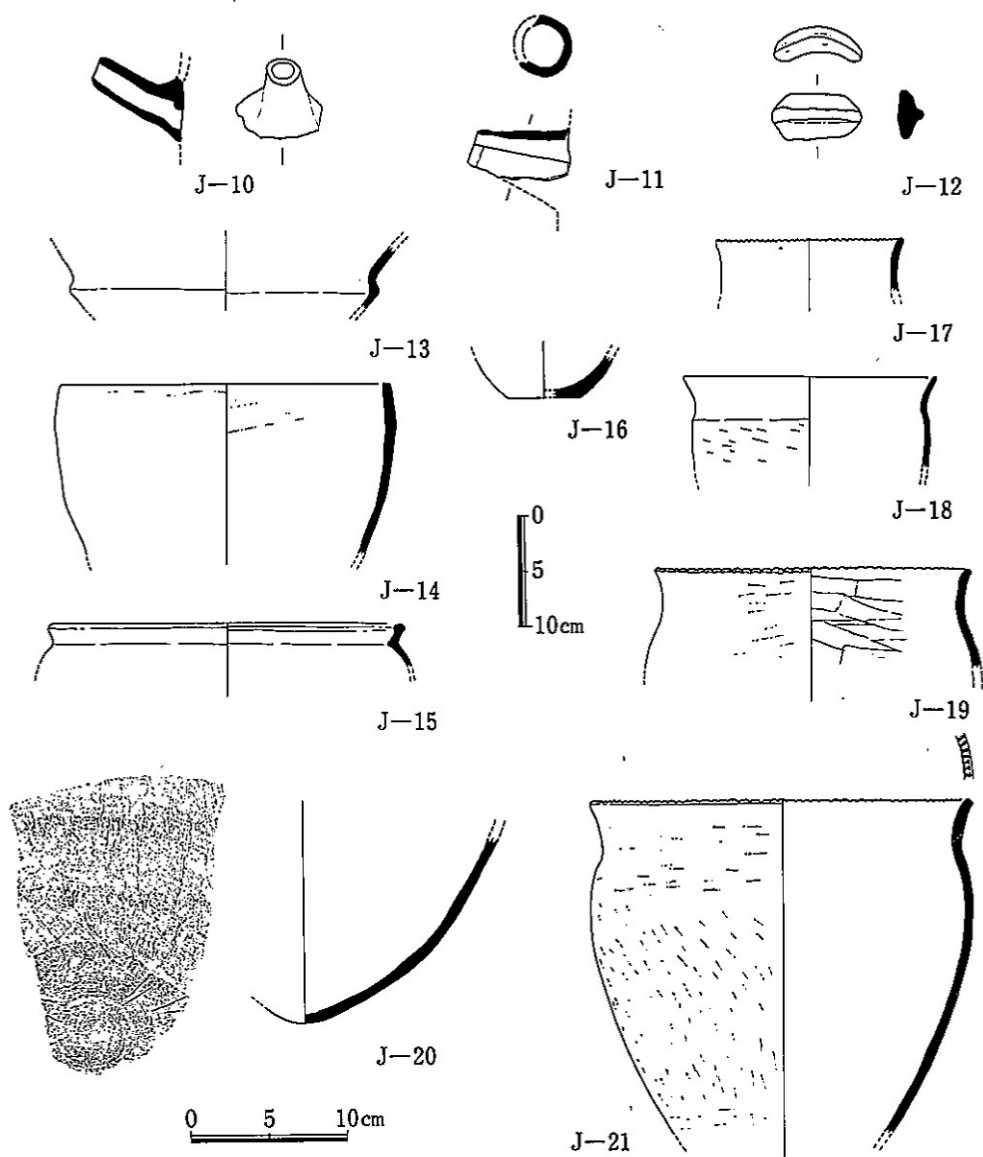
b. 遺物

土器（第8・9図）

川の流れは、第10図で示した通りであるが、遺物は、この流路内中央付近の中洲状高まりを境いとして、下流に向かって右側、つまり本調査区では東側からその殆どが出土した。なかでも、特に第8・9図に図示した一連の土器は、全てがBトレンチ北側及びB-4拡張区での出土であ



第8圖 縄文時代晩期河川（J-SR-1）出土遺物



第9図 縄文時代晩期河川（J-SR-1）出土土器

り、東側でも特にこの地点周辺に遺物の出土が集中している。しかも、この付近で出土する土器片が最も磨耗も少なく、破片も大型でなかには接合できるものも含まれている。

出土遺物であるが、前期に属する土器片が、1点（第8図 J-1）出土しており、これがこの遺跡ではいまのところ最古の時期をしめすが、磨耗しており遠方から流されて来た可能性もある。次に、後期の土器片が十数点（第9図 J-10・11）出土しているが、これも、前期の土器

片と同程度の磨耗であり、同様な距離を流されて埋没したと思われる。特に、第9図、J-18の土器口縁部破片は、前期土器片と同じ胎土を呈していることがこれらの土器片の本来の所在地を考える場合注意されるが、河川内堆積砂層からの出土にもかかわらず極めて磨耗が少なく、ほとんど認められないものも含んでいる。おそらく流された距離が非常に短いためと考えている。時期としては1点丸底の土器片が含まれているものの、形式的には滋賀里Ⅲ式の範疇に含められるものがほとんどであり、河川跡J-SR-1の時期を示す土器群である。

その他の遺物

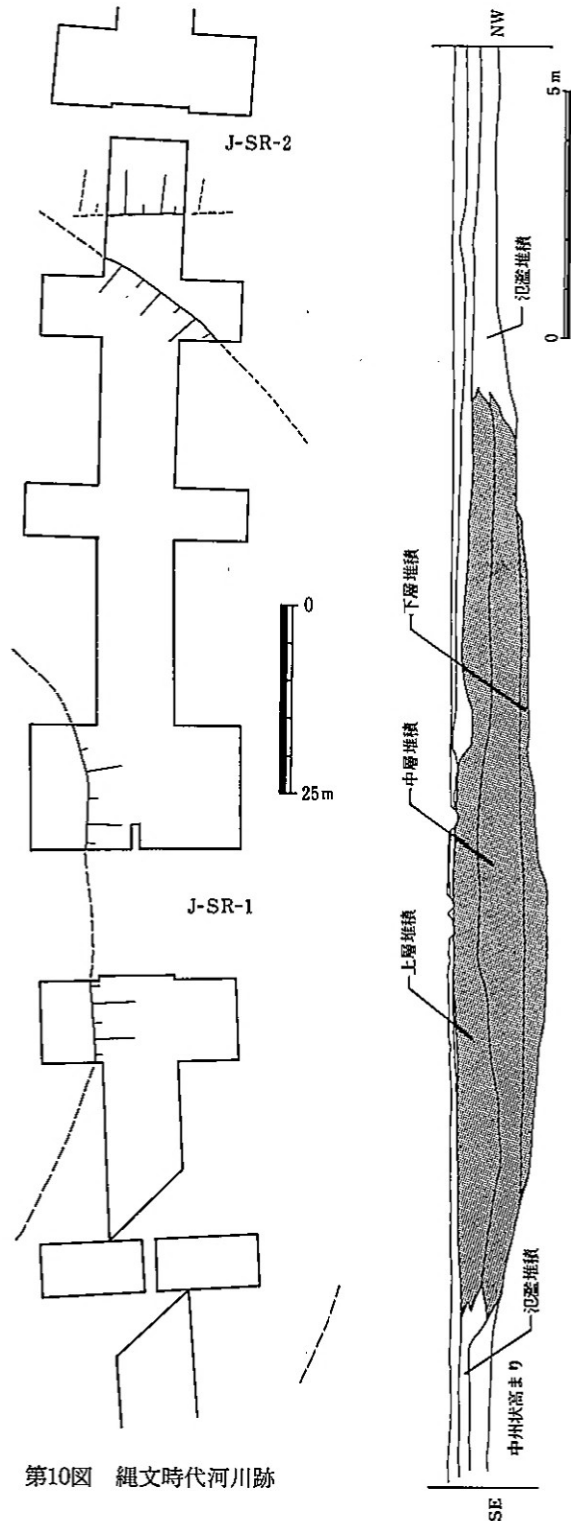
この河川跡からは、B-3拡張区で木製丹塗り櫛の柄の破片(J-4)が1点中層堆積より出土している。現存するのは3.2×1.9cmを測るだけの小片で木質部は腐食してほとんど失われており朱漆の皮膜部分が残存しているだけであるが、外見上の保存状態は良く、原形を留めていて柄肩部分の瘤状の装飾なども鮮明である。

B. 縄文時代第2遺構面

a. 遺構

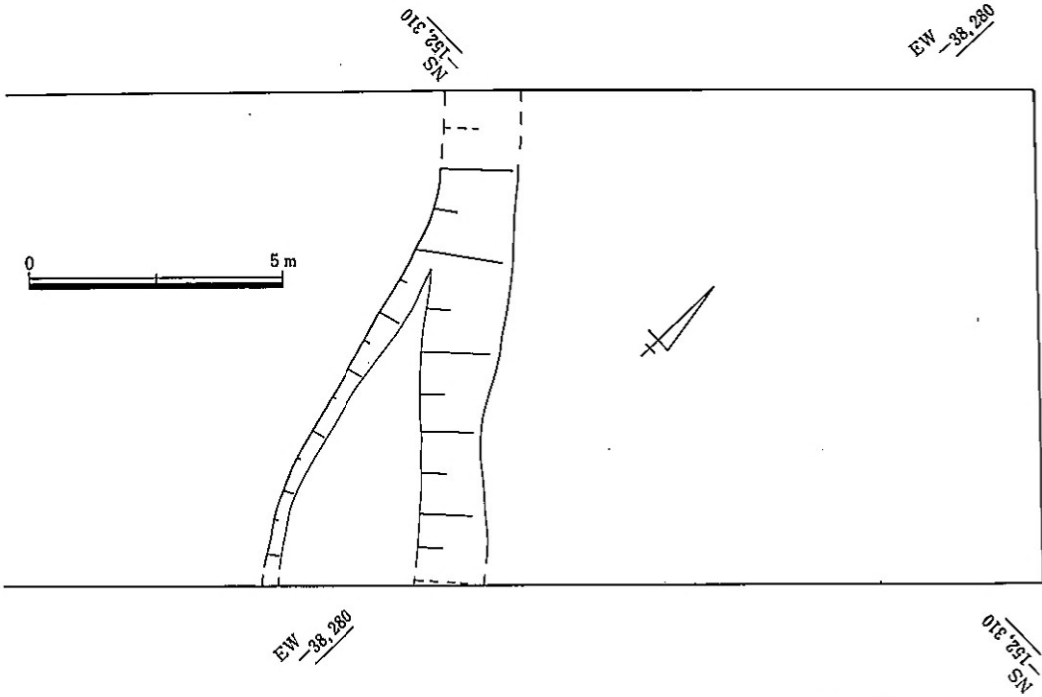
自然河川跡(J-SR-2)第10図

この河川はBトレンチとほぼ直交する状態で検出されており、灰色粘土層上面が遺構面で、自然河川(J-SR-1)の遺構面より7層下である。流路内の砂の堆積は検出した範囲内で3層に分層でき、このうち下の2層から

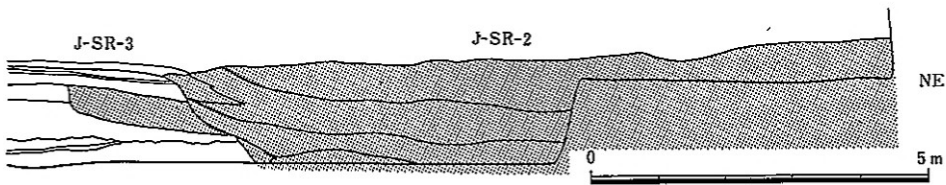


第10図 縄文時代河川跡

第11図 縄文時代晩期河川跡(J-SR-1)横断面

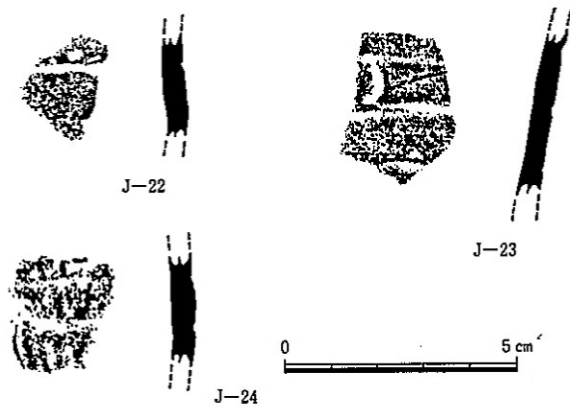


第12図 縄文時代後（晚期）自然河川跡（J-SR-2）Bトレンチ北端部遺構平面図

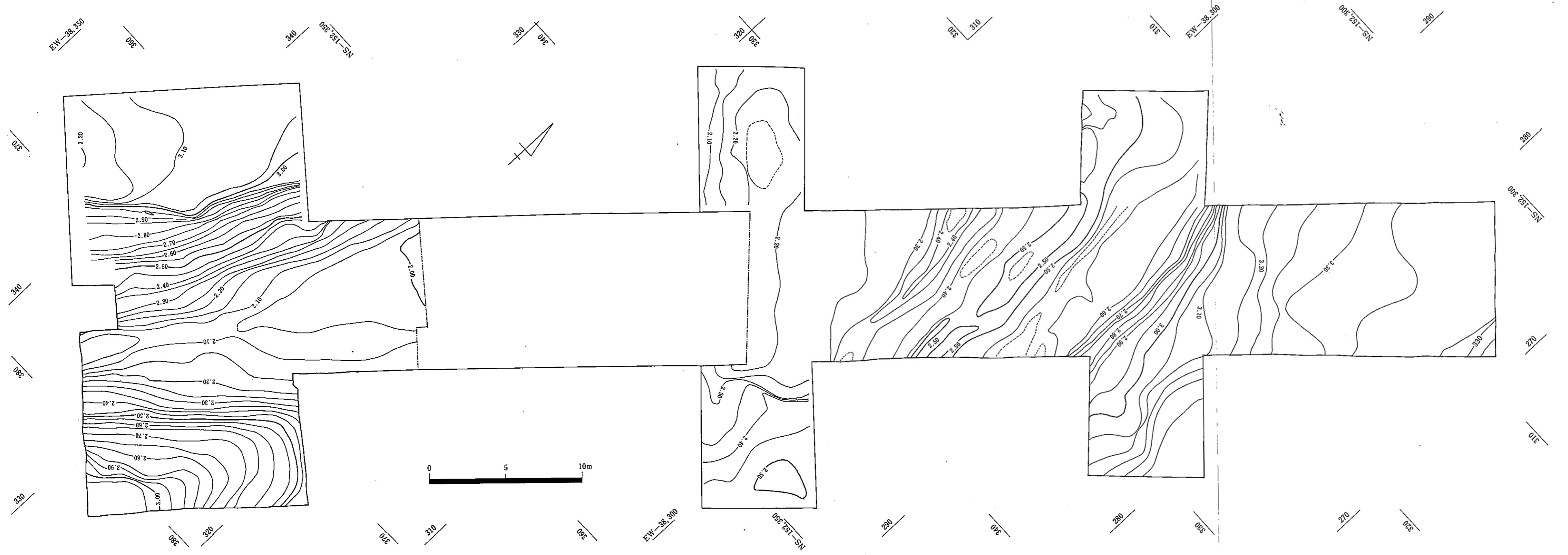


第13図 縄文時代後期河川横断面図（Bトレンチ北側）

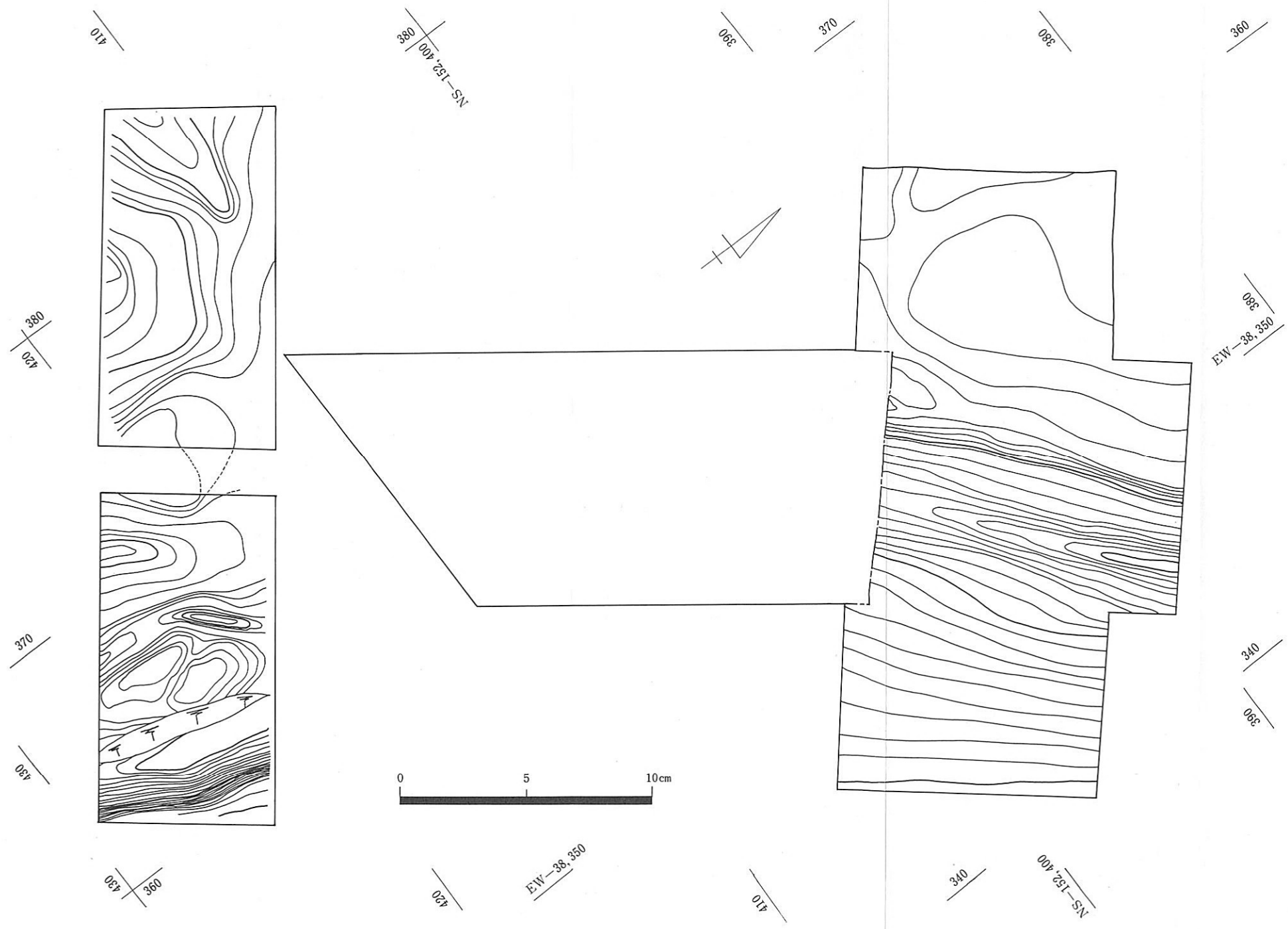
は磨滅の激しい土器片が少量と、それに混じって比較的磨滅の少ないものが3点出土している。これらの土器片は形式的にみても、J-SR-1出土のものより古く、J-SR-2の検出層位がJ-SR-1のそれより下位にあることと矛盾しない。完掘していないため全容は不明であるが、砂の堆積状況から見て、検出したのは本来の川幅の半分強と思われ、20m前後の流れであったと考えられる。



第14図 縄文時代後晚期河川跡（J-SR-2）出土土器



第15図 縄文時代第1遺構面(1)コンター図



第16図 縄文時代第1遺構面(2)コンター図

自然河川跡（J-SR-3）第13図

この河川は、J-SR-2によって切られているためその規模等は不明である。また遺物の出土がみられないため時期を特定することはできない。しかし、遺構面の層序からみてJ-SR-2が形成される時には、すでに埋没していたと考えられる。また肩が検出最終面に向け急激に下がっており相当深い河川と考えられるが、いずれにしても不明である。

b. 遺物

土器

前述のように、土器型式を判別しうるような破片は、3点のみで、しかも図に示したように小片である。いずれも平行した沈線とC字状の沈線で画した中に、比較的細い原体の縄文を施している。時期的には縄文時代後期或いは晩期の初頭を、考えている。その他の遺物は、出土していない。

c. 小結

縄文時代の遺構としては、自然河川跡以外は検出されず、加美・久宝寺遺跡の年代をたどるには、甚だ微弱なものであると言わざるを得ない。しかし、縄文晩期の河川跡であるJ-SR-1から出土した土器の中で、滋賀里Ⅲ式に属する形式のものは磨耗が極めて少なく遠方からの流入を考えるには、否定的である。しかも前述した様にその出土が、流路の一地点に集中していることから、流路外東側で土器出土地点からさほど離れない付近に同時期の遺構の存在を推定することは許容されるものであろう。今一つ、自然流路J-SR-2とそこから出土した少量の土器片についての問題であるが、確かにJ-SR-1出土の土器片同様、土器自体の磨耗は少ないが、その出土量が極めて少ないため、付近での遺構の存在についての推定は、差し控えるべきであると考えらる。

2. 弥生時代

弥生時代に比定される遺構面は、5面検出しているが、その内2面については、検出状況が散見のであったり、極めて部分的に検出しただけであるので、遺構層序の中では独立した遺構面として設定していない。従って、弥生時代の遺構面は第1から第3遺構面の3面を設定し、残りの2面については、年代の近接する遺構面との関連で述べる。

A. 弥生時代第1遺構面 (第20・21図)

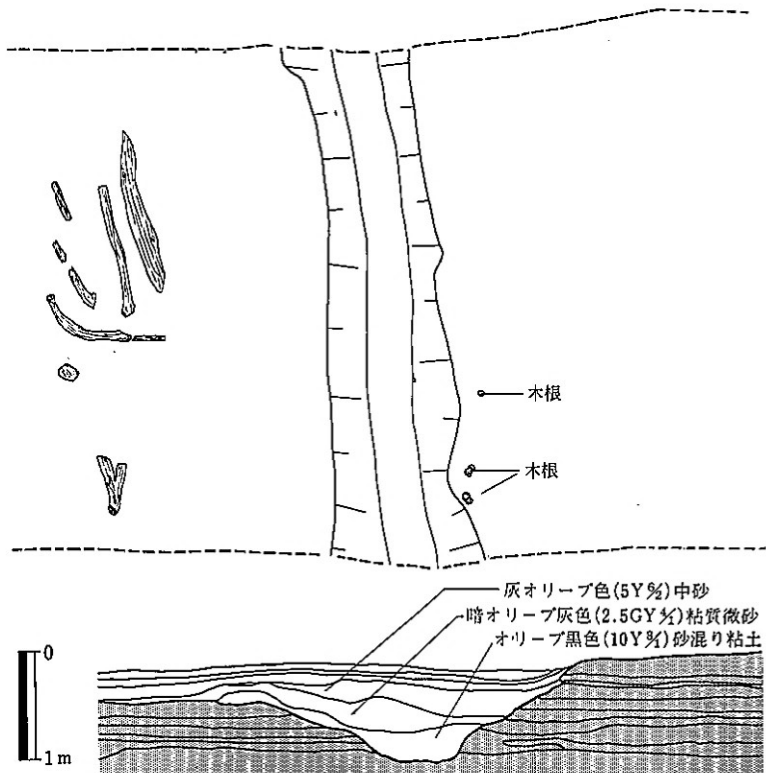
基本層序V層の最上部であるシルト層の下層に拡がる粘土層上面がそれにあたる。地点によっては、この粘土層が間に薄い砂層を挟んで数層に分かれており、細分できるが、同遺構面の一連の埋没過程と理解している。主な遺構としては、畦畔状のものが散見されるだけであるが他に自然遺構として無数の足跡群と小河川跡があげられる。

a. 遺構

溝状遺構 (Y-S D-32) 第17図

Bトレンチ中央より南に寄った地点で、基本層序V層上部の暗オリーブ灰色シルト層上面より検出した東西方向の溝である。南側肩部は、北側に対して約0.3m程低くなっているが、これは上層の遺構である古墳時代前期の自然流路(K-S R-6)の氾濫原となって削られたためであろう。しかし、こうした形状の変化は、微細であり本来の形状は大きく失われていないと思われる。規模は横断面上部で

現存幅3.2m、底部で0.8m、深さ0.9mを測り、横断面形は、上部のおおきく開く逆台形を呈する。底部は比較的平坦であり、動物や人間のものと思われる足跡が、流路と同じ方向に移動した状況を示す状態で認められた。流路内堆積土は、基本的に3層に分層でき、下よりオリーブ黒褐色粘土・暗オリーブ灰色粘質微砂・灰オリーブ色中砂となっており、どの層からも遺物の出土はなかった。また、この溝との直接的な

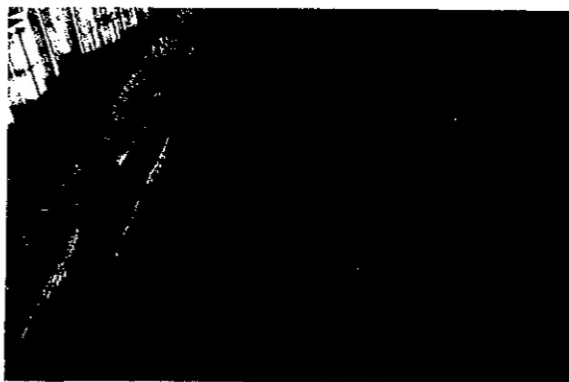
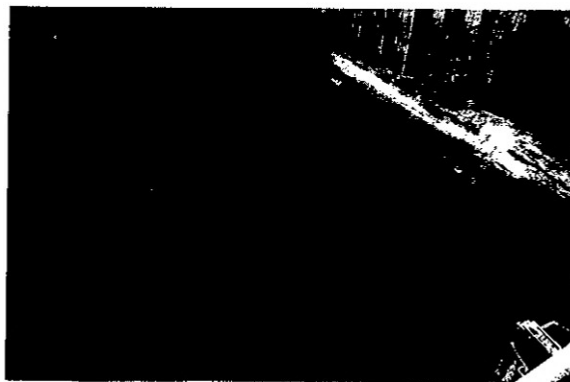


第17図 弥生時代溝平面及び断面図 (Y-S D-32)

関係は不明であるが、南側肩部より2 mほど離れた地点に径0.1~0.2mほどの自然木を倒れた状態で検出した。木の根部分が認められず、しかも手斧くず状の木片が、少量ではあるが散見され、伐採されたものと思われる。また、この溝の北側肩部で3本分の木の根が出土しており、根の上部が伐採等のために失われたものか、断定はできないが、両者の間に何等かの関係を推察させる状態である。

足跡群（第18図）

B-5・C-2~4 拡張区では砂の堆積を除去した際に多数の足跡が、検出された。これらは、遺存状態も良く、左右の別、進行方向を判別できるものが多い。足跡の分布状態を観察すると、密集度、進行方向において幾つかの規則性がみられ、何等かの目的を持った行動が考えられる。また、C-1・3・5・6 拡張区では、幅約0.2~0.3m程のT字状に枝分かれする帯状の高まりが確認されており、これらを畦畔の残欠遺構と考えると、当遺構面は水田跡である可能性が非常に高く、分布する足跡群は水田耕作によるものと理解できる。このような足跡及び畦畔は前述したY-S D-32の付近から南側で主に検出されている。足跡などの検出しやすい砂層の分布するところでのみ遺構を検出していることや、ベースとなる灰褐色粘土層が遺構検出範囲の南北



第18図 足跡群（上B-3、下C-3 拡張区）

にも拡がることから、水田の分布がY-S D-32付近から南に限られるのではなく、むしろ他地区における遺構の遺存状態が悪いと考え、相当広範囲にわたると解するのが妥当であろう。

b. 弥生時代第1遺構面下層堆積（第19図）

弥生時代溝（Y-S D-45）

前述したように灰色粘土層の間層として灰色シルト層がC-3・4 拡張区では認められる。この層の上面を弥生時代第2遺構面として検出した溝で、横断面形は幅の割に浅く皿状を呈する東西方向に伸びる溝である。溝内の堆積土は基本的には暗オリーブ灰色粘土一層であるが、その下部には菱鉄鉱を多く含む部分があり、2層に分層できる。この遺構面では3条の溝を検出したが、この溝はその中でも最も幅も広く検出状況も明確である。地形は東から西に向かい穏やかに低くなっていることから東から西に向かって流れていたと考えられる。溝内からの遺物は、Y-S D

-46・47との接するところの溝肩付近で、溝がほぼ埋没した状態の堆積部分から完形壺を一体検出している。この溝の時期を示すものとしては、唯一のものである。

弥生時代溝 (Y-S D-46)

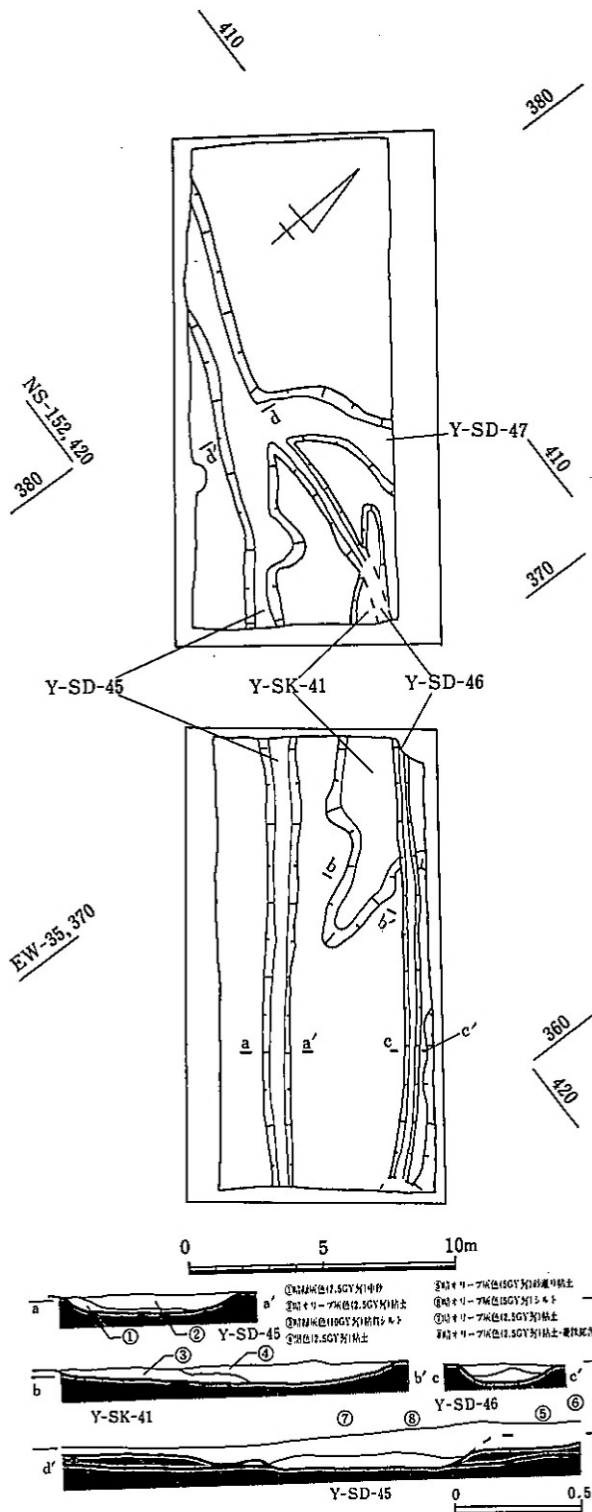
灰色シルト層上面をベースとして検出した溝で、横断面は底部が平らな逆台形を呈する東西方向に伸びる溝である。C-3 拡張区中央付近でY-S D-45と接する。溝内堆積土は暗オリーブ灰色粘土一層だけであり、Y-S D-45との層の切り合い関係は認められず一連の溝と考えている。溝内からの遺物の出土は認められなかった。

弥生時代溝 (Y-S D-47)

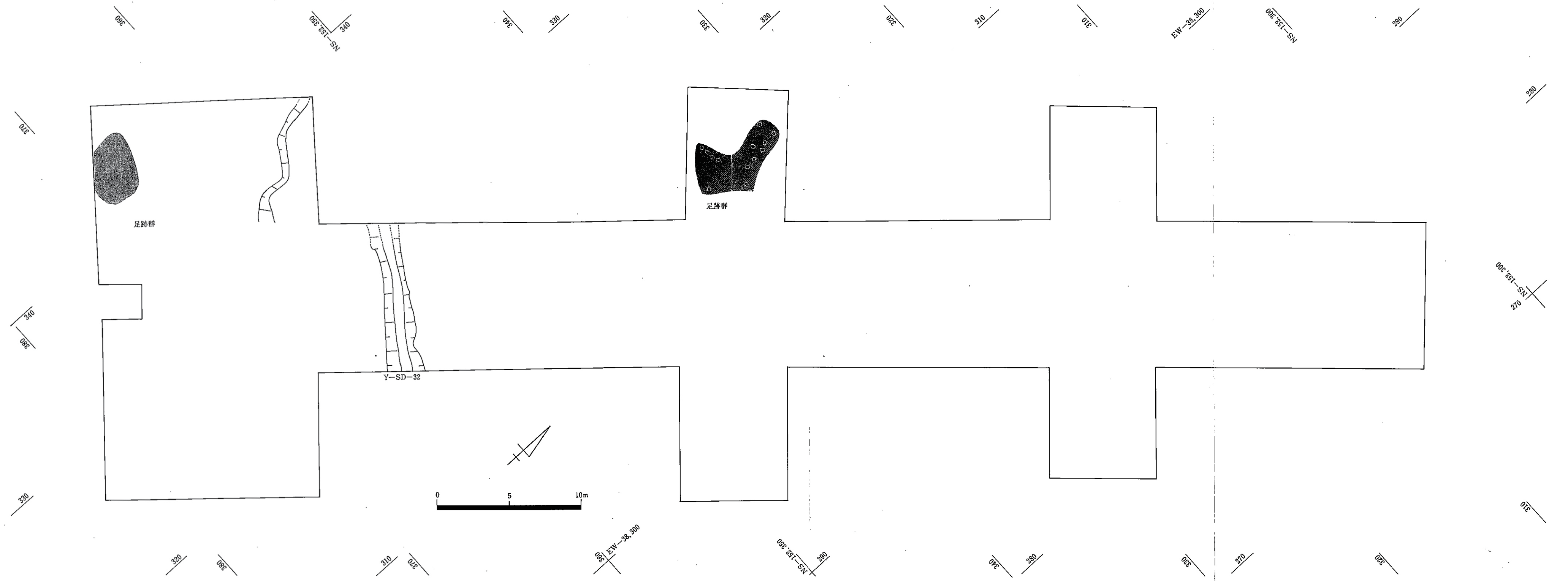
灰色シルト層上面をベースとして検出した溝である。横断面は上部が大きく開く浅いU字形を呈し、南北方向に伸びる溝である。C-3 拡張区中央付近でY-S D-45と接する。溝内堆積土は暗オリーブ灰色粘土一層であり、Y-S D-45と層の切り合い関係は認められず一連の溝であると考えられる。溝内からの遺物の出土は認められなかった。

弥生時代土壌 (Y-S K-41)

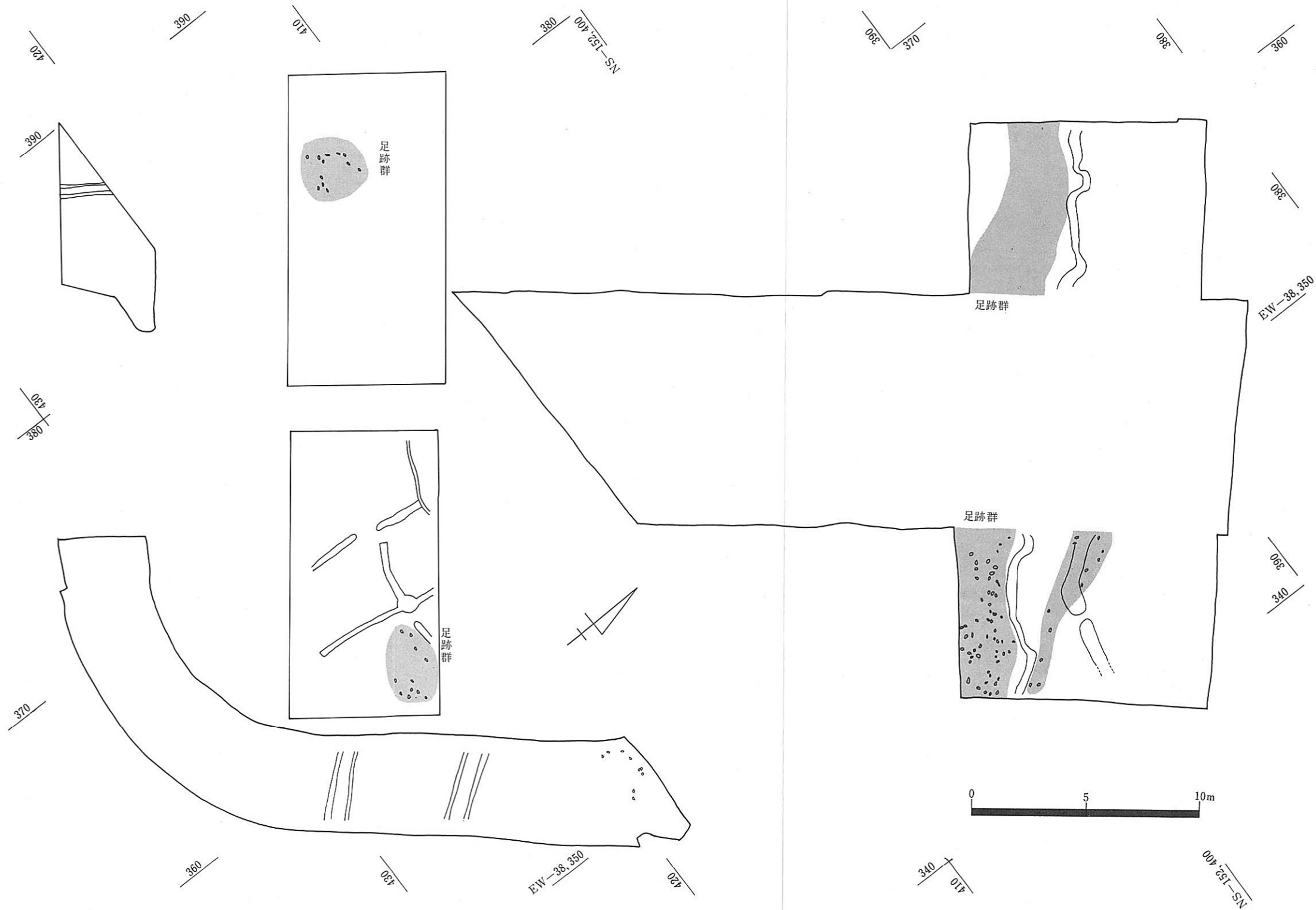
灰色シルト層上面をベースとして検出した所謂舟形土壌と呼ばれるものに近い長細い形状を呈す土壌である。域内堆積土は、暗オリーブ灰色シルト質粘土一層であるが、土壌中央部を貫くY-S D-46との間に、層の切り合いが認められる。溝内からの遺物の出土は無かったが、この切り合い関係から、Y-S D-46に先



第19図 弥生時代第1遺構面下層遺溝 (C-3、4 拡張区)



第20図 弥生時代第1遺構面(1)



第21図 弥生時代第1遺構面(2)

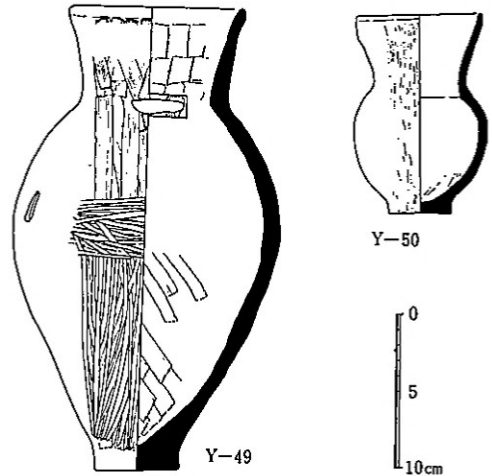
行するものと考えている。

c. 遺物

この遺構面に関連する状態での出土遺物は、極めて少ない。遺構面検出時に少量の土器片が出土したが、それらは、時期は勿論のこと器形の推定さえ困難な小片であり、ここで報告できるようなものではない。その他の遺物の出土は見られなかった。

土器

C-3・4 拡張区で検出したY-S D-45より、小型の壺(Y-50)が一点出土している。この壺の細部の特徴は、表に示すとおりであり、時期的には特に口縁端部に凹線状に窪むナデを施しており、畿内第V様式でも比較的古い段階を考えている。もう一点壺(Y-49)が、第1遺構面下層遺構の除去中に出土している。本来は、次の第2遺構面で扱うべきかもしれないが、レベル的に次の遺構面と大きく離れており、ここで扱っておく。特徴は、表に示したとおりであり、Y-50よりもさらに古い特徴を示しており、時期的には、畿内第IV様式の終わりから同第V様式の初頭を考えている。



第22図 溝、及び包含層出土土器

d. 小結

弥生時代の最終遺構面である第1遺構面は、時期的には古墳時代への繋がりを考えなければならぬであろうが、土層断面上で明確なものとしては把握していない。前述したように、この遺構面における明確な遺構は少なく、遺物の出土はさらに希少なことである。しかも、地点によって土層の堆積状況が大きく変化しており、ますますこの遺構面を不明瞭なものにしている。しかしながら、その性格としては、前述したように畦畔状遺構をわずかながら検出していること、規則性を持つ足跡を多数検出していることなどから水田の可能性が考えられる。時期としては、C-3 拡張区で、第1遺構面上部と同遺構面下部の間に位置するシルト層を遺構面とした一連の溝状遺構(Y-S D-45~47)及び土塚(Y-S K-41)を検出したが、その溝状遺構であるY-S D-45が埋没する最終時と考えられる状態で完形の壺形土器が、一団体出土している。この土器は、遺物の中でも記述したように後期でも古い段階に比定されるものである。ただ一点出土しただけの土器で、第1遺構面の時期を推定するのは、はなはだ危険な行為と言わざるを得ないが、他に資料がなく、下層である弥生時代第2遺構面、及び上層である古墳時代第4遺構面との時期的な関係において矛盾しないものであり、一応妥当性のある推定であると考えられる。

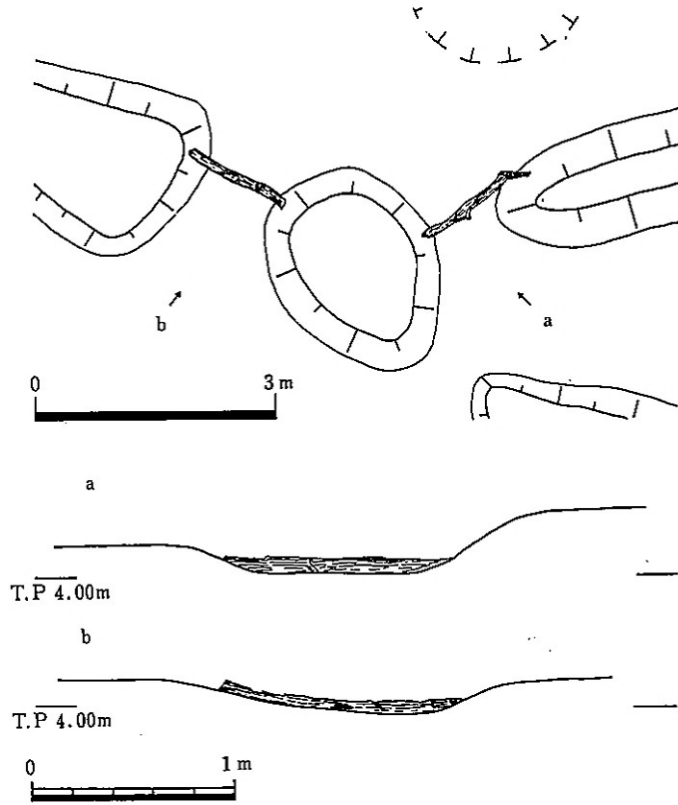
B. 弥生時代第2遺構面

基本層序VI層の上部堆積であるオリープ黒色粘土上面が、それにあたる。この遺構面は、B・C調査区の全域において灰色、暗緑灰色、さらに炭化物で盤状構造を呈する堆積層で埋没しており、この層を目安に、面的に検討するのが比較的楽である。微地形であるが北から南へ向かってわずかに高くなっており、C-3拡張区では、特に極端に高くなる地形の変換部分が確認された。遺構としては、この高位の部分で方形周溝墓群、低位では水田跡を検出している。

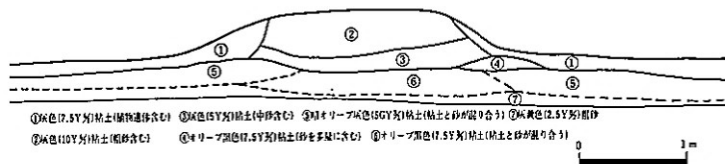
a. 遺構

(1) 中期末～後期初頭水田跡

B調査区のはほぼ全域とC-3拡張区西側で検出した。基本層序VI層の最上部である灰黒色粘土層をベースとして営まれており、畦畔盛土には、この灰黒色だけのものと、この粘土に砂を含んだものが認められる。水田を区画する畦畔は、大・小二種類の形状のものがあり、これを使い分けて、大区画、小区画の水田を形成している。大型畦畔による区画について述べるとB-1拡張区で東西方向に検出した畦畔(Y-畦-12)と、B-4・5拡張区及びBトレンチで検出した畦畔(Y-畦-24・25)とは、平行する位置関係にあり、その間隔は、約30mである。次に前述したB-4拡張区で検出した畦畔(Y-畦-24)に、こぶ状の突出が認められるが、ここで畦畔が分岐していた痕跡と考えられ、この突出部分と、Bトレンチ南側で畦畔が分岐する地点までの間隔が、やはり、約30mである。この最も長く検出



第23図 大型畦畔、及び水口 (B-6 拡張区)



第24図 大型畦畔横断面土層図 (Bトレンチ)

した畦畔（Y-畦-24・25）から、南側、B-6 拡張区の方に分岐して延びる畦畔（Y-畦-26）は、B-6 拡張区中央付近で、水口状の施設を設け、またT字状に分岐するようである。（Y-畦-27・28・29）この間隔が、約15mであり、前述した2区画の2分の1の大きさとなる。以上のように区画性について復原を試みて、一辺15mないし30mの区画規模が、検出規模内3ヶ所については復原できる。

次に小型畦畔による区画であるが、これは前述した（Y-畦-12）と（Y-畦-24）に狭まれたBトレンチ中央部と、B-2 拡張区のみ認められた。畦畔は、いずれも遺存状態が非常に悪くほとんど高さを留めておらず、平面では、認められても断面では、判断に迷う状態であった。そのような検出状況下で一応8区画以上の単位を検出したが、その状況は、大型畦畔である（Y-畦-12）と（Y-畦-24）にはほぼ平行した形で畦畔が築かれており一辺約10mほどに区画されている。

水田に伴う施設としては、水口が、可能性を考えられるものも含めて7ヶ所ほど認められた。特にBトレンチ及びB-5・6 拡張区で検出したY-畦-25・26・27・29で区画された水田区画については、北東隅の水口状の畦畔切り込みと、南東隅の2ヶ所に切断した自然木を置き、一部杭で固定した水口施設とは、高さに差があり、前者が取水、後者が排水を思わせる状況である。

C-3 拡張区で検出した（Y-畦-30）は、大型の類に属する畦畔であるが、この畦畔の盛土内からは、猪の下顎と思われる骨が2個埋置された状態（図版-7）で出土している。他にこの骨に近接して高杯の支脚部分が1点出土している。水田遺構の常として遺物の出土は非常に少なく以上の2点だけで、時期を明確にすることは無理であるが、C調査区で検出し、後述する方形周溝墓群との層位関係が、比較的明確に検討できる状態で検出できたため、時期的には、方形周溝墓と併行すると理解される。

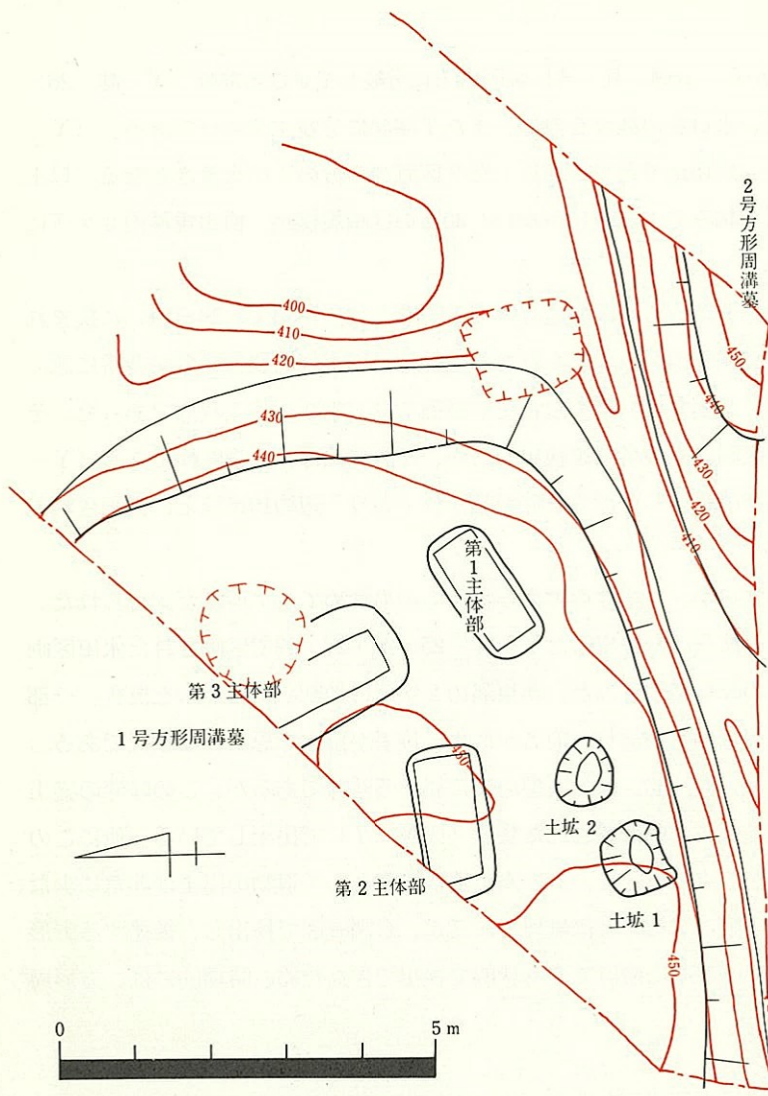
（2）方形周溝墓群（第45図）

前述したように水田部分に比べ0.3m～0.5mほど高くなった微地形部分に第45図に示したとおり8基検出した。規模等は、表1の通りである。以下1号墓から順に記述する。

1号方形周溝墓（第25・26・27図）

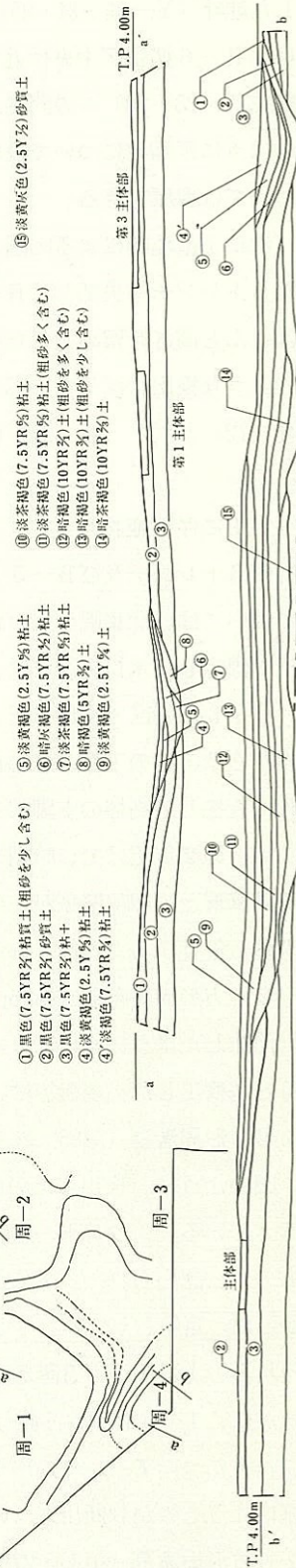
図のように、検出したのは全体のほぼ1/2だけであるが、一応二辺と三隅は、検出したものと考えている。マウンドの盛土はほとんど流失しており、マウンド検出時点ですでに主体部らしきものが、認められた。主体部は、そのため残りも非常に悪く、木棺、人骨等の遺存は認められなかった。遺物としては、マウンドや周溝部分から土器片が少量出土しているがその出土状態から、それらの土器片が、周溝墓に伴うものか、マウンド内に混入したものか判断できないものである。ほかに、1号主体部から銅片が出土しており、この主体部の脇から動物の下顎が出土しているが、これらについても、その出土状況や掘り方の有無が確認困難であることなどから、混入か、周溝墓に伴うものか判断出来ない。

2号方形周溝墓（第26・27図）



第25図 1号方形周溝墓平面、及びコンター図

1号方形周溝墓の北東で周溝を共有する形で検出したが、図で示すように全体の1/3~1/4程度を調査し得ただけと考える。しかも、周溝墓の北東部分は、古墳時代の自然河川（K-SR-6）によって削られ、マウンド端は後世の井戸によって攪乱されて、さらに調査部分を狭めている。この周溝墓もマウンド盛土は、ほとんど流失しており、マウンド検出時から中央部分で主体部らしきものが1ヶ所認められた。主体部も、1号方形周溝墓同様に非常に残りが悪く、木棺、人骨等の出土は認められなかった。遺物としては、1号方形周溝墓と接する部分で土器片や石器が出土しており、その出土状況から2号墓に伴うも



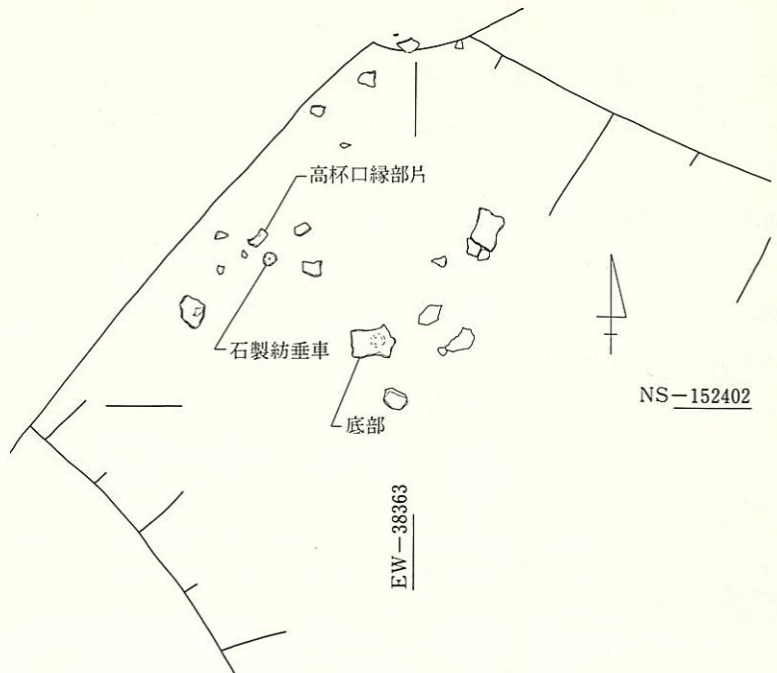
第26図 土層断面図

- ① 黒色(7.5YR2/1)粘質土(粗砂を少し含む)
- ② 黒色(7.5YR2/1)砂質土
- ③ 黒色(7.5YR2/1)粘土
- ④ 淡黄褐色(2.5Y/5)粘土
- ⑤ 淡黄褐色(2.5Y/5)粘土
- ⑥ 淡黄褐色(2.5Y/5)粘土
- ⑦ 淡茶褐色(7.5YR5/1)粘土
- ⑧ 暗灰褐色(7.5YR5/1)粘土
- ⑨ 暗褐色(5YR2/1)土
- ⑩ 暗褐色(10YR3/1)土(粗砂を少し含む)
- ⑪ 暗褐色(10YR3/1)土(粗砂を多く含む)
- ⑫ 暗褐色(10YR3/1)土(粗砂を多く含む)
- ⑬ 暗褐色(10YR3/1)土(粗砂を少し含む)
- ⑭ 暗褐色(10YR3/1)土
- ⑮ 淡黄褐色(10YR2/1)土
- ⑯ 淡黄褐色(2.5Y/5)砂質土
- ⑰ 淡黄褐色(2.5Y/5)粘質土
- ⑱ 淡黄褐色(2.5Y/5)粘質土
- ⑲ 淡黄褐色(2.5Y/5)粘質土
- ⑳ 淡黄褐色(2.5Y/5)粘質土
- ㉑ 淡黄褐色(2.5Y/5)粘質土
- ㉒ 淡黄褐色(2.5Y/5)粘質土
- ㉓ 淡黄褐色(2.5Y/5)粘質土
- ㉔ 淡黄褐色(2.5Y/5)粘質土
- ㉕ 淡黄褐色(2.5Y/5)粘質土
- ㉖ 淡黄褐色(2.5Y/5)粘質土
- ㉗ 淡黄褐色(2.5Y/5)粘質土
- ㉘ 淡黄褐色(2.5Y/5)粘質土
- ㉙ 淡黄褐色(2.5Y/5)粘質土
- ㉚ 淡黄褐色(2.5Y/5)粘質土
- ㉛ 淡黄褐色(2.5Y/5)粘質土
- ㉜ 淡黄褐色(2.5Y/5)粘質土
- ㉝ 淡黄褐色(2.5Y/5)粘質土
- ㉞ 淡黄褐色(2.5Y/5)粘質土
- ㉟ 淡黄褐色(2.5Y/5)粘質土
- ㊱ 淡黄褐色(2.5Y/5)粘質土
- ㊲ 淡黄褐色(2.5Y/5)粘質土
- ㊳ 淡黄褐色(2.5Y/5)粘質土
- ㊴ 淡黄褐色(2.5Y/5)粘質土
- ㊵ 淡黄褐色(2.5Y/5)粘質土
- ㊶ 淡黄褐色(2.5Y/5)粘質土
- ㊷ 淡黄褐色(2.5Y/5)粘質土
- ㊸ 淡黄褐色(2.5Y/5)粘質土
- ㊹ 淡黄褐色(2.5Y/5)粘質土
- ㊺ 淡黄褐色(2.5Y/5)粘質土
- ㊻ 淡黄褐色(2.5Y/5)粘質土
- ㊼ 淡黄褐色(2.5Y/5)粘質土
- ㊽ 淡黄褐色(2.5Y/5)粘質土
- ㊾ 淡黄褐色(2.5Y/5)粘質土
- ㊿ 淡黄褐色(2.5Y/5)粘質土

のと判断される。

3号方形周溝墓 (第26・28図)

2号方形周溝墓と陸橋部で繋がる形で検出した高まりである。やはりこれも遺存状態が非常に悪く盛土や主体部は認められなかったが、直角に曲がる隅を作り出すかのように整形されており、周溝墓である可能性が高いと考えられる。遺物はマウンドから若干の小片が出土しただけである。



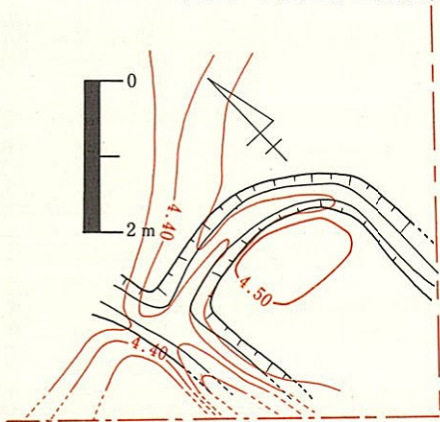
第27図 1号、2号方形周溝墓遺物出土状況図

4号方形周溝墓 (第25・26図)

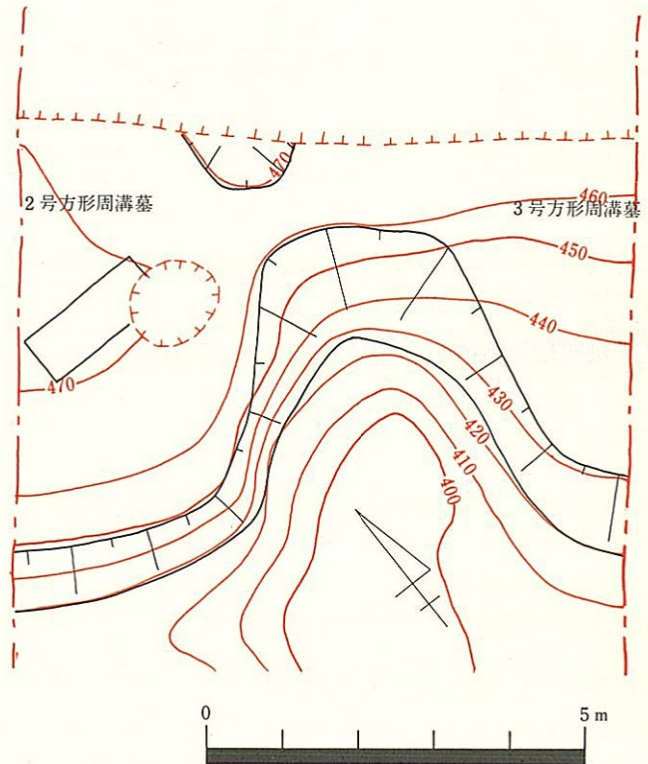
1号方形周溝墓と周溝を共有する形で検出したが、調査区にかかったのは、周溝の隅に近い一部とマウンドの隅部分だけである。遺物も、マウンド肩部より土器片が、少量出土しただけである。

5号方形周溝墓 (第29図)

C-3 拡張区の微地形が変化する



第29図 5号方形周溝墓平面、及びコンター図



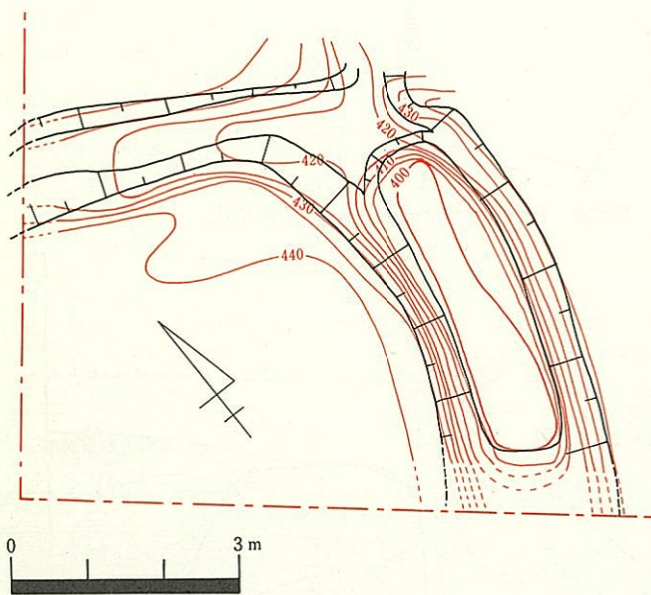
第28図 2、3号方形周溝墓平面、及びコンター図

高位部分で、検出した比較的小型のものである。マウンドの遺存状態は非常に悪く、マウンドの盛土は、ほとんど流失して認め難かった。主体部は中央より大きく南に寄って検出し

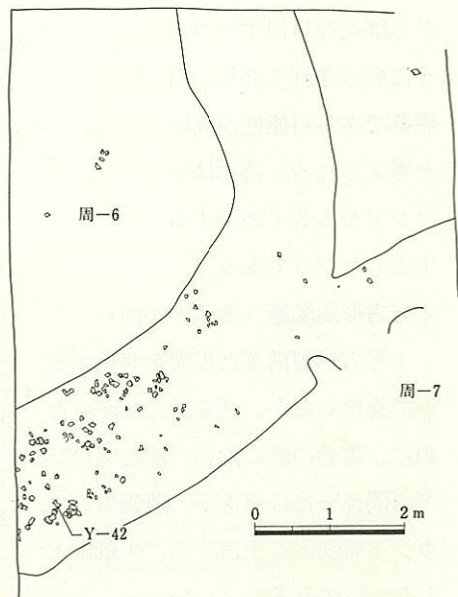
たが、これも遺存状態は非常に悪く、木棺の木口と思われる木片がわずかに痕跡を留めていたのみである。遺物は、マウンド検出中にマウンド部及び、その周辺から、土器片が若干出土したのみである。

6号方形周溝墓(第30・31・32・34図)

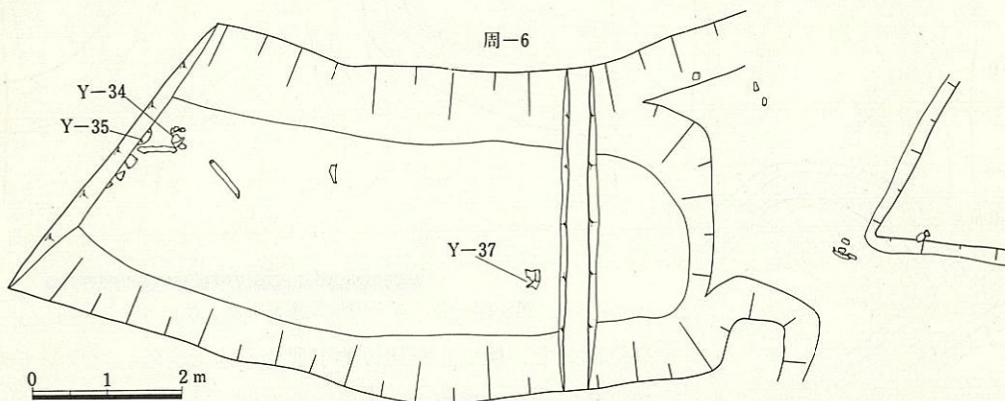
C-4 拡張区で、二辺の一部と、それに狭まれた隅部分を検出した。8基の中では、1号方形周溝墓と並んで、大型のものと考えられるが、検出できた範囲では、全貌は推定し難い。検出した周溝は、北側と西側の二辺であるが、底の深さは、北側に比べて西側では、一段深くなっており、幅も広がっている。主体部は、不明であるが、マウンドを検出した折りに拡張トレンチの



第30図 6号方形周溝墓平面、及びコンター図



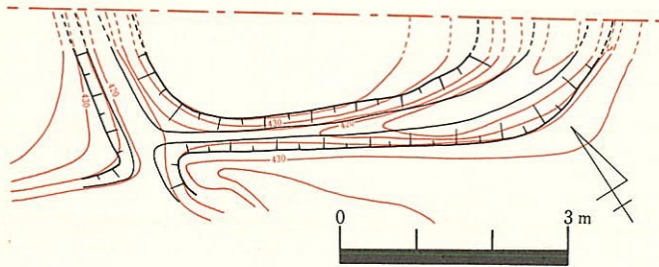
第31図 6号方形周溝墓東側周溝内上部遺物出土状況図



第32図 6号方形周溝墓東側周溝内下部遺物出土状況図

隅、周溝墓の中央付近からして北西寄りかと考えられるあたりで、長楕円形に土色がまわりと異なる部分を認めたが、非常に薄くすぐに消滅したため検出時は、主体部とは考えなかった。しかし、後で検討してみると、実証は不可能であるが、主体部である可能性も否定できない。以上の点から考えて、マウンドの盛土は、主体部を納めるに足る高さを持っていたと考えた場合、8基中もっとも立派なものであったと推定される。遺物は、西側周溝の一段深くなった部分の南側に集中して出土しているが、同一個体の破片が2~3mほどの範囲に散在していたり、高杯(第41図 Y-35)のように脚部柱状部分だけを除いて他が全て出土していることなどその出土状態から人工的か、或いは、自然かは判断しかねるが、いずれにしても破損した後ばらばらの状態で周溝内に埋没したと考えられる。

7号方形周溝墓(第33・34・36図)

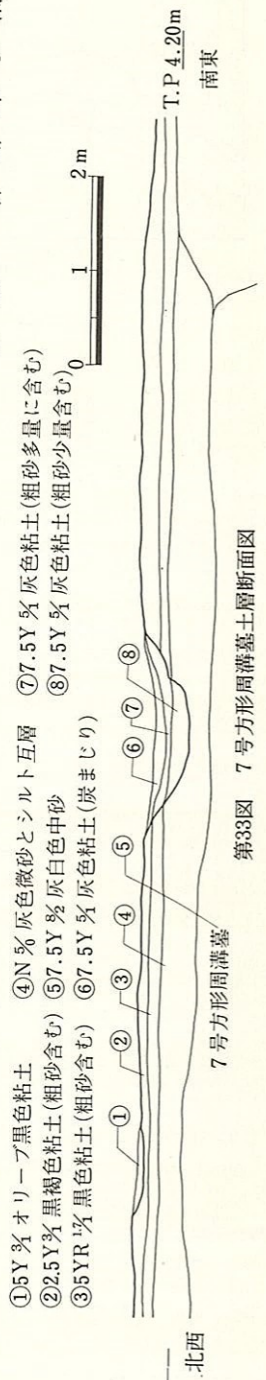


第34図 7号方形周溝墓平面、及びコンター図

6号方形周溝墓の西側で隅を接する形で検出した。かろうじて周溝の2隅が調査区内であるため一辺の規模は判明するがもう一辺は不明である。マウンドは、ほとんどが調査区外であり、主体部の遺存の確認は出来ない。周溝は、マウンドの西側は浅く、幅も狭いが、東側では深く、幅も広がるようである。6号方形周溝墓と接する部分では仕切りがなく双方の周溝がつながっており、甕がほぼ一個体分出土している。遺物は他に、周溝内から若干出土している。

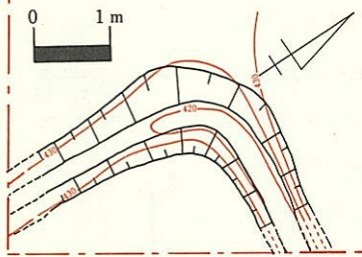
8号方形周溝墓(第35・36図)

6号方形周溝墓の南東、7号方形周溝墓の南で一隅を検出した。非常に遺存状態が悪く、わずかに浅く直角に曲がる溝を検出したただけであるが、溝の形状から一応方形周溝墓とした。マウンドにあたる部分では、柱穴状の穴が一ヶ所検出されており、この位置は、検出した溝の隅部部分と対応するようである。また、周溝内には他では見られない灰白色の粘土がブロック状に認められ、他の方形周溝墓と感じを異にしている。検出範囲も狭く、主体部などの有無は確認していない。溝内より若干の土器片の出土があった。

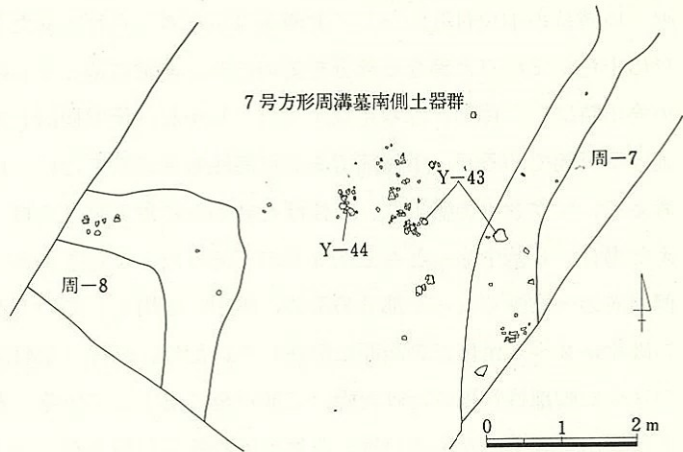


第33図 7号方形周溝墓土層断面図

- ①5Y_{7.5} オリーブ黒色粘土
- ②2.5Y_{7.5} 黒褐色粘土(粗砂含む)
- ③5Y_{7.5} 黒色粘土(粗砂含む)
- ④N 灰色微砂とシルト互層
- ⑤7.5Y_{7.5} 灰白色中砂
- ⑥7.5Y_{7.5} 灰色粘土(炭まじり)
- ⑦7.5Y_{7.5} 灰色粘土(粗砂多量に含む)
- ⑧7.5Y_{7.5} 灰色粘土(粗砂少量含む)



第35図 8号方形周溝墓平面、及びコンター図



第36図 7、8号方形周溝墓付近遺物出土状況図

表1 弥生時代第2遺構面方形周溝墓一覧表

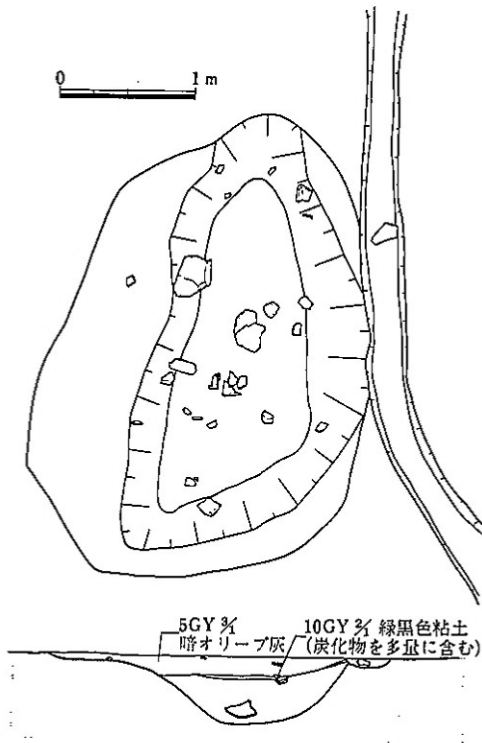
番号	遺構略号	地区	マウンド規模 (m)	周溝 (m)	埋葬施設
1	周一-1	C	8.65×5.95	検出部分では完周、4号墓と東側の周溝を共有する。 幅 2.40-0.8 深さ 約0.07	木棺 3 土壙 2
2	周一-2	C	5.50以上×3.10以上	検出部分で周溝は認められない。東側に3号墓に通じる陸橋部を有す。	木棺 1
3	周一-3	C	マウンドの大半が調査区外のため不明	検出部分で周溝は認められない。西側に2号墓に通じる陸橋部を有す。	不明
4	周一-4	C	マウンドの大半が調査区外のため不明	検出部分では完周。1号墓と西側の周溝を共有する。 幅 2.40 深さ 約0.3	不明
5	周一-5	C-4 (拡)	2.70以上×2.50	検出部分では完周。 幅 0.5 深さ 0.1	木棺 1
6	周一-6	C-3 (拡)	5.00以上×3.50以上	検出部分では完周し、南側の一部を7号周溝と接する。 幅 1.7~2.1 深さ 0.1~0.3	不明
7	周一-7	C-3 (拡)	長軸は約5.80、短軸は調査区外のため不明	検出部分では完周。 幅 1.0~1.2 深さ 約0.2	不明
8	周一-8	C-3 (拡)	マウンドの大半が調査区外のため不明	検出部分では完周。 幅 1.14 深さ 0.14	不明

(3) その他の遺構

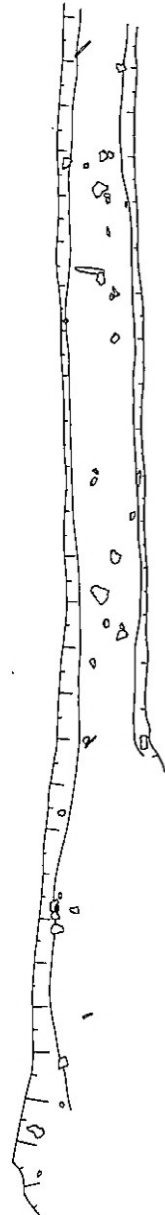
下層遺構

弥生時代第2遺構面で検出した方形周溝墓群の立地する高まり部分において、その下層より溝・土壇及びピットで構成される一連の遺構群を検出した。検出した地点は、方形周溝墓の分布するところであるが、Cトレンチにおいては、検出した1～4号方形周溝墓が、現状保存の対象として埋めもどしたため、下層は調査しておらず、C-3・4拡張区においてだけである。

検出した遺構は、表2に示すとおりである。これらの遺構群は、その検出状況から推定するとさらに3時期に細分できる。Y-SD-38・39・40・41、Y-SK-37・39及びY-SP-288などが新しく、Y-SD-42・43・49、Y-SK-36・38およびY-SP-279～287が古くさらにその以前にY-SD-40があったと考えている。

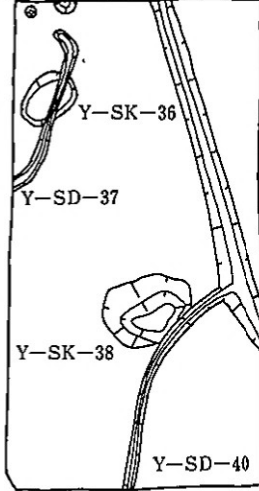


第37図 土壇 (Y-SK-38)、及び遺物出土状況図



第38図 溝 (Y-SD-38) 溝内遺物出土状況図

288 Y-SK-37 Y-SD-38



EW-38, 380

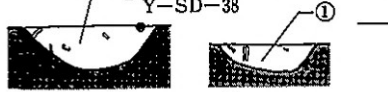
NS-152, 410

EW-38, 370

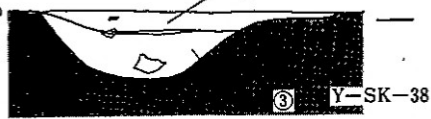
T.P+4.00m



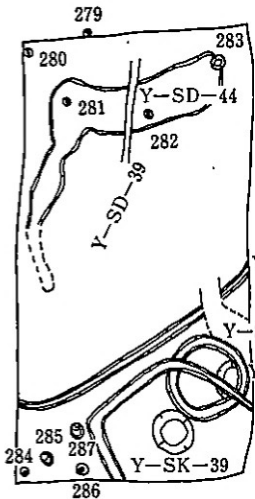
T.P+4.00m



T.P+4.00m



- ①2.5GY ㄨ 黑色粘土
- ②10G ㄨ 緑黑色粘土(炭化物含む)
- ③10G ㄨ 緑黑色粘土(微砂を少し含む)
- ④5G ㄨ 暗緑灰色粘土



Y-SD-42

Y-SK-40

Y-SD-43

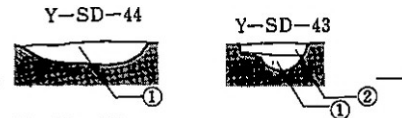
Y-SD-41

Y-SK-39

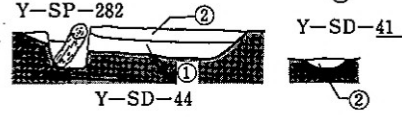
Y-SK-39

EW-38, 360

T.P+4.00m



T.P+4.20m



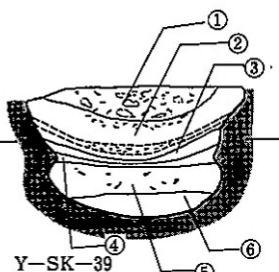
- ①2.5GY ㄨ 黑色粘土(微砂含む)
- ②7.5Y ㄨ オリーブ黒色粘土(微砂~中砂含む)

T.P+4.20m



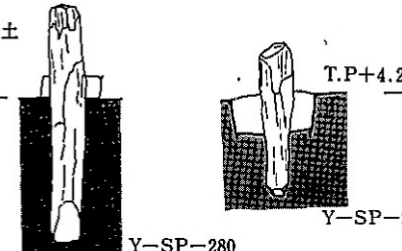
Y-SP-289

Y-SP-282



Y-SK-39

- ①7.5GY ㄨ 暗緑灰色粘土
(炭化物多量に含む)
- ②5GY ㄨ 暗オリーブ灰色粘土
(炭化物少量含む)
- ③10YR ㄨ 黑色粘土
(微砂含む)
- ④7.5YR ㄨ 黑色粘土
(微砂含む)
- ⑤2.5Y ㄨ 黒褐色粘土
(微砂・炭化物少量含む)
- ⑥2.5GY ㄨ 黑色粘土
(微砂多量含む)



Y-SP-280

Y-SP-281

第39図 弥生時代第2遺構面下層遺構(C-3・4拡張区)

表2 弥生時代第2遺構面下層遺構一覧表

遺構名	地区	幅・規模(m)	深さ(m)	検出長(m)	備考
Y-SD-37	C-3 (拡)	0.2~0.3	0.01~0.07	4.5	Y-SK-36を切る。
Y-SD-38	C-3 (拡)	0.55~0.9	0.15~0.17	9.0	北部でY-SD-40が合流。
Y-SD-39	C-4 (拡)	0.1~0.2	0.04	2.25	Y-SD-44を切る。 Y-SD-40と同一。
Y-SD-40	C-3 (拡)	0.25~0.3	0.05~0.35	6.0	Y-SK-38を切る。 北部は、Y-SD-38I合流。
Y-SD-41	C-4 (拡)	0.15~0.35	0.03~0.05	6.5	Y-SD-43, Y-SK-40を切る。
Y-SD-42	C-4 (拡)	0.15~0.3	0.03~0.06	7.25	東西方向に走る。
Y-SD-43	C-4 (拡)	0.25~0.35	0.09~0.14	6.3	Y-SD-41に切られる。 Y-SK-40を切る。
Y-SD-44	C-4 (拡)	0.35~1.4	0.08~0.1	7.2	Y-SD-39に切られる。
Y-SK-36	C-3 (拡)	1.6×1.1	0.09~0.13		Y-SD-37に切られる。
Y-SK-37	C-3 (拡)	0.6×0.3	0.1		
Y-SK-38	C-3 (拡)	2.5×1.8	0.07~0.3		北部をY-SD-40に切られる。
Y-SK-39	C-4 (拡)	1.1×1.05	0.6		Y-SD-43に東に接する。
Y-SK-40	C-4 (拡)	1.2×0.85	0.05~0.08		まず、Y-SD-43に切られてから、後にY-SD-41に切られる。

b. 遺物

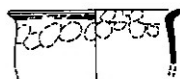
土器

弥生時代第2遺構面では方形周溝墓8基が検出されたが、第4・5号墓を除く各周溝墓から土器が出土している。この第2遺構面形成後の堆積である暗青色粘質土層下部出土の土器1点と、第2遺構面下層で検出された土壌(Y-SK-38)出土の土器2点を加え、この周溝墓群の時期を求めるのに十分な資料であると考えられる。

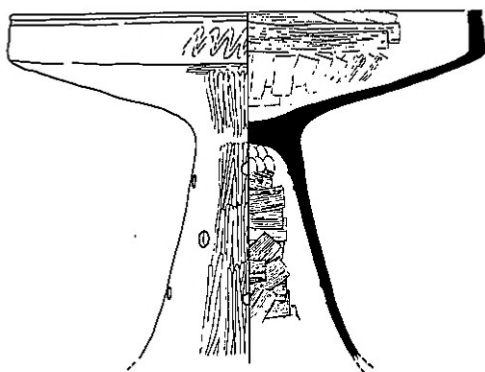
第1号墓の周溝及びマウンド付近から出土した土器のなかで器形の判るものは、壺1点、甕5点、高杯2点である。壺(第40図 Y-23)は口頸部のみ遺存しており、形態は観察表に示すとおりであるが、口縁端面を下方に拡張する際、後に貼る付ける手法がとられている。甕は口縁が「く」の字状に短く外反するもの(Y-22)とほぼ水平に屈曲するもの(Y-21)がみられる。高杯は2点のうち1点は屈曲し直立する口縁をもつものであり、特徴は観察表に示すとおりである(Y-19・20)。Y-20としているものは、口縁端面に凹線を施し赤色顔料を塗布している。これらの土器は畿内第IV様式の特徴を強く残しながらも同第V様式の特徴を有しており、第1号墓の時期を求める資料としている。



Y-19



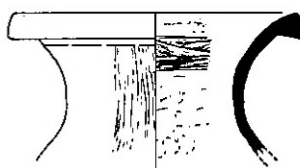
Y-21



Y-20



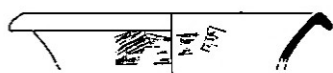
Y-22



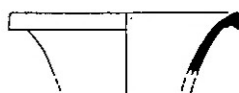
Y-23

0 5 10cm

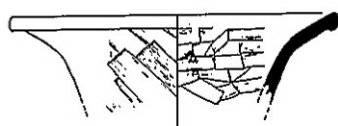
1号方形周溝墓出土土器



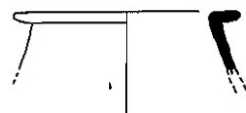
Y-24



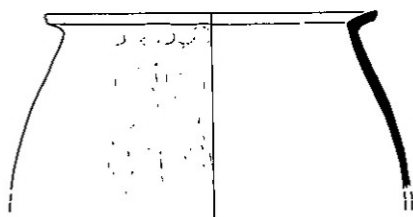
Y-27



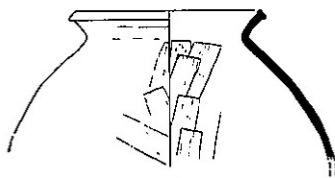
Y-25



Y-28



Y-26



Y-29

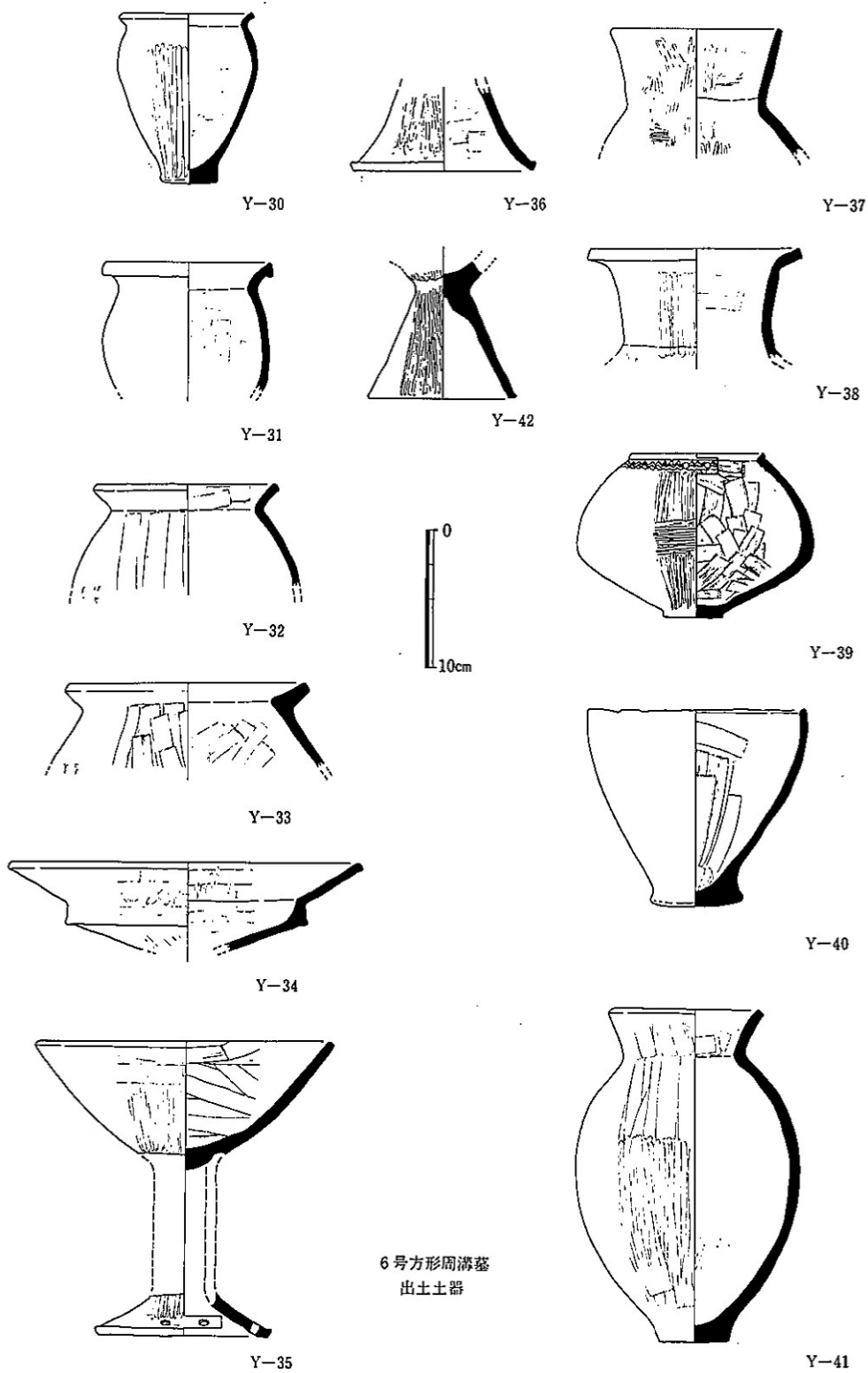
0 5 10cm

2号方形周溝墓出土土器

0 5 10cm

3号方形周溝墓出土土器

第40图 方形周溝墓出土土器



第41图 方形周溝墓出土土器

第2号墓の周溝及びマウンドから器形の判る土器として、壺の口頸部2点、壺の小片1点、甕1点が出土している。壺口頸部（Y-24・25）の形態及び甕（Y-26）の形態は観察表に示すとおりで、第1号墓と同様に第V様式の古い段階を考えている。

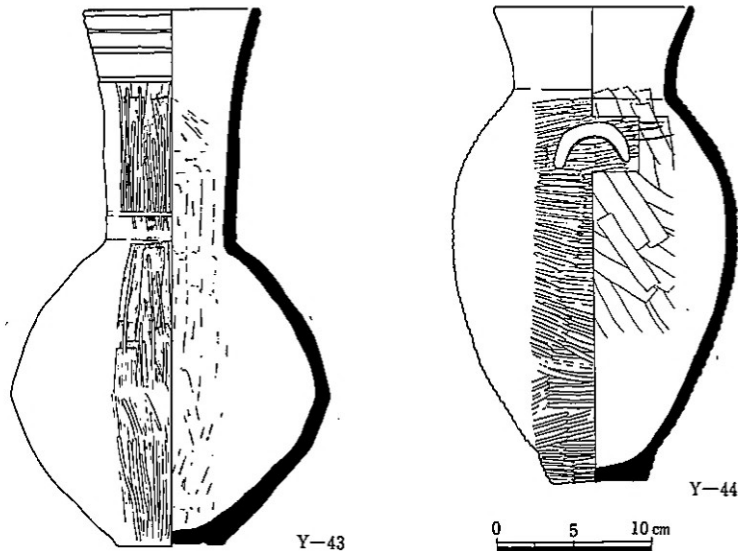
第3号墓のマウンド上から器形の判る土器として壺口頸部1点、甕2点が出土している。壺口頸部（Y-27）は観察表に示すとおり、垂下部を貼り付けた断面三角形の口縁を有している。甕は口縁が「く」の字状に外反するもの（Y-29）とほぼ水平に屈曲するもの（Y-28）である。壺口頸部は第1号墓のY-23としているものと時期的に共通すると思われ、甕と合わせて、やはり同時期の土器とすることができる。

第6号墓の周溝及びマウンドからは他よりやや多くの土器が出土しており、器形の判るものとして、壺4点、甕4点、高杯2点、脚部2点などが出土している。壺の形態は、観察表に示すとおりであるが、中で無頸壺はほぼ完形で、相対する方向に2孔1対の紐孔をそれぞれ穿っており、典型的な形態を示している（Y-39）。甕は大きさの異なるものであるが、いずれも「く」の字状に外反する口縁を有したあまり胴の張らない形態を示す。小型のもの1点（Y-30）はほぼ完形である。高杯は、椀形の杯部を有するもの（Y-35）と段を有するもの（Y-34）があり、形態は観察表に示すとおりである。Y-35としているものは脚柱状部を欠いている。この第6号墓出土土器も第IV様式の特徴を示しながらもY-34などのように同第V様式の特徴を強く示している。

第7号墓の場合は、この周溝墓に伴うと考えられる南側の土器堆積（Y-SX-1）の土器も含めて資料として扱いたい。器形の判るものは壺と長頸壺各々1点である。壺（Y-44）の形態は観察表に示したとおりであるが、体部外面に叩き目が残りに、部分的に篋磨きで消されるものの叩き目が明瞭にみられる。

また、三日月形の粘土を記号文として貼り付けており、他の周溝墓出土の壺より新しい要素を多分に含んでいる。長頸壺（Y-43）も、諸特徴は観察表に示すとおりで、凹線の手法を口縁部にとどめるなど、壺同様、第V様式の古い段階と考えられ、この第7号墓が周溝墓群の中でも最も新しいものとしてすることができる。

第8号墓からも土器が若



第42図 方形周溝墓出土土器（7号方形周溝墓、及び7号方形周溝墓南側土器群）

干出土したものの器形の判るものが無く図化することができなかった。他にこの遺構面関連遺物として第2遺構面形成後の堆積（暗青色粘質土層）層下部出土の壺（Y-49）があるが、第1遺構面で前述したように胴の張らない縦長の壺である。2ヶ所に焼成後の意識的な穿孔がみられ、出土状況及び形態から、周溝墓群出土の土器と時期差はあまり無く、何等かの関係が想定される。

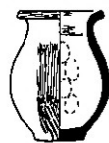
以上、弥生第2遺構面出土土器を概観したわけであるが、ここで出土状況に触れておきたい。

第6号墓出土の高杯（Y-35）が脚柱状部を欠くことを例にとっても判るように周溝内出土の土器はすべて、マウンドあるいはマウンド外から転落したものであり、しかも破損したあとに転落したと考えられる。従って周溝内に意図的に置かれた土器は無いとすることができる。次に時期であるが、土器は畿内第V様式の古い段階と考えられ、あえて時期差を考えれば、第1号墓と第6号墓が比較的古く、第7号墓がやや新しいとすることができるが、周溝墓群が築かれた時期を一応弥生時代中期末から後期初頭の短期間とすることができる。

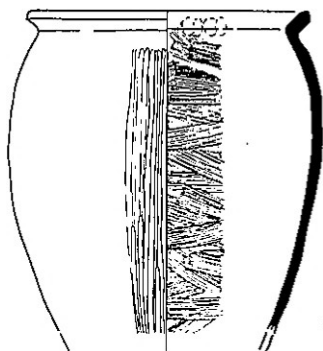
第2遺構面下層で検出された土壙（Y-SK-38）から出土した土器は、甕が2点で、口縁端面に篋描きの斜格子文を施すもの（Y-48）と底部を欠損するもの（Y-46）である。形態は観察表に示すとおりであり、周溝墓出土の土器と土器編年からの時期差はあまり認められない。

その他の遺物

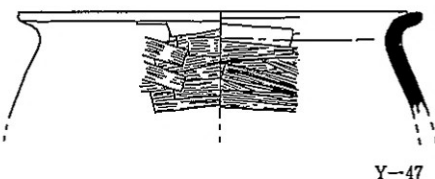
周溝墓群から出土した土器以外の遺物は、第2号墓から緑色片岩製の紡錘車1点、第6号墓からはサヌカイトの石槍1点、同じく第6号周溝墓から柄状木製品が1点出土している。紡錘車は円板状に荒割りした後、中央部に穴を穿ただけで、周縁部は、研磨が施されていないものであり、石庖丁などの石器からの転用かとも考えられる。石槍は、小型のもので、形状も若干いびつで粗製のものである。板状木製品は、



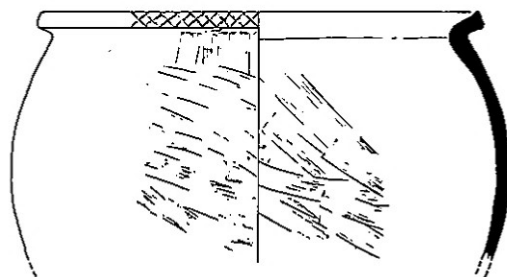
Y-45



Y-46



Y-47



Y-48

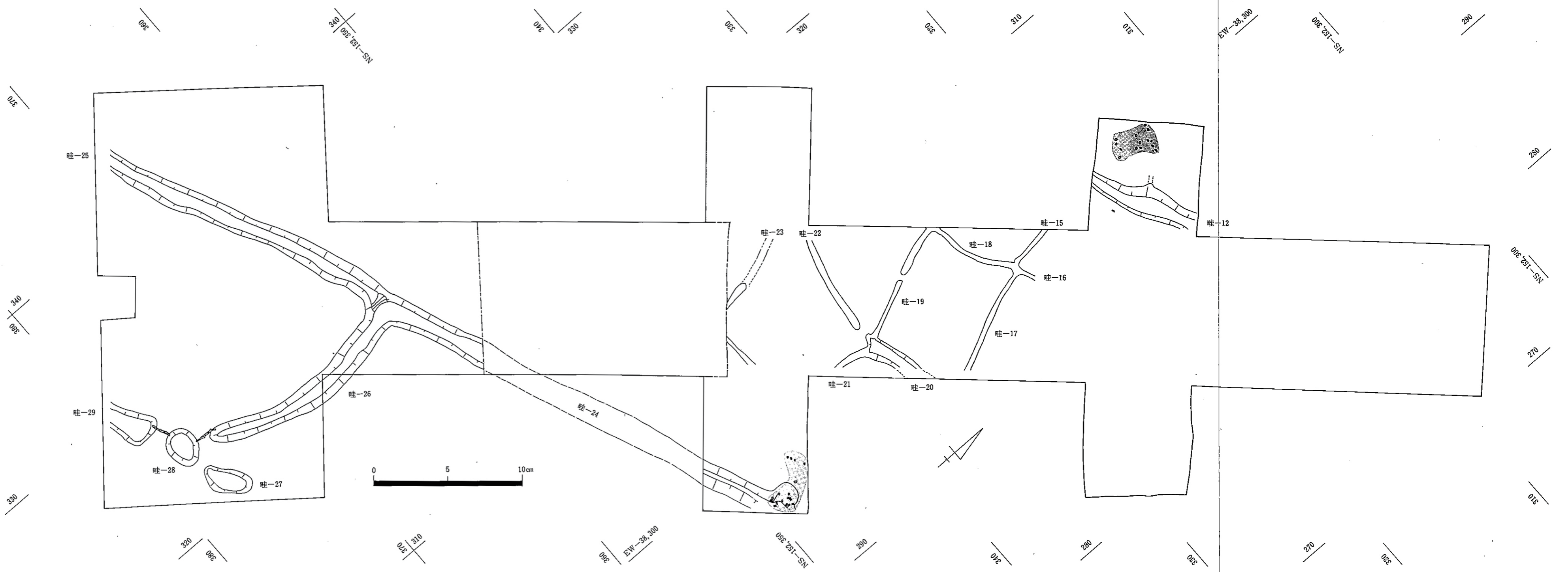
0 5 10cm

第43図 弥生時代第2遺構面下層遺構出土土器

図に示すとおり石斧の柄と考えるには、着装用の細工が認められず、何かに差し込み式の柄の破片と考えられる。他には、サヌカイトの剥片や木片等が出土しただけである。

c. 小結

遺構面真上に、前述したように、検出の目安となる層があり、黒色粘土層のベースに黒色粘土で埋没しており、見分けにくいにもかかわらず、幸いB・C調査区全域で、検出し得た。結果、弥生時代中期末～後期初頭の方形周溝墓群と水田跡が並存した状態で出土し、生産域に接して墓域の存在する一形態としての新しい知見を得た。Cトレンチ部では、遺構の現位置での現状保存のためこの方形周溝墓の下は未調査となったが、C-3・4拡張区では、さらに調査を進め、下層遺構として住居跡等の居住域の一部を検出した。時期的には、方形周溝墓群と近接し、やはり畿内第Ⅳ様式の土器が出土するもので、方形周溝墓群から出土する土器にくらべて、やや古色を呈するくらいの時期である。C-3・4拡張区の土層断面観察の結果から、判断するかぎりでは、水田跡と下層遺構である居住域との並存関係は認められない。しかし、直接的な資料では、そう推定せざるを得ないが、間接的に次のような資料がある。①、この下層遺構が粘土層で埋没しており、水没が考えられる。②、時期差が非常に微妙である。③、Bトレンチでは、下層遺構が認められず、しかも、C-3・4拡張区でのように明確に分層しうる厚さの堆積ではない。④、B調査区北側からC調査区南側へと微地形ではあるが、徐々に高くなっている。等の事柄である。そう考えると居住域の移動とそれに時期を同じくした“水田域の境界の移動”、もしくは“水田域の拡大”と推定することも、可能である。そうして、新たな居住域に移動した後、以前の居住域を、新たな墓域としたとも理解できる。いずれにしても、現段階で結論づけるのははなはだ危険な行為として、差しひかえるべきであろう。



第44図 弥生時代第2遺構面(1)

C. 弥生時代第3遺構面

基本層序Ⅶ層の最上部である青灰色粘質土層上面で、B・C区の全域で検出されている。地点によっては下層の遺構であるJ-SR-1の堆積層である砂層が盛り上がり、青灰色粘質土層がそうした場所では形成されていないため、この砂層上面が遺構面となっている地点もある。遺構としては、幅1m前後の溝4条と、多数の小溝、ピット、土壌などである。遺構内からの遺物出土量は極めて少なく、遺構の時期を推定できるものは、比較的少なく、遺構内堆積土も何種類かに分類できるが、一応検出面が同じと云うことで一括して扱っている。

a. 遺構

溝-1 (Y-SD-1) 第48図

Bトレンチ北端部から、B-2拡張区にかけて検出した横断面が逆台形の溝で、わずかながら円弧状を呈している。Bトレンチで検出した部分の溝肩に0.3~1mほどの杭列が認められる。溝内の堆積土は、灰黒色粘土一層で、Bトレンチ部分では、堆積土内中位より加工痕のある木片が1点と若干の土器片、B-2拡張区部分では、堆積土内下位よりサヌカイトの石器と石核が出土している。

溝-2 (Y-SD-2) 第48図

前述のY-SD-1と4~5mの間隔で平行しており、規模、横断面形ともに非常によく似た溝である。Bトレンチ部分で、これも又、0.3~1mの間隔で杭列が認められる。溝内の堆積土は、これもY-SD-1と非常によく似た、灰黒色粘土一層で埋没している。両溝の接点付近は、涌水が激しく、遺構面が自然崩壊するような状態であったため、土層断面で両溝の関係について確実な知見を得るに致らなかったが、その遺構内埋土に差異が認められるため、時期的には前後関係で理解されるものと考えられる。遺物は全く出土しなかった。

溝-3 (Y-SD-3) 第48図

前述した2条の溝とは異なり、横断面形は、上部を大きく開くU字形を呈し、かすかに円弧を描くような形でBトレンチからB-1拡張区にかけて検出した。溝内の堆積土は、灰黒色の粘土であるが、砂質を含んでおり、最下部では、うっすらと砂の堆積が認められた。遺物の出土は認められなかった。

溝-6 (Y-SD-6) 第48図

Bトレンチ中央部やや北寄りの地点で検出した小溝である。溝内には、一列にピットが認められ、水を流すには、はなはだ不適な形状である。径の細い木や、草などを立てた柵状のものを想定すると、この遺構は、極めてよく理解できる。北側は、検出した部分で終わっており、南側については、B-4拡張区で検出していないことから、東に曲るか、終わるかのいずれかと考えられる。

溝-7 (Y-SD-7) 第48図

Bトレンチ中央付近とさらにB-3・4拡張区で検出した溝である。B-4拡張区付近では、断

面形が下向きの半円形でさらに底部が幅0.2m、深さも0.2mの大きさを横断面U字形に一段深くなり2段階になっている。この付近では、前述した3条の溝とほぼ同様の規模で中型の溝であるが、BトレンチからB-3拡張区へと徐々に幅も狭く、浅くなって、横断面形も浅いU字形を呈している。溝の方向もBトレンチとB-3拡張区との境付近で東西方向へと90°近く屈曲している。この溝は、Bトレンチ中央部で直角に交わる形でもう1条の溝を枝分かれするような形で派生させているが、この溝と接する隅付近から、溝埋没後の堆積と考えられる状態で鉢形土器を1個体検出している。他にB-4拡張区で、溝内堆積土より若干量の土器片が、同拡張区北東隅の溝肩付近より甕形土器片(第50図 Y-13)が出土している。

溝-9 (Y-SD-9)

溝と云うよりは、大型の舟形土壇と云ったほうが適切かもしれない遺構である。この遺構面を検出される遺構の中では、遺構同士の切り合い関係、遺構内堆積土等から、最も時期的に新しい遺構であるが、残念ながら遺物の出土がなく、土器によりさらに具体的な時期を与えられないが、堆積土からすると、後述する上層遺構Y-SR-1と同時期かもしれない。

溝-11 (Y-SD-11)

多数検出した小溝の中の一条で、Bトレンチ及びB-5・6拡張区で東西方向に直線的に延びる溝である。横断面形は浅いU字形で、黒色砂質土で埋没しており土器片が1点出土している。遺構の切り合い関係から推定するとこの遺構面の中では古い段階のものである。

溝-13 (Y-SD-13) 第48図

半径約3.5mの円弧状に検出した小溝である。その横断面形は、浅く皿状を呈しており、弧状になる内側で検出しているピット(Y-SP-200~202)との関連を考えると竪穴式住居の壁溝である可能性も考えられる溝である。溝内は、灰黒色粘土が堆積していた。溝内及びその周辺からの遺物の出土は認められなかった。

溝-19~23 (Y-SD-19~23)

5条とも一連の溝と考えている。水の流れた方向が不明であるので、Y-SD-20が北流して4条の溝に枝分かれしているものか、4条の溝が南流して1条に合流したのか判断できない。これらの溝の接点に位置するY-SK-22は溝の底部をさらに掘り込んだ土壇であり、溝内に堆積していた、灰黒色の粘土よりもさらに粒子の微密な粘土が堆積していた。他の遺構の分布状況から推定して、おそらく生活に関する水の取・排水に関わるものと考えられるが、あくまでも推定の域をでるものではない。溝・土壇および周辺からの遺物の出土は認められない。

その他の溝状遺構

B、Cトレンチでは、この遺構面において、前述した溝以外にも多数の溝状遺構を検出した。それらの大半は小規模なもので、溝内では出土遺物も認められず、その性格もまったく不明なものがほとんどである。

柱穴、及びその他のピット

300ヶ所ほどのピットを検出し、各遺構面中最もその検出量が多いが、建物として復原できたものはない。

土壌

B、Cトレンチにおいて散在的に検出されたが、他の遺構同様、遺物の出土が極めて少なく、時期及びその性格に言及できるものはない。

上層遺構自然河川跡-1 (Y-SR-1)

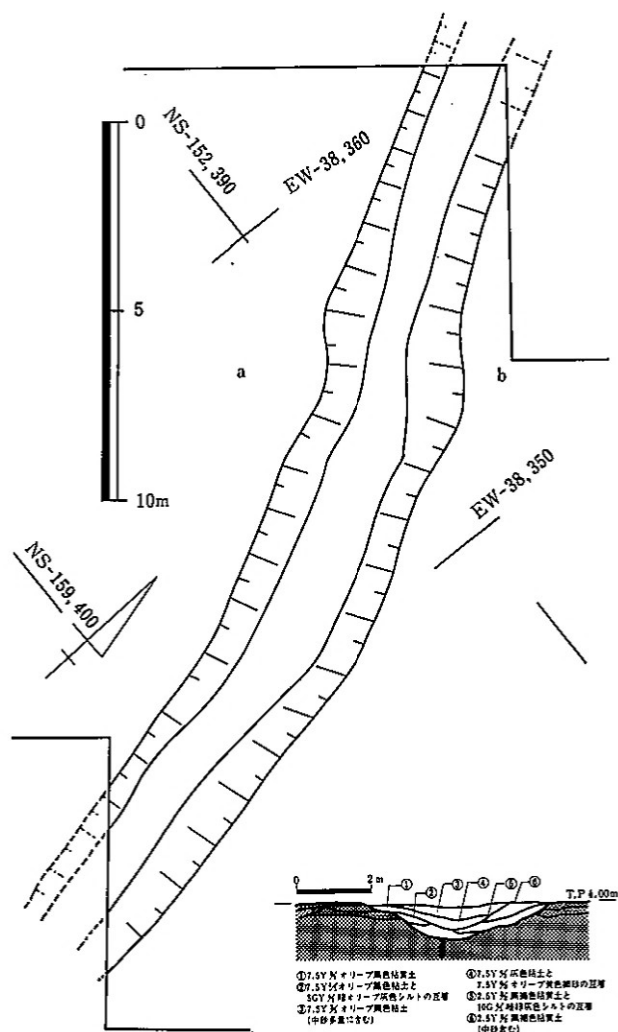
Cトレンチ及びC-1・2拡張区で検出した小河川跡である。横断面は、底がやや丸味を帯びて平坦面をもち上部の開くV字形を呈しており、幅の割に深さがある。溝内は、そのベースとなる地質に砂質が多く見受けられるにもかかわらず、粘土質の堆積土で、間に砂を薄く何層か堆積させている。この形状などから人工的な溝である可能性もあるが、ここでは一応自然形成と考えている。残念ながら遺物の出土は、この遺構においても極めて少ないが、時期を判別しうる土器片が、含まれてはいる。

b. 遺物

土器

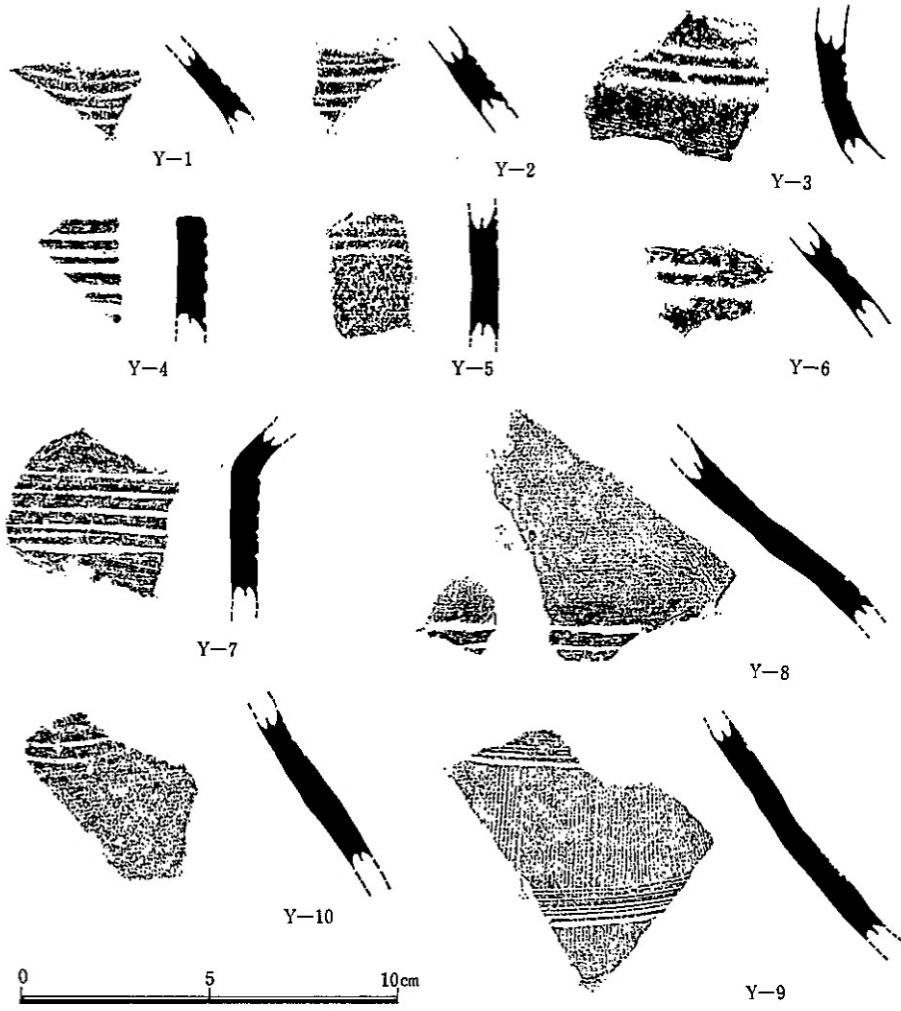
弥生時代第3遺構面からの出土土器の量は、他の遺構面と比べて非常に少なく、僅かに、土壌(Y-SK-18)や溝(Y-SD-7)から出土した数点の土器があるが、基本層序VI層から出土される遺物のうち、

この遺構面真上のもの及び、VI層でも上部の出土であるが、形式的にこの遺構面との関連が強いと思われるものを抽出すると、ある程度資料として扱える量となる。まず遺構出土の遺物として、土壌(Y-SK-18)から1点のみ出土した蓋があげられる(第48図 Y-14)。形態は観察表のとおりであり、全体に粗雑な作りであるが、一応前期の蓋の特徴を有しており、この土壌の時期を求める資料としている。溝(Y-SD-7)内及び肩付近からは甕・鉢など器形の判る土器

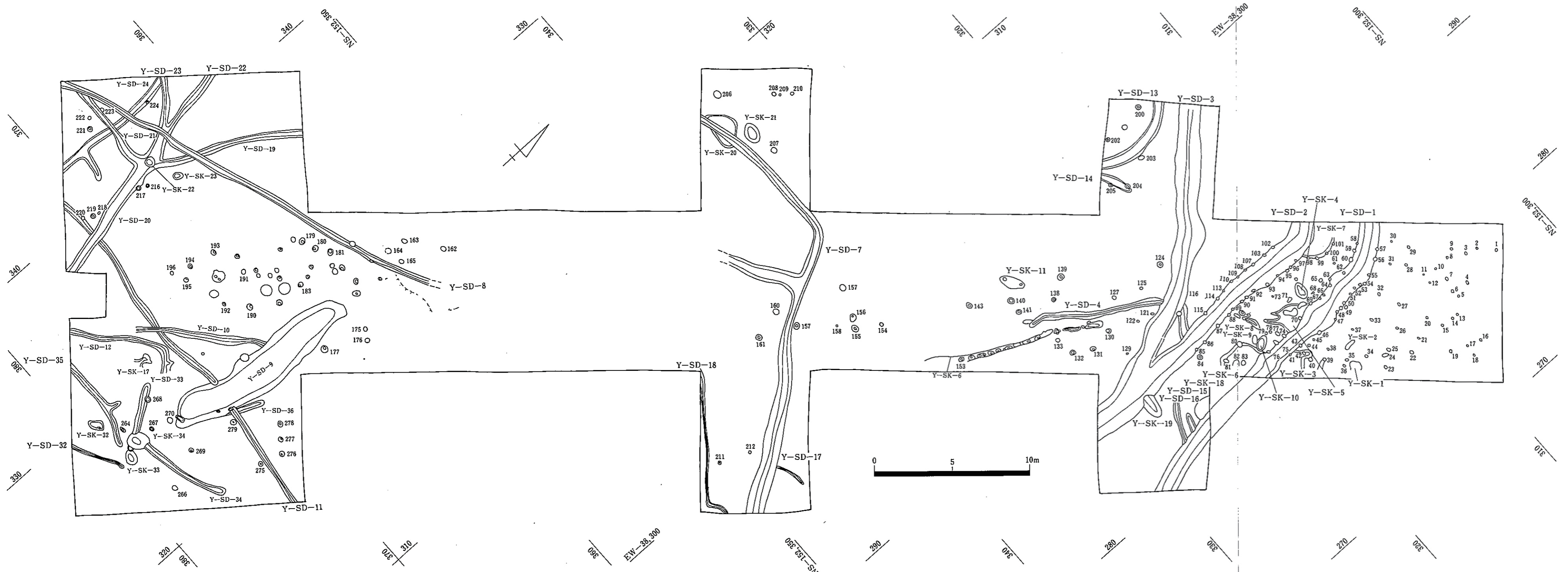


第46図 弥生時代第3遺構面上層遺構 (Y-SR-1)

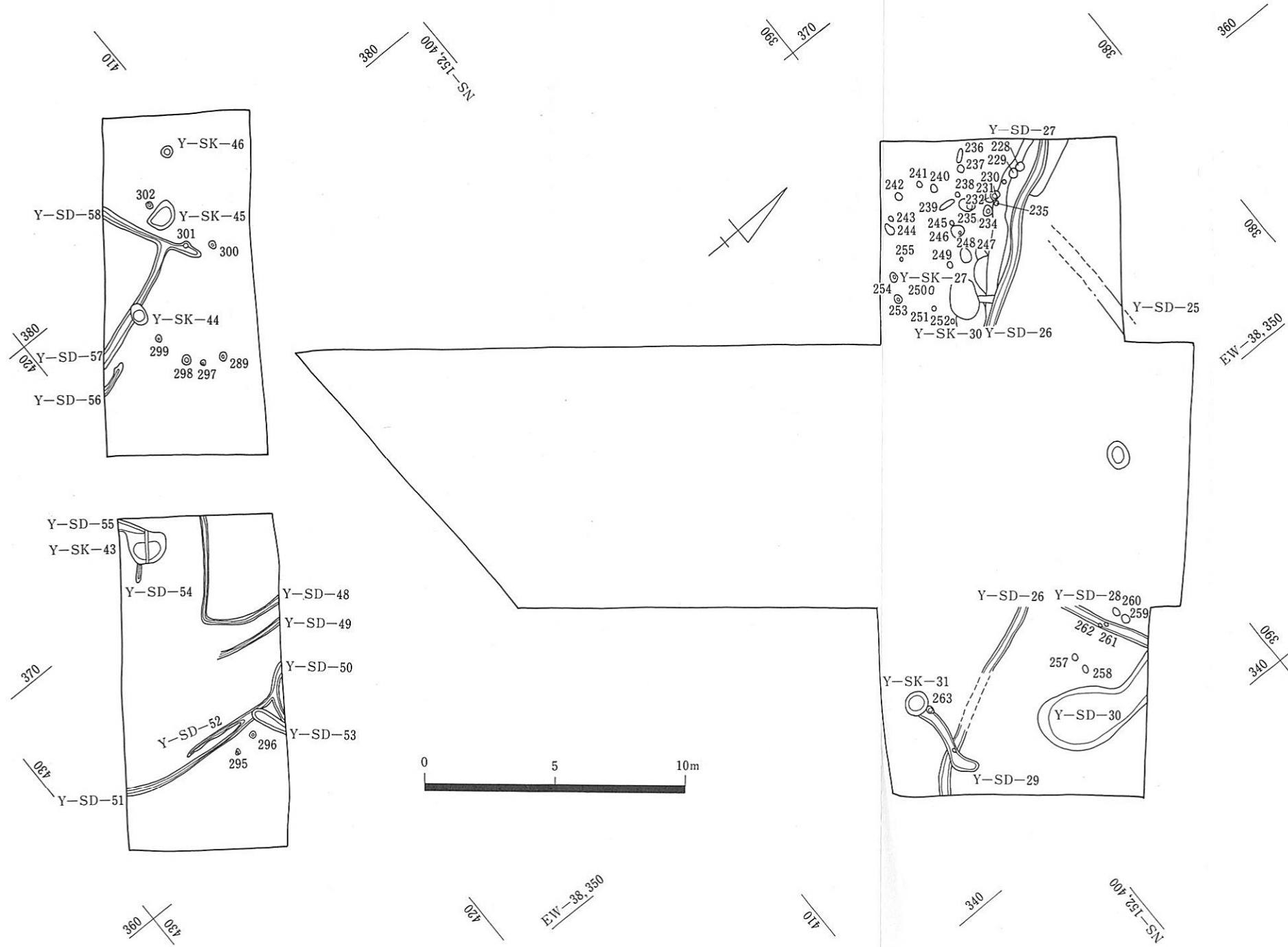
片が4点ほど出土している。甕（Y-12・13）、鉢（Y-11）の形態は観察表のとおりで、いずれも前期の特徴を有しており、この溝の時期を求める資料としている。甕口縁部片（Y-18）は、観察表に示したように、口縁に断面三角形の貼り付け突帯を持っている。この貼り付け突帯は縄文晩期の「長原式」と呼称される土器とは趣を異にしている。次に前述したように、VI層出土の中から抽出した遺物であるが、器形の判るものとして、壺の小片は篋描き沈線文が明瞭に残るもので（第47図 Y-1～3、5～8、10）、1点のみが中期初頭にする櫛描き文を施すものである。（Y-4）は溝出土の鉢（Y-11）と共通するものである。蓋破片（Y-15）の形態は観察表のとおりで有るが、頂部を欠いていることから、高杯脚部である可能性も否定できないが、いずれの器形にしても、前期の特徴を有しており、中期以降に下ることはない。甕底部も観察表のとおり、前期に属するものである（Y-16）。甕口縁部片（Y-17）は溝（Y-SD-7）出土のもの（Y-18）と同様に口縁に断面三角形の貼り付け突帯を持ち、端面に刻み目を施す以外は、同



第47図 弥生時代第3遺構面出土土器拓影



第48図 弥生時代第3遺構面(1)



第49図 弥生時代第3遺構面(2)

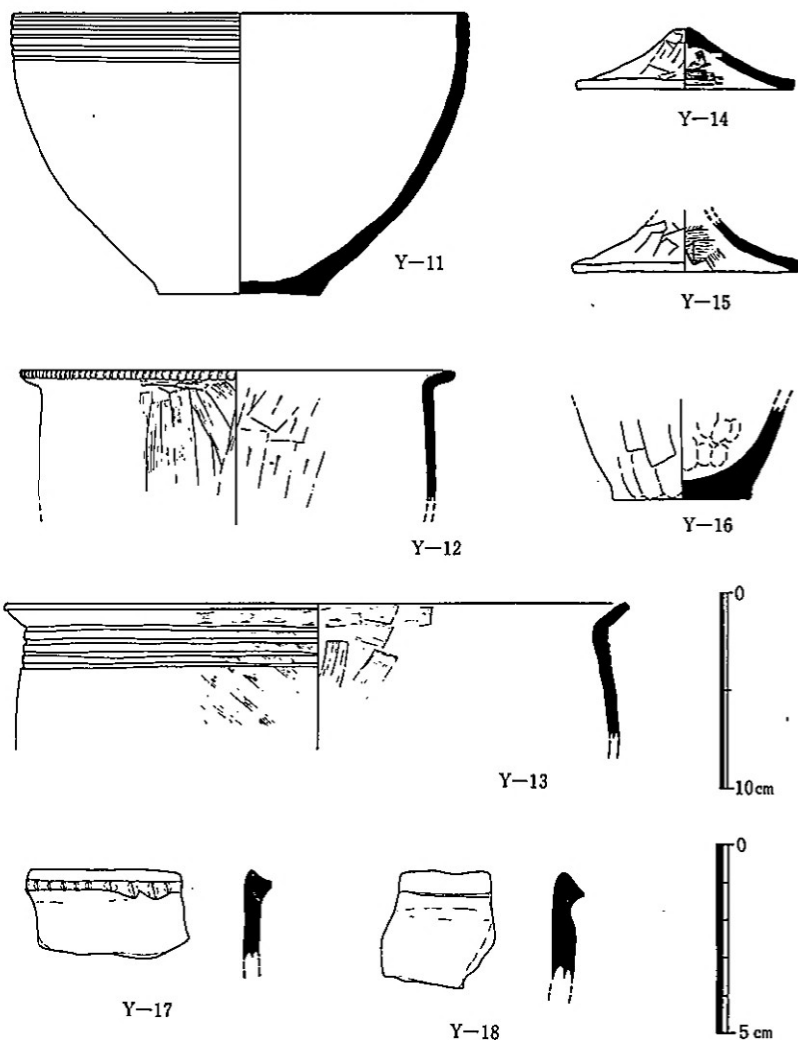
じ手法であると思われる。

以上、第3遺構面出土の土器を概観したが、ほとんどが前期でも畿内第I様式新段階に属するものであり、この遺構面の主要遺構の時期としては、前期後半が考えられる。しかし、遺構の中でも述べたように、遺構内堆積土の異なるものが含まれており、事実、C-3・4拡張区ではこのシルト層上面を遺構検出面として、中期でも後半の遺物（土壌Y-SK-48出土遺物）を出土

する遺構が検出されている。また弥生時代前期から中期の堆積層に相当する基本層序VI層自体が、B・C調査区のほとんどの地域で非常に薄い堆積状況でもあり、B・C調査区の低位面において、出土遺物を検討した結果は、遺構からの検討結果と同じで、第3遺構面の時期を前期後半とすることができる。ただ、C-3・4拡張区の微高地に関しては、遺構検出状況が必ずしも前期後半だけであるとは言えず、中期まで下がることも十分考え得る。

c. 小結

弥生時代の最も古い段階の遺構面で、前期



第50図 弥生時代前期土器実測図

新段階に属する遺構がその中でも最も古く、下限は、弥生時代第2遺構面の項で述べておいたように、中期中頃のものまで含まれていると考えられる。まず上限にあたる前期新段階の遺構として、ほぼ間違いなく比定できるものは、Y-SD-7とY-SK-18だけであるが、可能性の高いものとして、Y-SD-3・11、が追加される。しかしこれらを含めたとしても、わずかに3条の溝と土壌が一つであり遺構密度としては非常に希薄であると云える。すでに調査が終了した久宝寺遺跡の北調査区では、縄文時代晩期長原式の段階の突帯文土器に混じって、前期中段階と

される弥生式土器片が出土しているが、遺構的には、ほとんど認められるものがなく、遺物量としてもそう豊富な量とは云えないものである。これらの資料から、この遺跡での人々の営みの初現形態として、短期間でかつ定住性のまだまだ希薄な非常に小規模な集落と云う、推察も可能かもしれない。次の段階の遺構としてY-S D-1・2をはじめとして、他の時期不明の遺構の大半がこの段階と考えられる。特にピットは、そのほとんどがこの時期と考えられる。Y-S D-1の東側で検出しているピットは、すべてが草木の痕跡と考えており、人工的なものは、西側に分布するピットである。どうも、この2条の溝は、区画すると云う性格を有するかのようである。しかし、この段階の遺構として前述した、Y-S D-13とY-S P-200・202で構成される建物以外は、あまり、住居としての可能性が指摘できず、まだまだ希薄な遺構分布である。3番目に、下限段階の遺構があげられるが、この段階では、又、若干南側への集落の移動を想定させるような遺構出土状態である。

表3 弥生時代遺物観察表(第3・2遺構面)

土器番号	器形	出土地点・遺構	法量(cc)	形態の特徴	成形・調整	胎土・色調	備考
Y-1	壺	B区 110の2 第VI層 黒色粘質土層 (包含層)			外面はハケ調整後沈線を施す。内面は板状工具によるナデ。	・胎土 砂粒を多く含む ・外面 ぶい黄褐色 ・内面 灰黄色	破片 篋描き沈線文
Y-2	壺	B区 110の2 第VII層 黒色粘質土層 (包含層)			内外面とも磨滅が著しく調整不明、外面に沈線文を施す。	・胎土 砂粒を多く含む ・外面 灰黄色 ・内面 淡黄色	破片 篋描き沈線文
Y-3	壺	B-4区 第VI層 黒色粘質土層 (包含層)			外面は調整不明瞭。内面は板状工具によるナデ。外面に篋描き沈線。	・胎土 砂粒を多く含む ・外面 淡黄色 ・内面 淡黄色	頸部破片 篋描き沈線文
Y-4	鉢	B-4区 第VI層 黒色粘質土層 (包含層)		ほぼ立ちぎみの口縁で端部は水平に面を持つ。	内外面ともナデ、端部ははいねいなナデを施す。外面に深い篋描き沈線を施す。	・胎土 微小な砂粒を少量含む ・外面 褐灰色 ・内面 ぶい黄褐色	口縁部のみ遺存 篋描き沈線文
Y-5	壺	C区 第VI層 黒色粘質土層 (包含層)			内外面とも磨滅が著しいが、ハケ調整と思われる。	・胎土 砂粒を含む ・外面 淡黄色 ・内面 ぶい黄褐色	破片 篋描き沈線文
Y-6	壺	B-4区 第VII層 黒色粘質土層 (包含層)			内外面とも磨滅が著しく調整不明、外面に篋描き沈線文。	・胎土 砂粒を少量含む ・外面 淡黄色 ・内面 ぶい黄褐色	体部破片 篋描き沈線文 Y-3と同一個体
Y-7	甕	B区 110の2 第VI層 黒色粘質土層 (包含層)		ほぼ直の頸部から外反する口縁部。	外面はヨコ及び斜方向のハケ調整の後、篋描き沈線文(5条)を施す。内面はナデを施す。	・胎土 砂粒を多く含む ・外面 灰白色 ・内面 灰白色	頸部から口縁部にかけての破片 篋描き沈線文
Y-8	壺	B-1区 第VI層 黒色粘質土層 (包含層)			外面は板状工具による不定方向のナデの後、篋描き沈線文を施す。内面は指オサエの後、斜方向のハケ調整。	・胎土 砂粒を多く含む ・外面 ぶい黄褐色 ・内面 灰黄色	体部破片 篋描き沈線文
Y-9	壺	B区 110の2 第VI層 黒色粘質土層 (包含層)			外面はタテ方向のはいねいなハケ調整。内面ははいねいなナデを施す。外面に数条単位の櫛描き文。	・胎土 密 ・外面 灰黄褐色 ・内面 ぶい黄褐色	肩部破片 櫛描き文

土器番号	器形	出土地点・遺構	法量 (cm)	形態の特徴	成形・調整	胎土・色調	備考
Y-10	壺	C区 第VI層 黒色粘質土層 (包含層)			内外面とも板状工具によるナデ。篋描き沈線文を外面に施す。	・胎土 砂粒を多く含む ・外面 ぶい黄褐色 ・内面 灰黄色	肩部分破片
Y-11	鉢	B-4区 1-10の2 黒色粘質土層 (包含層)	口径 22.7 底径 8.1 器高 14.6	大きく安定した平底から内湾しながら上外方に伸び、口縁部は立ちぎみに水平な面をもって終わる。	内外面とも剝離が著しく調整不明。	・胎土 砂粒を多く含む ・外面 灰白色 ・内面 灰白色 内外面とも黒斑	口縁外面に篋描き沈線文(5条)
Y-12	甕	B-4区 Y-SD-7層付近	口径 22.2 残存高 7.3	胴の張らない体部からほぼ水平に短く屈曲する口縁部を有す。	口縁部外面にヨコ方向のハケを施した後、体部にかけてタテ方向のハケを施す。体部内面はタテ方向、口縁部内面はタテ方向のナデを施し、端部に刻目を入れる。	・胎土 砂粒を多く含む ・外面 ぶい褐色大部分煤付着 ・内面 灰褐色	口縁に刻目
Y-13	甕	B-4区 Y-SD-7	口径 31.4 残存高 7.0	胴の張らない体部と短く「く」の字形に外反する口縁部。	体部内外面は斜方向のハケ、口縁部は指オサエで成形後、内外面ともヨコ方向のハケを施す。	・胎土 砂粒を多く含む ・外面 浅黄色 ・内面 黄灰色	口縁直下体部に篋描き沈線文(4条)
Y-14	壺蓋	B-2区 Y-SK-18	径 10.6 器高 3.1	裾の広がる背の低い円錐形で裾端部は僅かに反る。頂部に紐孔と思われる円孔をひとつ穿つ。	外面は指オサエで成形後、板状工具による強いナデ。内面に粗いハケメ。端部はヨコナデ。	・胎土 砂粒を多く含む ・外面 浅黄色 ・内面 黒色	頂部に穿孔(1個)
Y-15	甕蓋	B区 CⅦC2の1、2、4 第VI層 黒色粘質土層 (包含層)	径 11.4 残存高 2.8	やや外反気味の裾の広い円錐形を呈すが頂部は欠損。	外面は板状工具によるやや強めのナデ。内面は粗いハケ。裾部はヨコナデ。	・胎土 砂粒を含む ・外面 灰黄色 ・内面 灰黄色 黒斑	高杯脚部とするには時期的にみて奇異の為、蓋と考えたい。
Y-16	甕	B-4区 第VI層 黒色粘質土層 (包含層)	底径 9.0 残存高 4.8	平底と立ちぎみに斜上方に伸びる底部。	外面は指オサエによる成形後、板状工具によるタテ方向の強いナデ、底部外面はケズリ後、ヘラミガキを施す。内面は指オサエによる成形。	・胎土 砂粒を少量含む ・外面 灰黄色～褐灰色 ・内面 灰黄色	底部のみ遺存
Y-17	甕 (深鉢)	B-6区 第VI層 黒色粘質土層 (包含層)		ほぼ直に立ち上がり、断面三角形の貼り付け突帯をめぐらす。口縁部突帯部分に刻目を施す。器壁は薄い。	内外面ともナデによる調整と思われる。	・胎土 微小な砂粒を多く含む ・外面 ぶい黄褐色 黒斑 ・内面 ぶい黄褐色	口縁部のみ遺存 突帯部に刻目 縄文晩期土器
Y-18	甕 (深鉢)	B-4区 Y-SD-7		ほぼ直に立ち上がり、断面三角形の貼り付け突帯をめぐらす口縁部。	内外面ともナデ調整。	・胎土 微小な砂粒を含む ・外面 暗灰黄色	口縁部のみ遺存 貼り付け凸帯 縄文晩期土器
Y-19	高杯	C区 第1号墓マウンド	裾径 14.0 残存高 3.3	裾部は下方に大きく開き、端部を上方に折りまげ丸く終わる。2孔4対の穿孔があり、いずれも貫通していない。	外面はタテ方向の丁寧なヘラミガキ。裾端から内面全体にかけてヨコナデを施す。	・胎土 砂粒をわずかに含む ・外面 黄灰黒色 ・内面 黒褐色	脚部のみ遺存
Y-20	高杯	C区 第1号墓側溝(マウンド)	口径 29.3 残存高22.5	杯底部からやや内湾ぎみに長く伸びた後、内傾気味に立ち上がり、水平に面をもって終わる。口縁脚柱状部に穿孔。	外面は脚部・杯部とも上から下へのヘラミガキ。口縁部は波状のヘラミガキ。脚部内面はハケ調整。杯部内面はヨコ方向のハケ。	・胎土 砂粒を少量含む ・外面 ぶい黄褐色 ・内面 ぶい黄褐色	脚部欠損 口縁部に凹線(1条)を施す。
Y-21	甕	C区南西コーナー 釜場 第1号墓マウンド上層	口径 10.6 残存高 3.5	短く外反する口縁で、端部は丸く終わる。	口縁部は指オサエによる成形。口縁外面にハケ目。体部内面は不定方向のナデ。	・胎土 微小な砂粒を含む ・外面 灰黒色 ・内面 灰黒色	

土器番号	器形	出土地点・遺構	法量 (ca)	形態の特徴	成形・調整	胎土・色調	備考
Y-22	甕	C区 第1号墓周溝付近	口径 15.7 残存高 10.0	内湾した体部から「く」の字形に外反する口縁で、端部は面を持つ。	外面は剝離が著しく調整不明。口縁部内部はハケ調整。体部内部はヨコナデ。	・胎土 微小な砂粒を含む ・外面 黒色 ・内面 黒褐色	
Y-23	甕	C区 第1号墓周溝内	口径 18.0 残存高 9.0	ほぼ直に立ち上がった短い頭部から外反し外下方へ折り返した口縁部を有し、端部は外方に面を持つ。	口縁部は垂下部を貼り付けている。口縁部外面はタテ方向のヘラミガキ。頸部内部は板状工具によるやや強めのナデ。口縁部内部はハケを施し、端部にかけてさらにヨコナデ。	・胎土 密 ・外面 灰黄色～にぶい黄褐色 ・内面 灰黄色～にぶい褐色	
Y-24	甕	C-Ⅶ区 第2号墓マウンド	口径 20.6 残存高 3.2	漏斗状に開いた後、斜下方に屈曲する口縁部。	内外面ともハケ調整。折り返し部分は板状工具による丁寧なナデを施す。	・胎土 砂粒を多く含む ・外面 灰色 ・内面 灰色	口縁部のみ遺存
Y-25	甕	C-Ⅶ区 第2号墓マウンド	口径 20.4 残存高 5.9	漏斗状に開く口縁部で端部は外下方にはみ出して丸く終わる。	外面は板状工具による斜方向のナデ。内面はヨコ方向のハケ調整。口縁部はナデ。	・胎土 砂粒をわずかに含む ・外面 にぶい黄褐色 ・内面 にぶい黄褐色黒斑	口縁部のみ遺存
Y-26	甕	C区 第2号墓周溝内	口径 21.0 残存高 11.5	大きく外反する短い口縁で、体部の胴の張りは強くない。口縁端部は面で終わる。	頸部に指オサエが明確に残る。外面全体にナデを施した後、体部から口縁下部までヘラミガキ。体部内部から口縁下部までタテ方向のナデ。口縁部にかけてヨコナデを施す。	・胎土 砂粒を少量含む ・外面 黒色 ・内面 黒褐色	
Y-27	甕	C区 第3号墓マウンド	口径 14.2 残存高 4.1	ゆるやかに外反する口縁で、端部は下方に拡張されている。	外反する口縁に垂下部を貼り付けている。内外面とも板状工具による強いナデを施す。	・胎土 微小な砂粒を少量含む ・外面 灰褐色 ・内面 にぶい褐色	口縁部のみ遺存
Y-28	甕	C区 CⅦj 5の3 第3号墓	口径 14.2 残存高 4.1	直線的に内傾する体部から水平に伸びる口縁部で、端部は丸く終わる。	外面は剝離が著しく調整不明。内面はナデを施す。	・胎土 砂粒を含む ・外面 黒色 ・内面 黄灰色	
Y-29	甕	C区 第3号墓マウンド	口径 11.8 残存高 9.8	「く」の字形に外反する口縁で、端部は面をもつ。	体部外面は煤付着の不明瞭であるが、最終調整はハケ調整と思われる。体部内部は斜方向のハケ。口縁部内外面はヨコナデ。	・胎土 砂粒を多く含む ・外面 黒色 ・内面 (煤付着) 暗赤灰色～黒色	
Y-30	甕	C-4区 第6号墓周溝内	口径 9.6 体部径 10.2 底径 4.2 器高 12.1	平底で、最大口径を上方に有す体部。短く「く」の字形に外反する口縁を有す。口縁端部は面を持つ。	底部に成形の際の指オサエが残る。体部外面にタテ方向のヘラミガキ。体部内部から口縁内部にハケを施した後体部下方にヨコ方向のヘラミガキ。口縁部外面と端部に板状工具によるナデを施す。	・胎土 砂粒を少量含む ・外面 灰白色～にぶい黄褐色 ・内面 煤付着 灰黄色～にぶい黄褐色	

弥生時代 遺物観察表 (第2・1遺構面)

土器番号	器形	出土地点・遺構	法量 (ca)	形態の特徴	成形・調整	胎土・色調	備考
Y-31	甕	C-4区 第6号墓周溝内	口径 11.5 体部径 12.2 残存高 8.1		外面は剝離が著しく調整不明。体部内部はタテ方向のケズリ。口縁内面と端部にヨコナデを施す。	・胎土 砂粒を少量含む ・外面 煤付着 ・内面 灰黄褐色	底部欠損
Y-32	甕	C-4区 第6号墓マウンド	口径 12.9 残存高 7.6	ゆるやかに内湾する体部から「く」の字形に外反する口縁で、端部は面を持つ。	体部外面はタテ方向のハケを施し、口縁部外面は回転ハケ調整。体部内部もハケ調整であるが、成形の際の指オサエが残る。口縁部内部も回転ハケ、端部は丁寧なナデ。	・胎土 砂粒を少量含む ・外面 にぶい黄褐色 ・内面 にぶい褐色～褐色	

土器番号	器形	出土地点・遺構	法量(cc)	形態の特徴	成形・調整	胎土・色調	備考
Y-33	甕	C-4区 第6号墓周溝内	口径 16.6 残存高 6.0	内傾する体部から「く」の字形に短く外反する口縁で、端部は面で終わる。	体部外面は板状工具によるナデのヘラミガキ。体部内面はケズリを施す。口縁内外面及び端部はハケ調整。	・胎土 砂粒を少量含む ・外面 ぶい黄褐色 ・内面 灰白色	
Y-34	高杯	C-4区 第6号墓周溝内	口径 24.8 残存高 6.5	杯底部からわずかに内湾気味に斜上方に伸び一旦直に立ちあがった後屈曲し、斜上方に伸び、口縁端部は丸く終わる。	杯底部外面は板状工具によるヘラケズリ。杯部外面は板状工具による丁寧なナデ調整の後タテ方向のヘラミガキ内面は全体に板状工具による丁寧なナデ調整の後放射状にヘラミガキを施す。	・胎土 砂粒を少量含む ・外面 灰白色～褐灰色 ・内面 灰白色～黄灰色	有段高杯杯部
Y-35	高杯	C-4区 第6号墓周溝内	口径 22.0 裾径 13.0	杯底部からやや内湾ぎみに長く伸びる口縁部を有す杯部。斜下方に伸び外方に面をもって終わる裾部で、7ヶ所に穿孔する。	杯部外面は杯底部から上方へのヘラミガキを施し、口縁部はヨコナデ。杯部内面は不定方向の板状工具によるナデ。裾部外面はタテ方向のヘラミガキの後、裾部端部にかけてヨコナデ。内面は丁寧なヨコナデ。	・胎土 微小な砂粒を含む ・外面 浅黄色 ・内面 ぶい黄色	脚柱状部分欠損
Y-36	高杯	C-4区 第6号墓周溝内	裾径 12.4 残存高 6.0	斜下方にやや外湾してのびる脚部のみ遺存。端部は外方に面をもって終わる。	外面にタテ方向のヘラミガキを施す。内面に成形の際の指オサエが残り、板状工具によるナデを施す。端部は丁寧なナデ。	・胎土 微小な砂粒を少量含む ・外面 黒色 ・内面 灰色	脚部のみ遺存
Y-37	壺	C-4区 第6号墓周溝内	口径 11.8 残存高 9.4	わずかに外反して立ちあがる口縁で、端部は丸く終わり、外面に浅い段を有す。	外面は不定方向のハケ調整後、口縁部はタテ方向のヘラミガキ。体部は部分的にヘラミガキを施す。口縁部内面はハケ調整後タテ方向のヘラミガキを施し、体部内面はユビオサエで成形後、粗いハケを施し、部分的にタテ方向のヘラミガキ。頸部内面は強いヨコナデ。	・胎土 砂粒を多く含む ・外面 灰黄褐色 ・内面 灰黄褐色～橙褐色	体部ヘラミガキのタテ方向とヨコ方向の前後関係は不定
Y-38	壺	C-4区 第6号墓周溝内	口径 14.8 残存高 8.0	体部からほぼ直立する頸部から大きく外反する短い口縁を有す。端部はほぼ垂直に面を持つ。	頸部外面にタテ方向のヘラミガキを施す。内面には成形の際の指オサエが残るが、ハケ調整が認められる。口縁部は内外面とも丁寧なナデ。	・胎土 砂粒を少量含む ・外面 ぶい黄褐色 ・内面 ぶい橙褐色～ぶい褐色	
Y-39	無頸壺	C-4区 第6号墓周溝内	口径 9.4 体部径17.2 底径 4.3 器高 12.1	底部は低い高台を有す。体部は大きく開く張る偏平気味の球形で、短く立つ口縁を貼り付けており、端部は丸く終わる。	外面は体部上半にタテ方向、中央最大開径部にヨコ方向、下半にタテ方向のヘラミガキ。口縁部直下に波状文を施し、紐孔を穿った後に完成。内面は上半が板状工具による不定方向のナデ。下半と口縁直下部がハケ調整。	・胎土 砂粒を少量含む ・外面 ぶい黄褐色 ・内面 明褐灰色	ほぼ完形 紐孔は2個1対で穿たれている。 体部上端波状文
Y-40	鉢 (疑口縁?)	C-4区 第6号墓周溝内	口径 16.1 体部径16.2 底径 6.6 器高 6.6	平底からゆるやかに外反した体部で、口縁は立ち気味に面で終わる。	底部内面に成形の際の指オサエが残る。内面に板状工具によるナデ、外面は煤付着で調整不明。	・胎土 底部に粗い砂粒を含む ・外面 灰黄色 ・内面 ぶい黄褐色～灰黄色	
Y-41	短頸壺	C-4区 第6号墓周溝内	口径 10.7 体部径 16.5 底径 5.0 器高 23.6	突出した平底から長筒形の体部に斜外方に開く口頸部を持つ。口縁上端部は面をなす。	外面は、口頸部及び体部上半縦方向の板状工具によるナデ、体部下半は縦方向のヘラミガキを施す。内面は、口頸部に板状工具による横方向のナデ、体部調整不明、体部下半、縦方向の板状工具によるナデを施す。	・胎土 砂粒を少量含む ・外面 明褐色 ・内面 褐灰色	

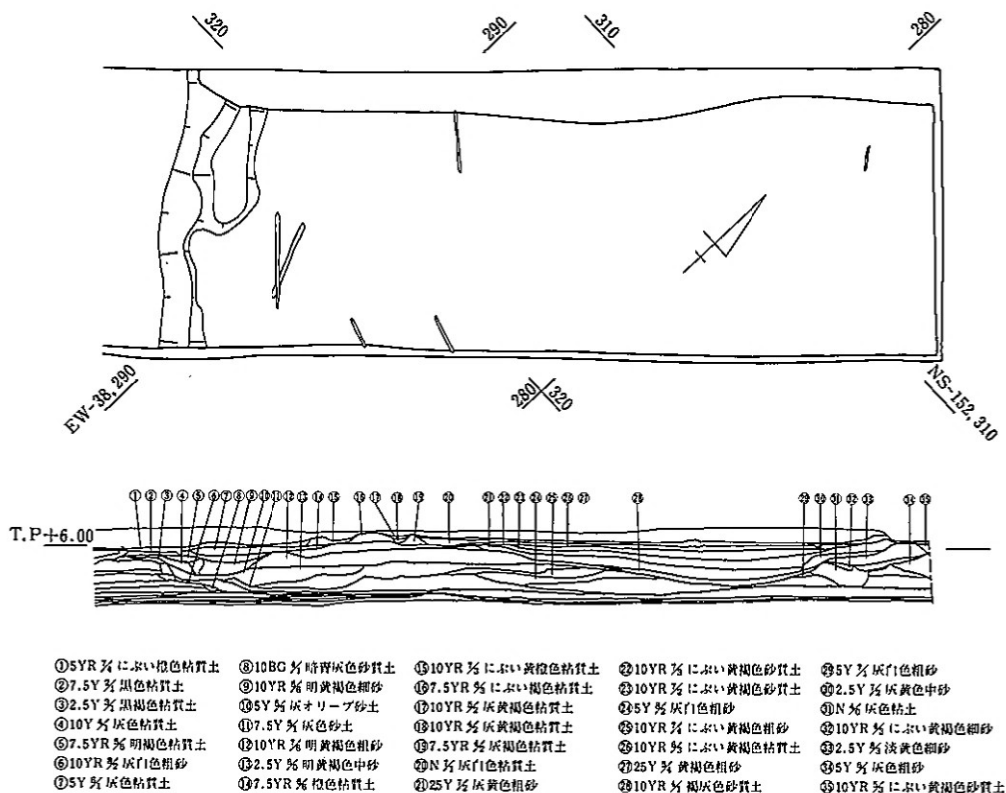
土器番号	器形	出土地点・遺構	法量 (cc)	形態の特徴	成形・調整	胎土・色調	備考
Y-42	高杯	C-4区 第6号墓周溝内	裾径 11.0 残存高 9.9	頸部はゆるやかに斜外方に伸び、脚台端部は面を持つ。	外面は縦方向のヘラミガキ、内面はナデを施す。脚柱部内面に絞リ目痕を残す。	・胎土 砂粒を少量含む ・外面 淡黄色 ・内面 灰白色	
Y-43	長頸壺	C区 第7号墓南側 (Y-SX-1)	口径 11.4 体径 20.6 底径 6.9 器高 34.0	平坦な底部からやや胴の張る体部に長い筒状の頸部を持つ。やや斜外方に伸びる口縁部の上端部は面をなす。	外面は、口縁部ヨコナデ、頸部から体部上半縦方向の部分的ヘラミガキ、体部中央横方向、体部下半縦方向のヘラミガキを施す。内面は、口縁部ヨコナデ、頸部斜及び縦方向の板状工具によるケズリ状ナデを施す。	・胎土 砂粒を少量含む ・外面 灰オリーブ色 ・内面 オリーブ黒色	口縁部外面凹線文4条を施す。
Y-44	短頸壺	C-4区 第7号墓南側 (Y-SX-1)	口径 12.8 体径 18.6 底径 6.2 器高 30.1	突出した平底に長胴形の体部を持つ。短い筒状の頸部に斜外方に開く口縁部を持つ。口縁端部は丸味を持つ。	外面は、口頸部ヨコナデ、体部右下がりの叩き目を施す。内面は、口頸部ヨコナデ、体部内面斜方向のハケメを施す。	・胎土 砂粒を少量含む ・外面 灰白色 ・内面 にぶい黄橙色	体部外面肩部、弧状の浮文を付す。
Y-45	小型壺	C-3区	口径 5.2 胴部径 6.4 底部径 3.2 器高 8.4	平底から内湾気味に立ち上がる楕円形の体部を持つ。口縁部は外反し、端部が下方に肥厚する。	外面は縦方向のミガキ。頸部はミガキの後指ナデ。口縁部内部から外部にかけて横方向のハケ。口縁部内面はハケの後指ナデ。体部内面は指オサエ。	・胎土 微小な砂粒を含む ・外面 灰黄色 ・内面 にぶい黄橙色	完形
Y-46	甕	C-3区 第2遺構面下層 (Y-SX-38)	口径 18.0 体径 18.8 残存高20.3	短く外反する口縁端部は丸味を持ち、頸部は「く」の字形に屈曲する。体部上半に最大径を持つ。	外面、口頸部ヨコナデ、体部縦方向のヘラミガキを施す。内面、口頸部ヨコナデ、体部横、斜方向のハケメを施す。	・胎土 砂粒を少量含む ・外面 褐灰色 ・内面 灰白色	
Y-47	甕	C-3区 第2遺構面下層	口径 25.6 残存高 6.0	短く外反する口縁端部は丸味を持ち、「く」の字形に屈曲する頸部を持つ。	外面、口頸部ヨコナデ、体部横方向のハケメを施す。内面、口頸部ヨコナデ、体部横方向のハケメ状ナデを施す。	・胎土 砂粒を少量含む ・外面 灰黄色 ・内面 にぶい黄橙色	
Y-48	甕	C-3区 第2遺構面下層 (Y-SX-38)	口径 28.0 体径 29.8 残存高16.2	短く外反する口縁部の端部は面を持ち、わずかに立ち上がる。頸部は「く」の字状に屈曲する。体部上半に最大径を持つ。	外面、口頸部ヨコナデ、体部斜方向のハケメを施す。内面、口頸部ヨコナデ、体部斜方向のハケメを施す。	・胎土 砂粒を少量含む ・外面 灰黄色 ・内面 灰白色	口縁端部襷描き斜格子文。
Y-49	短頸壺	C-3区 第1遺構面下層 暗青色粘質土	口径 11.3 体径 17.4 底径 5.8 器高 29.1	突出する平底から長胴形の体部を持つ。短い筒状の頸部に斜外方にわずかに伸びる口縁部の端部は丸味を持つ。	外面、口頸部及び体部上半縦方向のハケメ、体部中央横方向のヘラミガキ、体部下半縦方向のヘラミガキを施す。内面、口頸部横方向のハケメ、体部内面斜方向のハケメを施す。体部内面粘土紐の縫目目を4本残す。	・胎土 砂粒を少量含む ・外面 淡黄橙色 ・内面 淡褐色	
Y-50	小型壺	C-3区 Y-S D-45層部分	口径 8.0 胴部径 8.8 底部径 4.0 器高 12.6	平底を有し、比較的球形の体部を持つ。口縁部はゆるやかに外反し、端部は立ち気味に丸く終わる。	外面はハケ調整後、丁寧な縦方向のヘラミガキ。内面はハケ調整、口縁端部はヨコナデ。	・胎土 微小な砂粒を含む ・外面 灰白色 ・内面 灰白色	完形

3. 古墳時代

古墳時代に比定される遺構面は、5面検出しているが、内1面については、その検出範囲がきわめて狭小なため、第3層遺構面の上層遺構として扱っている。従って4つの遺構面に分類している。第2～第4までの3遺構面は、所謂古墳時代前期の範疇に入るものである。第1遺構面が、古墳時代中・後期の段階に比定されるが、明確な遺構・遺物の出土がほとんどなかった。

A. 古墳時代第1遺構面

基本層序Ⅲ層の上部堆積層である、黄褐色粘質シルト・灰褐色シルト・灰オリブ微砂と変化に富んだ堆積層がベースである可能性が高いが、遺存状況が悪く、明確に断定できない。第1遺構面の遺構としては、縄文時代の各遺構面同様、自然河川跡があるだけである。しかし、この河川の終焉時期は、たしかに中期以降であるが、流路内遺物の出土状況及び、B・C調査区内での土層堆積状況から見たこの河川は、前期まで遡りうる可能性が大きく、後述する第2遺構面を埋没させた砂の堆積は、この河川の氾濫である可能性が大きいと考えられる。この理解を支持すると、上下の遺構面を考える上で時間的目安となる河川遺構とその氾濫堆積が存在することになるため、独立した遺構面として扱った。



第51図 自然河川跡検出状況 (Bトレンチ・K-SR-1)

a. 遺構

中型自然河川跡 (K-SR-1) 第51図

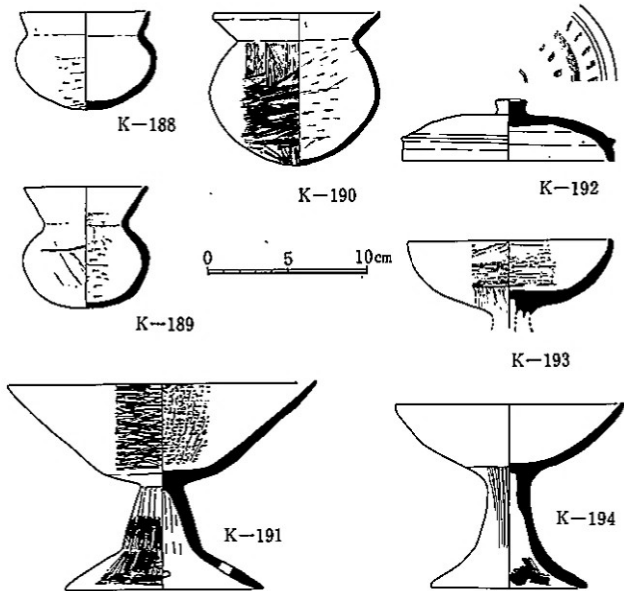
Bトレンチ北側及びB-1・2拡張区でその南肩を検出したものである。流水は、砂の堆積状況から判断して、検出範囲内では、南東から北西に向いていたと考えられる。検出した南側肩にあたる部分は、後世の自然小河川跡と重複して旧状は失われているが検出状況と大差はないものと考えられる。横断面形は横に長い台形状を呈し、幅の割に浅く、底のきわめて平坦なものである。よく観察すると、その平坦な川底に幅10m弱ほどのさらに0.2mほど一段深くなった部分が認められ、これが通常の川の流れてあったのかも知れない。流路内を埋没させている砂は、大きく3層に分割することができ、上位の砂層は、磨耗した須恵器・土師器片を多量に包含している。中位の砂層は、中に人頭大から拳大の偽礫を多量に含み遺物の包含量は、比較的少ない。下位の砂層は、比較的荒い粒子の砂で遺物の包含量は少ないが、磨耗の少ない、完形あるいは、大型の破片が出土している。時期的には、こうした土器の出土状態から、下位の砂層は、前期に、上・中位の砂層は、中期以降に比定している。

b. 遺物

この遺構面出土遺物は、出土遺構が、自然河川跡 (K-SR-1) 1本だけに限られるため、この遺構に伴った物だけである。

土器

土器は、遺構の中でも述べたように、河川内堆積の上・中層から出土する物は量的には比較的豊かであるが、磨耗を受けているものが多く、弥生式土器から、土師器・須恵器等多種にわたって包含されている。第52図のK-188・189・192~194等がそれである。個体の特徴は、土器観察表に示す通りである。図の中のK

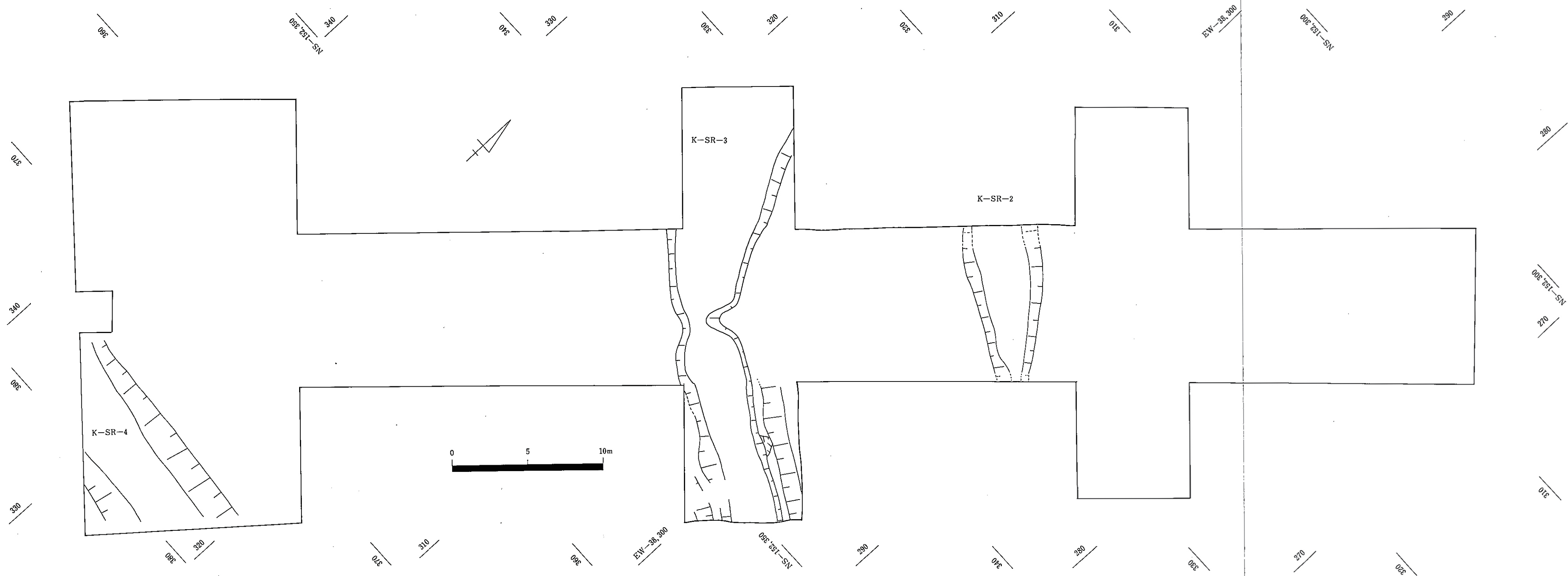


第52図 古墳時代河川跡 (K-SR-1) 出土土器

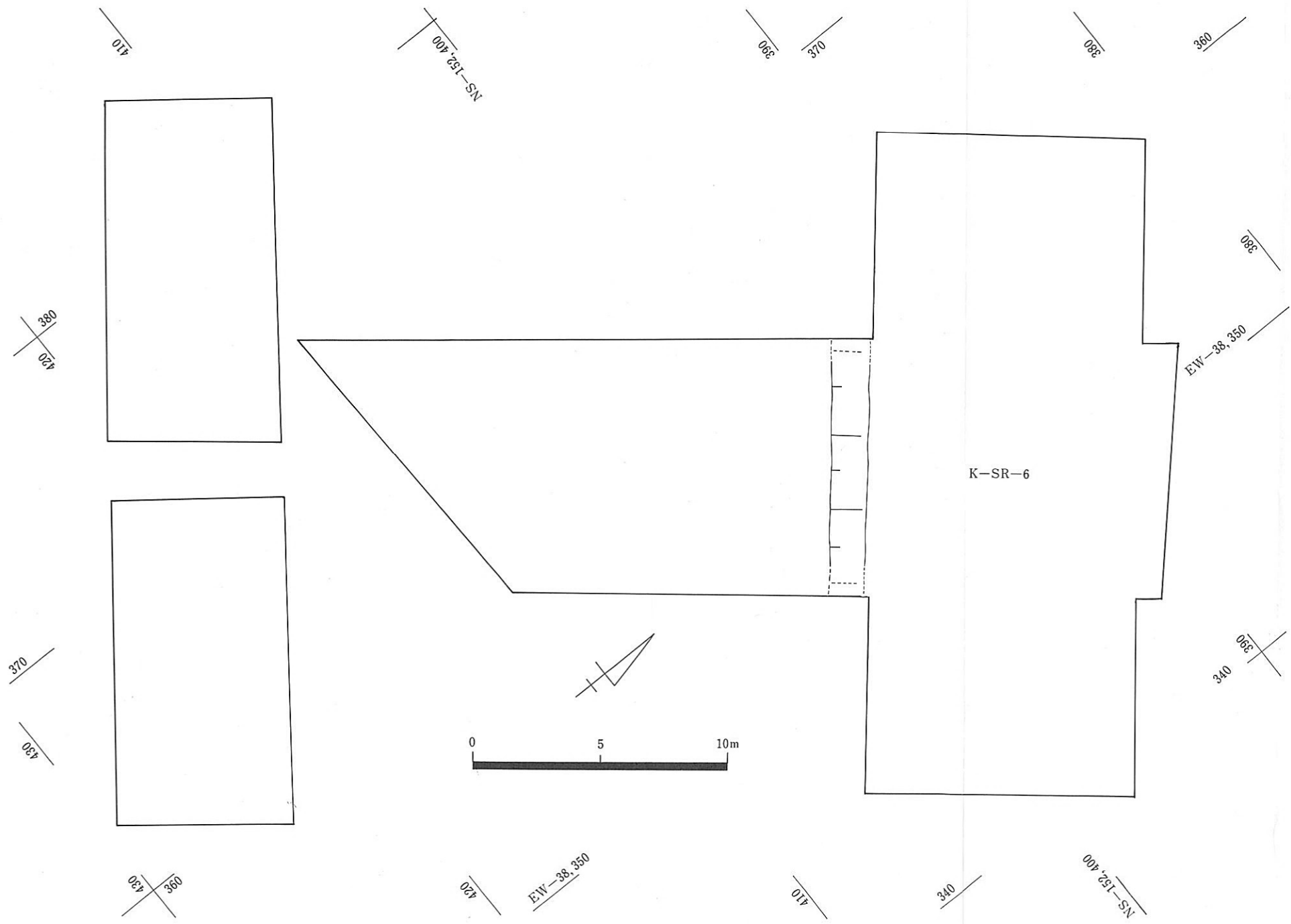
-192は須恵器もしくは陶質土器に分類されるものであるが、破片を含めてもこれ以外にはほとんど出土していない。下層から出土する土器は、同図の中のK-190・191がそれであるが、上・中層出土のものと比較してはるかに磨耗は少なく、殆ど認められないと言えるほどである。

その他の遺物

河川内堆積の中層下部より加工痕をもつ流木が、数点出土した。また、下層でも中層ほどではないが、偽礫が包含されておりその中の黒色粘土質のものから打製の石剣を検出している。



第53図 古墳時代第1遺構面(1)



第54図 古墳時代第1遺構面 (2)

B. 古墳時代第2遺構面

基本層序Ⅳ層中位の堆積層である暗赤灰色粘土をベースとした遺存状態の良い水田遺構面である。前述した河川跡（K-SR-1）の流路にあたる部分以外のすべての地点で検出されるため、その部分は、かなり広範囲に及ぶと考えられる。ただ、B地区中央付近では、後世の農地改良に伴う大規模な地形変更のため破壊されているが、ほとんどが、水田区画を復原できる状態をかうじて保っている。遺構面は、河川の氾濫堆積と考えられる微砂及びシルトで埋没しており、この遺跡の時間的に基準となりうる遺構面である。

a. 遺構

前期水田跡

前述したように微砂及びシルトで埋没しているため、非常に遺存状態が良く、検出も比較的容易であった。遺構の拡がりは、北側については、河川跡K-SR-1で一応途切れるが、第1遺構面の項でも述べたように、この河川と水田の時間的併存関係は土層断面観察による堆積状況の検討から十分に推察される。従って、この河川が増水時は別として通常では、十分歩いて渡りうる規模であったことを考慮に入ると、さらに北側にも遺構が拡がるのが、十分予測される。南への拡がりもC調査区の南端であるC-3・4拡張区での検出状況からさらに南へ遺構が拡がるのは確定的である。東西の拡がりも調査区が細長く設定されているため判断しにくい。水田立地は北東から南西に向かって穏やかに傾斜しており、さらに古い時代の自然堤防であった微高地にあたると思われる。低位に拡がる沼状湿地をさけて、こうした比較的水捌けの良い地域を水田化していると考えられる。こうした地形は東西にもかなり拡がっており、水田化されていた可能性がある。検出範囲内でも、そうした微地形にうまく順応した形で、大型・小型2種類の畦畔を使い分け水田を水利に都合が良いように区画している様子が判る。地形を追って水田の遺構を述べると、最も高位にK-田-95があり、大型畦畔であろうと理解しているK-田-70・71と72を、K-田-75と78を区画する畦畔のあたりまでが高位の水田区画と云える。しかし、この付近の水田面及びその区画は、後世の破壊もさることながら、高位であるにもかかわらず、比較的激しく氾濫の影響を受けて流失しており非常に遺存状態が悪い。最も高位の水田区画（K-田-95）が、河川の流路（K-SR-1）によって、切られていたり、高位の区画の中に帯状に低く拡がる部分（K-田-80・82・87・89他）があるが、その2区画（K-田-87・89）の水田面下に辛うじて流失を免れた畦畔の痕跡が遺存していることなどは、それを裏付けている。前者は、洪水による川岸の崩壊による水田面の流失、後者は、氾濫による水田面の流失とそれに伴う砂の堆積による埋没であり、粘土を再び張って新たな区画を設けたと理解している。この高位の区画に接して0.1m～0.2mほど一段低くなり、二条の大型畦畔で形成された水路（K-SD-1）にかけて徐々に平坦になっている。この等高線と平行している水路は、地面を掘り込まず、盛土した平行する畦畔の高まりだけで流路を形作っている。この水路から北側は、ほぼ東西南北の方位割りと合致する区画であるが、南側になってくると45°ほど方位割りとずれてくる。このあたりから

地形が南西からさらに西寄りに傾斜してくるためであろう。そのため、約0.2m~0.3mほどの比高差をもつ地形の変換地点であるC調査区の北側で、大型畦畔の南側に接して連なる水田区画が、検出した区画の中でも最も広いものである。次に水利に関して、現状では、Bトレンチ北側で検出したような水路（K-S D-2）で水を引き入れていたと考えられる。また、小型畦畔の幾つかには、水口が切られたままのものがあり、最終的には、区画から区画へと直接水利をしていたと考えられる。排水に関しては、考慮されていたのかどうか不明である。遺構の時期は、通常水田跡では遺物の出土がほとんどなく層位や、他遺構との関連からの比定に頼らざるを得ないが、前述した大型畦畔の盛土内より、2点の完形土器が出土しており、その出土状態から畦畔を作る時点で、盛土内に封じ込められたと考えて、何等かの祭祀に伴うものと理解している。この理解の上に、2点の土器の時期でもって、畦畔を築いた時期としている。

表4 古墳時代第2遺構面水田跡規模一覧表（その1）

（ ）は検出及び推定面積

番号	規模 (m)	面積	レベル (T.P値)	備考
1	(8.0)×(5.8)		5.38	足跡少数
2	(4.2)×(4.2)		5.35	足跡少数
3	?		5.40	一隅のみ検出
4	(1.0)×2.8		5.43	7との間に水口
5	(5.6)×(2.2)		5.37	
6	6.0×(1.2)		5.42	
7	6.0×3.0	18.0	5.38	4と10との間に水口
8	3.4×(2.2)		5.43	
9	(6.2)×(1.2)		5.43	
10	(5.4)×(3.0)		5.49	7との間に水口
11	(4.5)×4.2		5.45	25との間に水口
12	(4.8)×(1.0)		5.37	
13	(7.2)×2.5		5.42	
14	(3.5)×(2.0)		5.48	17との間に水口
15	6.8×0.5		5.39	
16	4.5×2.5	11.25	5.40	
17	6.5×(3.0)	(26.0)	5.39	14との間に水口
18	(5.7)×(4.2)		5.30	
19	(4.4)×(6.0)		5.35	
20	(5.3)×4.5		5.40	
21	(5.7)×4.6		5.35	
22	(2.5)×4.5		5.43	
23	(1.3)×4.0		5.35	
24	(5.0)×(5.0)		5.37	足跡多数

表4 古墳時代第2遺構面水田跡規模一覧表(その2)

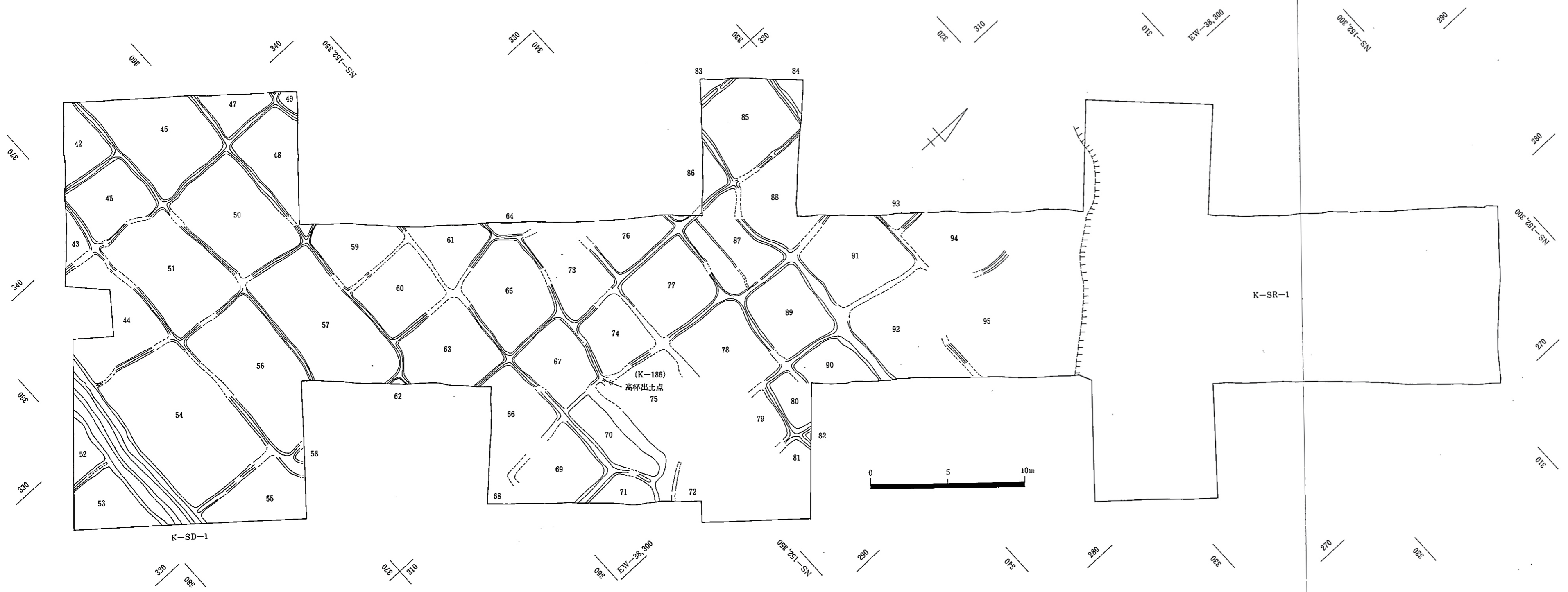
()は検出及び推定面積

番号	規模 (m)	面積	レベル (T.P値)	備考
25	(6.3) × 4.0	(26.0)	5.51	足跡少数。11との間に水口
26	(6.0) × 3.6		5.45	27との間に水口
27	(3.9) × 3.6		5.43	26, 30との間に水口
28	? × ?		5.51	一隅のみ検出
29	(2.5) × 9.5		5.43	31との間に水口
30	(7.6) × 5.0	(40.0)	5.40	27, 31との間に水口。足跡少数。
31	(7.8) × 5.0	(40.0)	5.46	29, 30との間に水口。
32	(8.0) × 7.3		5.46	大型畦畔と接する。
33	(7.5) × 6.0		5.46	大型畦畔と接する。
34	(6.2) × (0.8)		5.45	
35	9.5 × 8.0	76.0	5.49	38との間に水口。足跡多数。大型畦畔と接する
36	9.5 × 4.0	38.0	5.53	足跡多数。大型畦畔と接する。
37	(5.6) × (1.2)		5.58	足跡少数。
38	7.5 × (6.0)	(72.0)	5.38	35との間に水口。足跡多数。大型畦畔と接する
39	4.5 × (4.5)	(22.5)	5.55	大型畦畔と接する。
40	(1.1) × (3.5)		5.50	足跡少数。大型畦畔と接する。
41	(4.5) × (2.4)		5.5	大型畦畔と接する。
42	(4.5) × (3.8)		5.53	
43	(3.0) × (2.0)		5.55	
44	7.0 × 5.8	40.6	5.52	水路と接する。
45	4.5 × 4.2	18.9	5.51	足跡多数。
46	(8.5) × 5.3		5.38	
47	(3.5) × 3.8		5.38	
48	8.0 × 4.0	32.0	5.39	
49	?		5.36	一隅だけ検出。
50	7.6 × 5.2	39.52	5.38	
51	8.0 × 5.0	40.0	5.56	
52	(3.3) × (2.5)		5.50	水路と接する。
53	(4.5) × (3.6)		5.50	水路と接する。
54	9.2 × 5.8	53.36	5.47	水路と接する。
55	(4.4) × 6.0		5.53	水路と接する。
56	9.6 × 5.0	48.0	5.61	
57	10.0 × 4.8	48.0	5.57	
58	?		5.58	一隅だけ検出。
59	5.0 × 4.0	20.0	5.57	
60	5.0 × 4.0		5.52	

表4 古墳時代第2遺構面水田跡規模一覧表(その3)

()は検出及び推定面積

番号	規模 (m)	面積	レベル (T.P値)	備考
61	(5.0) × 4.2		5.54	
62	?			一隅のみ検出。
63	5.3 × 5.8	30.74	5.58	
64	(1.0) × (1.5)		5.59	一隅のみ検出。
65	6.0 × 5.0	30.0	5.63	
66	4.5 × (4.0)	(22.5)		
67	4.7 × 4.0	18.0		
68	(3.0) × (1.3)		5.59	
69	4.2 × 4.8	20.16	5.73	
70	6.8 × 2.0	13.6	5.62	71との間に水口。大型畦畔に接する。ため池の可能性。
71	(3.0) × (3.0)		5.76	70との間に水口。大型畦畔に接する。
72	(2.0) × (1.1)		5.77	大型畦畔に接する。
73	6.2 × 3.3	20.46	5.65	
74	4.0 × 3.3	13.2	5.70	
75	(2.3) × 4.0			
76	(3.0) × 4.0		5.59	
77	4.7 × 5.0	23.5	5.69	
78	5.6 × 4.6	25.76	5.72	
79	(3.8) × (1.5)		5.84	
80	3.5 × 2.0	7.0	5.63	
81	(2.3) × (1.0)		5.76	
82	?		5.64	一隅のみ検出
83	?		5.48	85との間に水口
84	(3.0) × (1.3)		5.55	
85	5.0 × 5.2	26.0	5.57	83, 88との間に水口。足跡多数。
86	(3.3) × 4.5	(22.5)	5.63	
87	5.5 × 4.0	22.0	5.63	
88	5.2 × (5.0)	(28.6)	5.56	85との間に水口。
89	4.8 × 4.0	19.2	5.64	
90	(3.6) × 3.4	(13.6)	5.71	
91	4.5 × 5.5	24.75	5.77	
92	(7.5) × 4.0			
93	(1.5) × (1.7)		5.76	一隅のみ検出。
94	5.5 × (3.5)		5.79	
95	(8.0) × (6.0)		5.82	



第55図 古墳時代第2遺構面(1)

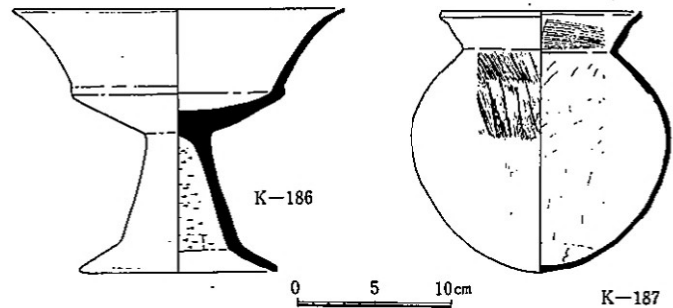


第56图 古墳時代第2遺構面(2)

b. 遺物

土器

遺構に伴って出土したのは、遺構の中でも述べたように第57図に示す2点だけである。まず、K-186とした高杯であるが、出土状態としては小型の畦畔が途切れて大型の畦畔状の高まりとなる部分で、この高まりを除去する過程で



第57図 古墳時代水田跡大型畦畔盛土内出土土器

土圧で押し潰された状態で検出した。本来は全くの完形であったと考えられるが、土器自体が非常に風化して脆くなっていて取り上げ時に一部を欠いたため、現状のようになっている。今一つの、K-187とした甕は、口縁を下にして畦畔内に埋め込まれた状態で出土したにもかかわらず、器内は空洞のままであった。これら2点の土器の個々の特徴については、観察表(表5)に示すとおりである。

c. 小結

この遺構面で検出したのは、水田跡とそれに伴う溝で、その他の遺構は皆無であった。まず、水田遺構の拡がりであるが、これは前述したようにC調査区のさらに南東側にも拡がるのは間違いなく、併存の可能性が考えられる第1遺構面で報告した自然河川(K-SR-1)のさらに北西への拡がりも水田面を形成している土層の存在から想像できる。そう考えると、実際にB・C調査区で検出ただけで南北130m、東西110mの面積があり、その拡がりは数倍から十数倍のかなり広大なものと考えられる。次にその経営年代であるが、遺構面が周溝墓の営まれた面よりも上層で検出されたため、周溝墓の年代よりも後出であることは間違いのない。しかし、出土した土器の形式と周溝墓から出土した土器の最も新しいと考えられるものとの間にあまり差は認められず、やはり布留式期の前半を考えている。従って、この短期間に、このあたりが墓域から水田域へと土地利用の変化が見られたことは、今後多くの問題を提起したのと考えている。

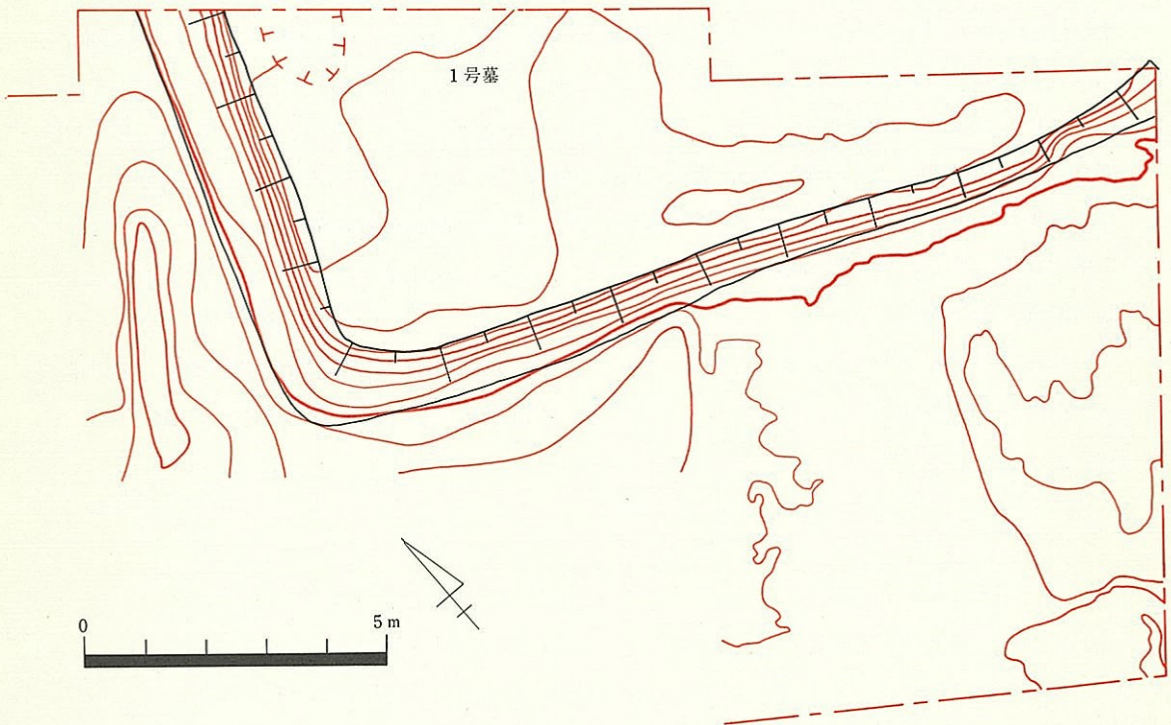
C. 古墳時代第3遺構面

基本層序Ⅳ層の下部、暗オリーブ灰色からオリーブ黒色を呈するシルト層上面がそれにあたる。この遺構面は、K-SR-1の流路にあたる部分を除くB調査区の全域とC調査区の全域で検出される。地形としては、B調査区中央付近を最も高位として北西及び南東方向には穏やかに低くなってゆき、北側では、K-SR-1の流路の影響で土層が流失しており判断できないが、南側ではC調査区の北端を除いて、このシルト層が認められず、粘土層に変化している。遺構はこのシルト層の分布する地域でのみ認められ粘土層が広がる地域では、認められない。検出した主な遺構は、周溝墓6基と、これらと直接関連を思わせる土器集積6ヶ所である。またこの遺構面上層で自然流路を1本検出しており、上層遺構として合わせてここで記述する。

a. 遺構

1号墓 (K-1号墓)

Cトレンチ及びC-2拡張区で2辺とそれに挟まれた隅部分を検出ただけで、規模は、不明である。形状は、検出部分からは、方形と考えられ、明確な周溝は認められないが、縁辺に沿って非常に浅い溝状の窪みが認められる。マウンドは、残りも悪く、ベースと考えている暗灰色シルトの上に盛土らしきシルトや粘土などのブロック土が若干認められたが、厚さが1cmにも満



第58図 1号墓平面、及びコンター図

たずその性格は不明である。従ってマウンド部分の層序としては、灰白色粘土が堆積している。これらは、比較的広範囲に認められる自然堆積層であるため、盛土が存在したとしても、これらの層が堆積する時点ですでに失われているものと考えている。主体部は、盛土の中で納まっていたらしく、遺存していなかったが、このシルト層上面で土器がやや窪んだ所に集中して出土している（K-SX-1）。遺物は、この他にもマウンド上から縁辺部にかけて破片が少量出土し、若干マウンドから浮いた状態でも甕が2個体分出土している。

2号墓（K-2号墓）

Bトレンチ南東隅からB-6拡張区の南西隅にかけて、周溝の一部かと考えられる溝状窪み及びマウンドらしきものを検出した。他にこの周溝状の窪みからマウンド状の高まり付近に遺物が集中して出土したため（K-SX-8）、一応、他と同様の墓遺構が南側に遺存している可能性があると考えている。検出状況が、こう云う状態のため、形状・主体部遺存の有無等一切不明である。时期的には、埋没状況、出土遺物等から、他の5基と大差ないものと考えている。

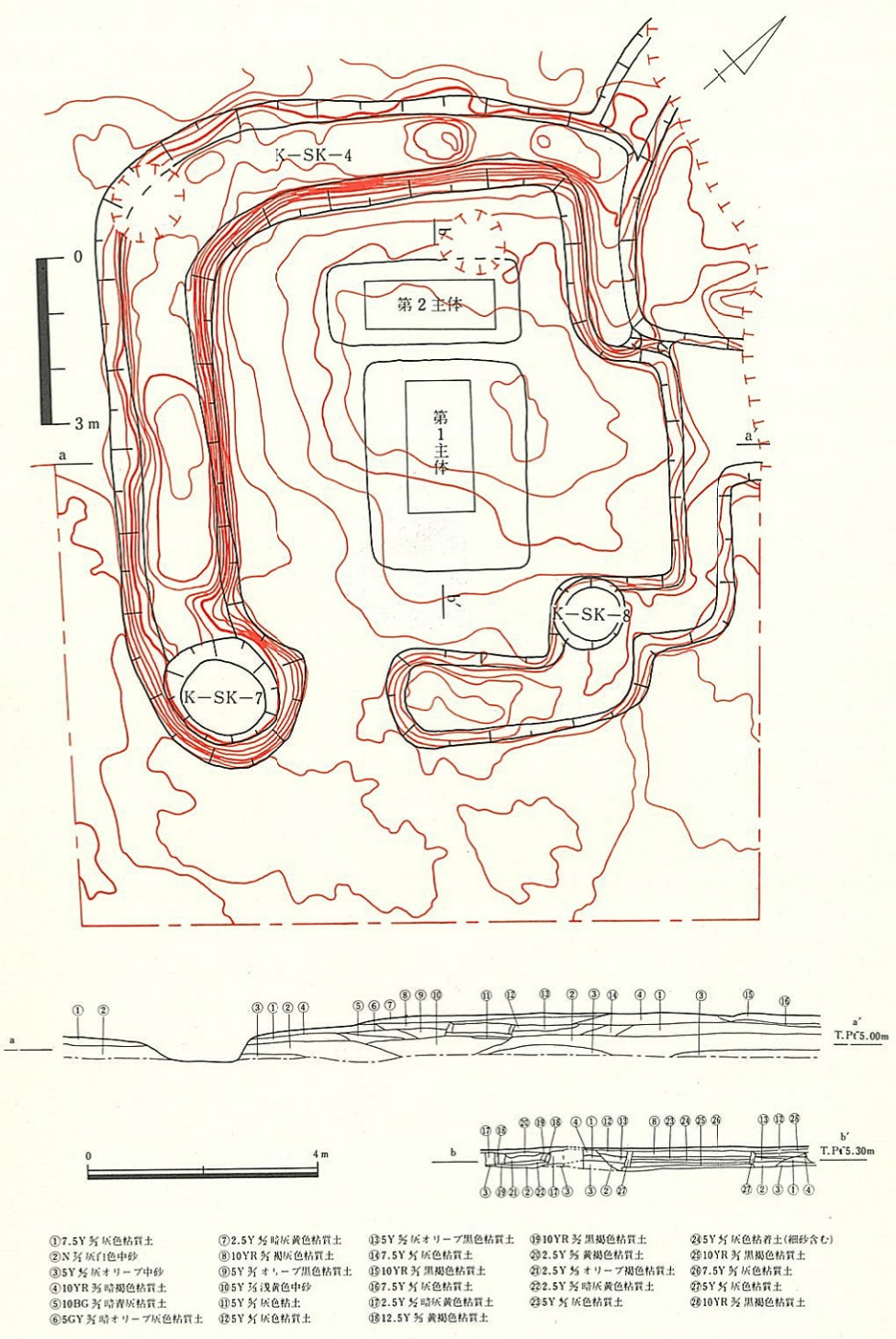
3号墓（K-3号墓）

Bトレンチ中央部やや南寄りの地点からB-4拡張区にかけてほぼその全容を、検出した。形状は、長方形を呈するマウンドの長辺中央部やや南寄りにこのマウンドを約1/3に縮小したような、比較的小規模な突出部を有する形態に築かれているが、前方後方形と呼称するには、突出部が狭小であり、「突出部を有するマウンド」として位置づけている。全周する周溝を有しており、マウンドの北西と南西を画する2

辺は、溝肩が急勾配で深く、底部も平坦な面を有し、かなり良好に遺存している。これに比べて、他辺を画する周溝は、3号墓東半分が上層の河川状遺構（K-SR-3）が砂で埋没して流れを変えて氾濫時の影響を西側よりも強く受けていることを考慮しても、溝幅がこの2辺の周溝と比べてやや狭く、さらに大きく異なる点として築造当初から浅くしていたと考えられることである。中でも突出部付近のものが最もその傾向が顕著である。マウンドは、図で示したように、あまり

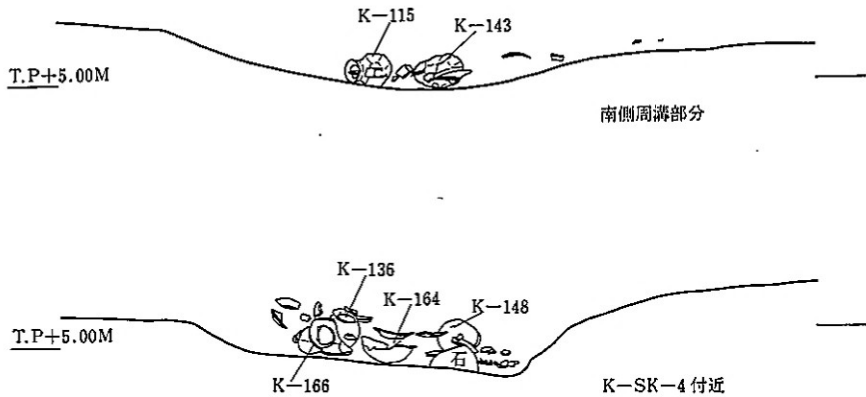


第59図 2、6号墓、K-SX-8平面、及び
コンター図



第60図 3号墓平面、及びコンター図

主体部の掘り方がさらに明確に検出できた。主体部は、これと直交する形で、北西にさらに1基の、合計2基がT字形に配置されていた。主体部は、いずれも棺及

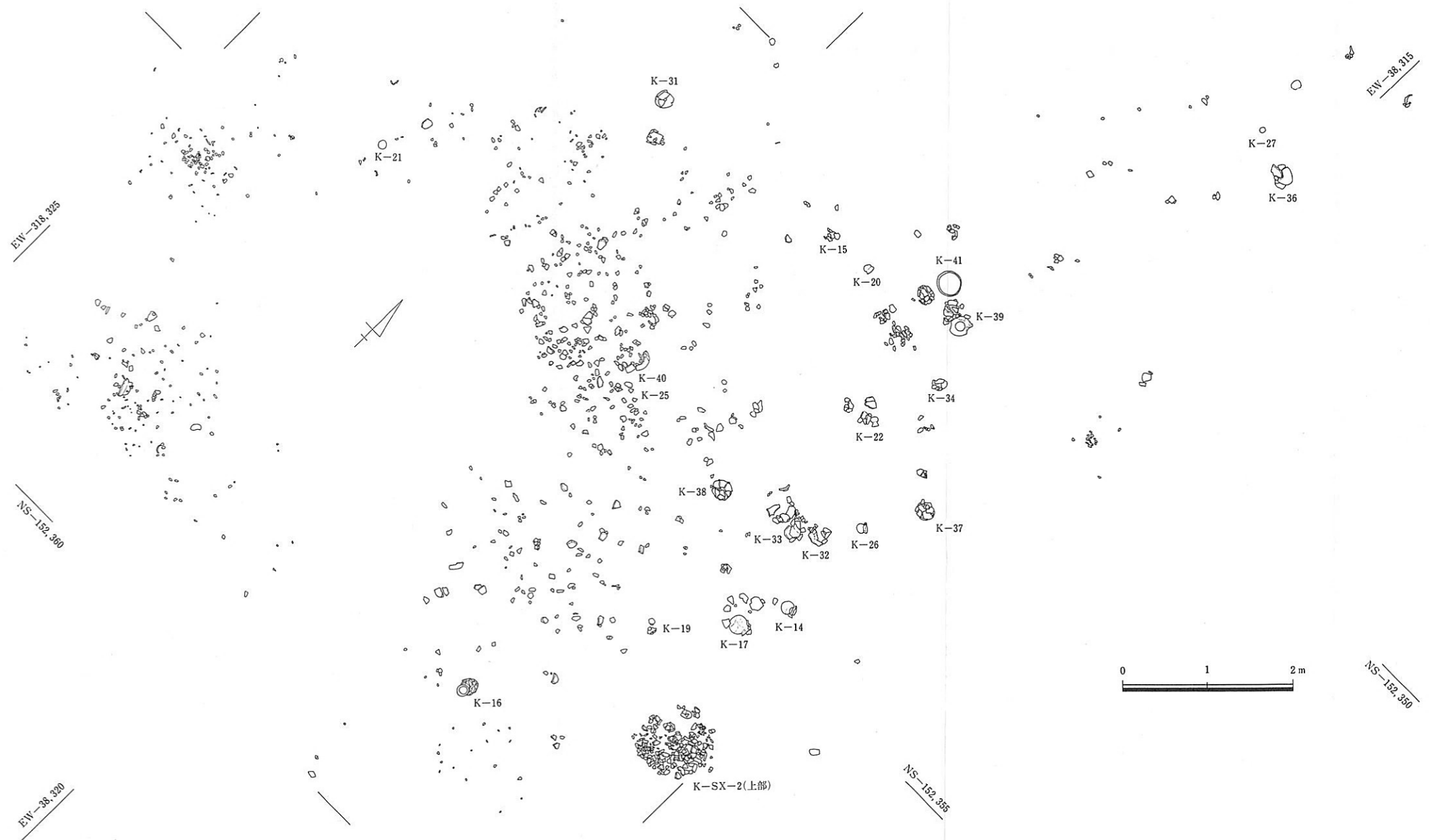


第62図 3号墓周溝内土器出土状況図

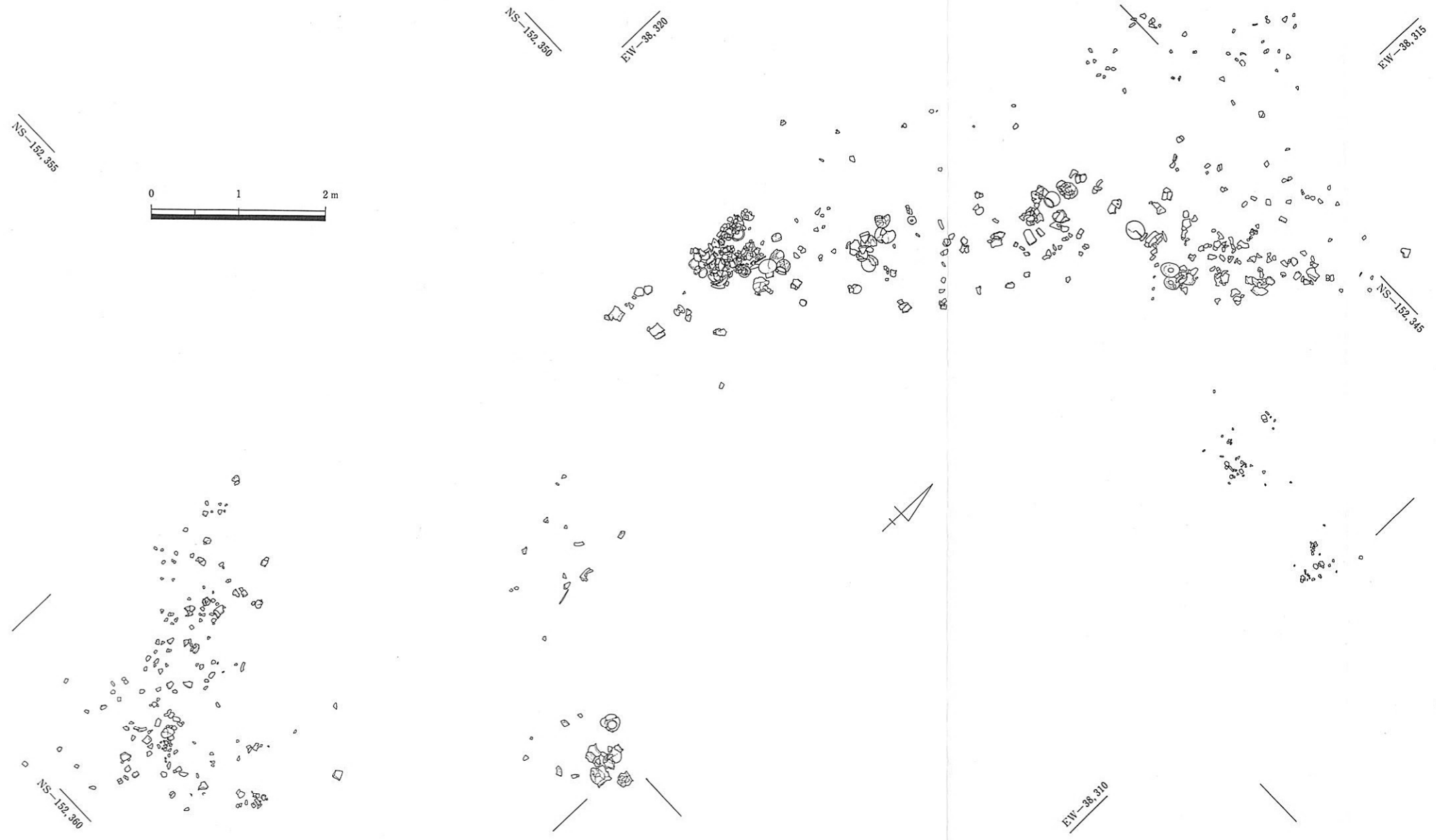
び人骨等は遺存しておらず、副葬品等も認められなかったが、棺については、墓壇の掘り方と共にその痕跡が認められ、2基共に箱式木棺を直葬していたものと考えている。墓壇は盛土の部分では浅い横断面皿状を呈し、ベースとなるシルト層は、棺より0.2mほど縦・横とも大きい長方形の土壌を掘り込んでいる。底部は、長辺に沿って両側共溝状に深くなっていた。これらの諸特徴において、2基の主体部は、その規模以外で非常によく似ている。この墓に伴う施設として、前述したマウンド北西側の周溝内で長方形土壌(K-SK-4)とマウンド南側隅周溝内で円形土壌(K-SK-7)及び突出部の東側付け根の所で円形土壌(K-SK-8)を、検出している。他にマウンドの南側やや外れた地点で周溝が途切れ、陸橋を検出している。遺物は、土器がこの墓に伴って数多く出土しており、その出土状況からそれらを分類して扱っている。墓の検出当初にマウンドの北西と南西側に接する形で検出した土器群、これらの土器を取り上げた後、さらに掘り下げて検出していく過程で周溝外面及び南西側の土器群、そして周溝を掘り下げた地点で周溝内より出土した土器群の3群がそれである。これらを順に3号墓上層土器群(K-SX-9)、3号墓周溝外土器群(K-SX-2・3・4・他)、3号墓周溝内下層土器群としている。出土遺物は、ほとんどがこの3群からの出土であるが、他に周溝内土壌(K-SK-7)やマウンド上からも若干出土している。土器以外の遺物は、周溝内や土壌内から木片の出土が散見される他、周溝内土壌(K-SK-4)や土器集積(K-SX-3・4)などから、人頭大或いは、拳大の石が出土している。

4号墓(K-4号墓)

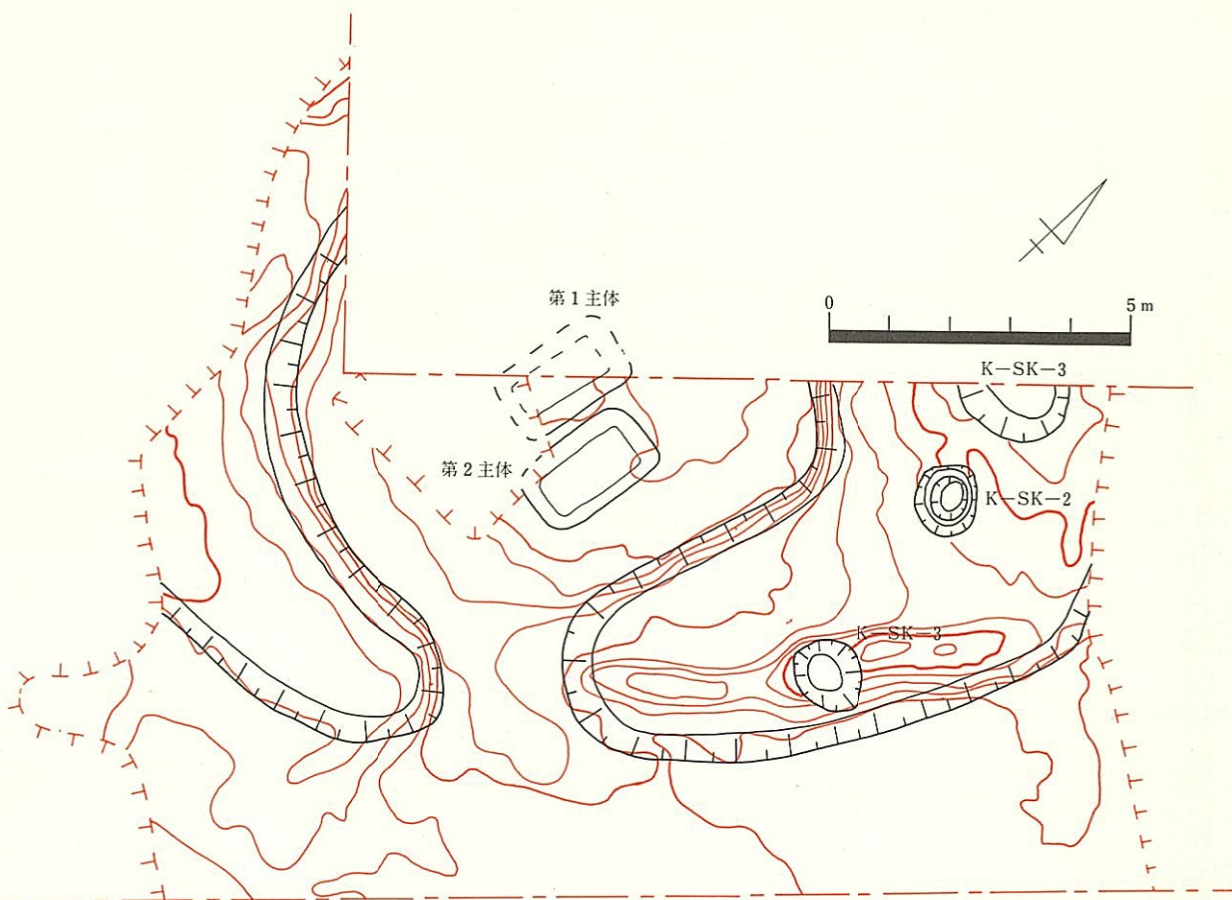
3号墓の北側、BトレンチからB-3拡張区にかけて、全体の3/4ほどを検出した墓である。形状は長方形を呈するマウンドを持ち、幅が広く深さは浅い。横断面形が皿状を呈する周溝がマウンドの周辺を巡っている。周溝は、マウンド東南部隅をややはずれた所で途切れ、陸橋状の施設を設けている。他にこの周溝内では、前述の3号墓でも検出した周溝内土壌がマウンドの東側



第63図 3号墓上層、及び周溝外土器群出土状況図



第64図 3号墓周溝内下層、及び周溝外土器群出土状況図

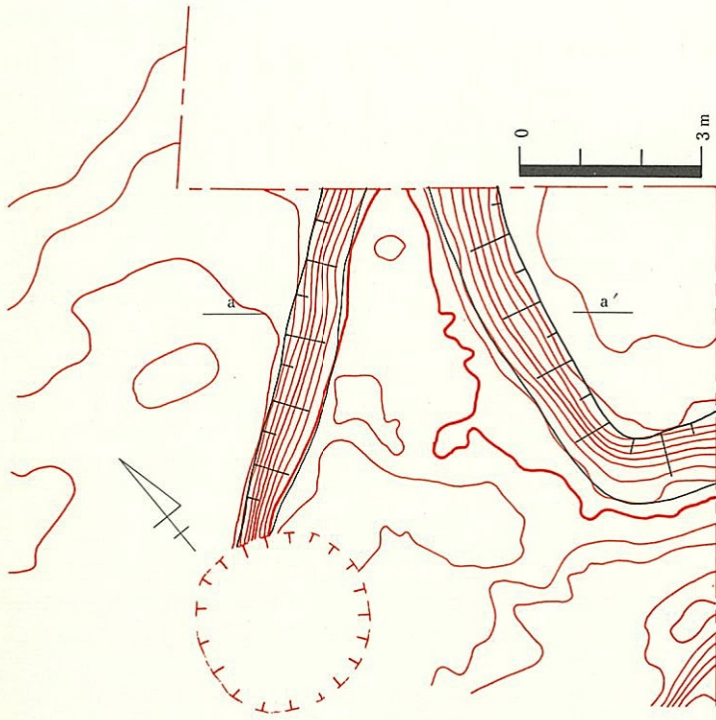
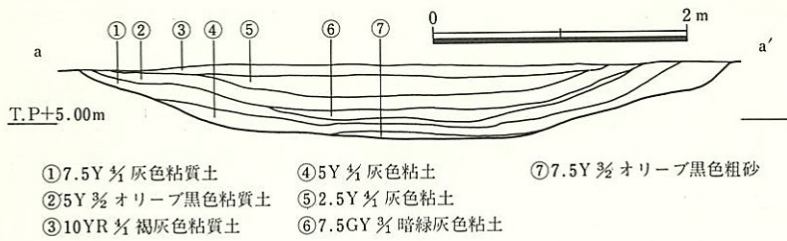


第65図 4号墓平面、及びコンター図

及び北東隅あたりから3ヶ所検出している。4号墓自体は3号墓と同様に、上層遺構である河川（K-SR-3）によって、周溝南西部分が流失しており、周溝北東部分は同じく河川（K-SR-1）によって流失している。このため、遺構遺存状態は決して良いとは言えず、マウンドは図で示したように、あまり高くはなく、盛土らしきものが僅かに遺存しているだけである。主体部は、2基確認しており、ともに木棺を埋納していたと考えられる。掘り方は、マウンドを覆う灰白色粘土を除去するとすぐに認められ盛土内から掘り込まれており、底は、古墳時代第4遺構面の真上まで至っている。いずれも棺身及び人骨等は遺存しておらず、遺物の出土も認められなかった。遺物はこの墓においても、3号墓同様、周溝内及び周溝外から多量に出土している。

5号墓（K-5号墓）

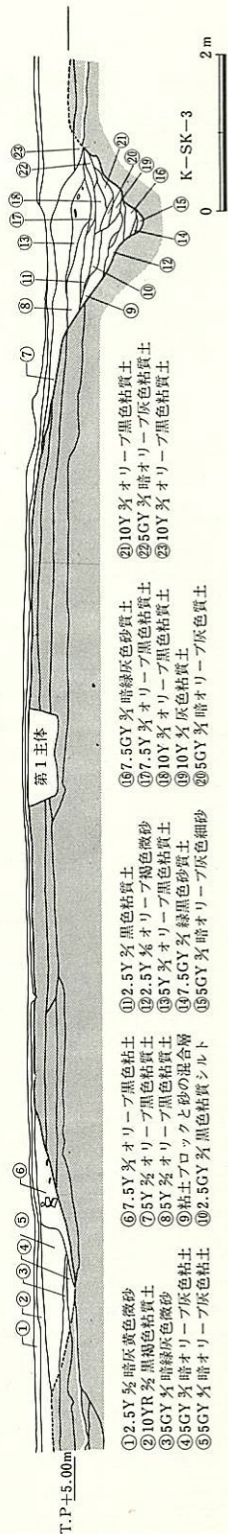
B-6拡張区東隅で、その一部を検出しただけである。形状はその2辺の一部を検出しただけで、正確なところは分からないが、方形を呈すると現状では考えている。周溝状の施設は認められず、マウンド南側の辺で、隅を完全に避けた位置に陸橋状の高まりが埋められている。これは盛土によるものではなく、5号墓南西側を大きく窪地状に掘り窪めており、この時点での掘り残



第67図 5号墓平面、及びコンター図

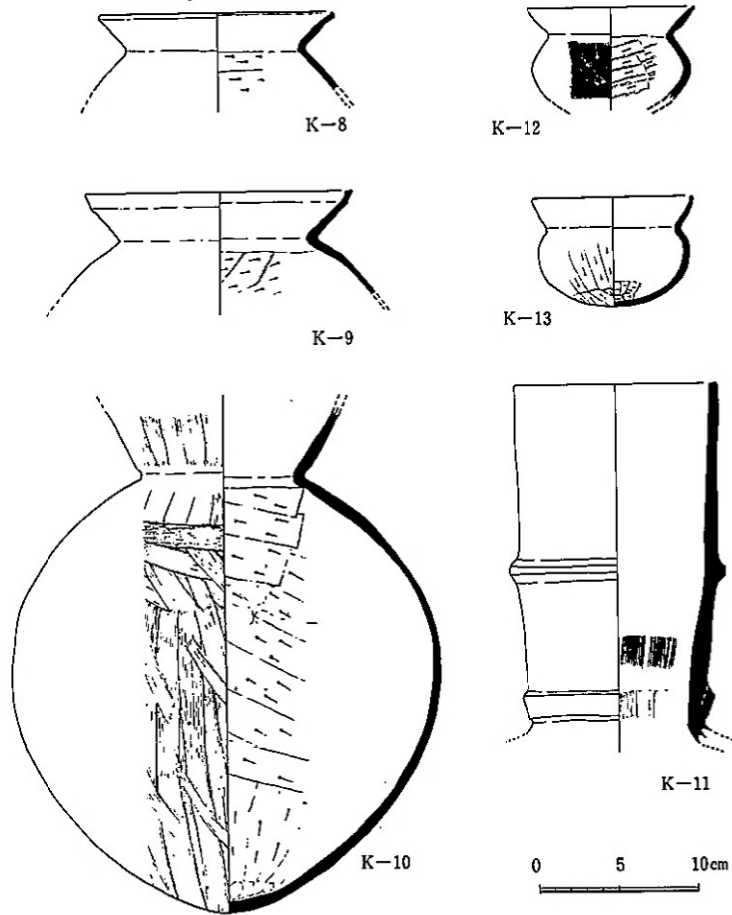
しと考えている。ただこの掘削が、5号墓に伴うものであるか、或いは他の墓に伴うものであるか、また、どう云う目的によるものなのかについては、不明である。盛土は、失われて遺存しておらず、主体部も、検出されなかった。ただマウンド除去中、おそらくマウンド中央付近と考えられるトレンチ東側隅で、鉢が完形で1点上向きにやや傾いた状態で出土しており、掘り方の存在は、何度も精査したが認められず、主体部に伴うものではなく、マウンド築成に伴うものと理解している。他に遺物は、マウンド肩付近から若干量出土している。

6号墓 (K-6号墓)



第66図 4号墓南北方向土層断面図

- 8) から出土したものである。現時点では6号墓ではなく2号墓に関連させて考えている。出土した層位は、甕(K-8・9)と壺頸部(K-11)が、他の3点の土器よりも上位から出土しており一応時間的な前後関係が考えられる。甕は図化して報告しているのは2点だけで、これらも口縁端部の特徴に形式的な差異が指摘できる。壺(K-11)は他に類例を知らないもので、埴輪との関係を示すものと考えたくなる形状である。以上の事柄からやはり布留式の前半、1号墓より後出する時期を考えている。しかし、遺構のところでも述べ



第70図 2号墓出土土器(K-SX-8)

べたように2号墓の存在が明白ではなくあくまでも存在が考えられるだけであるので、これら6点の土器は、調査区外に位置する可能性のある周溝墓の営まれていた時期を示しても、築造時期とは直接結びつけるのは危険であろう。K-14~171とした土器は3号墓に伴うもので、総量の約3分の2を図化して報告している。3号墓上層堆積出土としたK-14~41は、周溝がかなり埋没し僅かに窪み状を呈する様になった時点で堆積したものと理解している。K-42~103の土器は3号墓周溝外土器集積としている状態での出土である。一応その分布状態は4箇所に集中しており、それぞれにK-SX-2~4・6の遺構名をつけて区別しているが、個々の土器集積の形成過程及び、土器集積間の前後関係などは、周溝外の堆積層が薄くそこに大量の土器が包含されていると言う状況のため土層からは判断できなかった。遺物の観察からするとK-SX-2が後出であり、上層堆積出土のものとの時間差が、最も少ないと考えている。K-SX-3・4・6はこれに先行すると考えている。周溝内下層出土としたK-104~171の土器は、周溝内に堆積したものは考え難く築造後周溝内に堆積層が形成される以前にあまり破損していない状態で入れ